

南米アコンカグア 遠征報告書

京都府立大学山岳部
アコンカグア遠征隊 2012

巻頭言

京都府立大学山岳部のアコンカグア遠征隊報告を、ご支援を賜った皆様のお手元に届けることができるようになりました。

時間の経つのは速いものです。彼らから登頂成功の一報が入ったのは現地時間 2012 年 3 月 7 日 12 時 20 分のことですから、すでに 1 年以上も経過してしまっています。

この遠征は、山岳部員の学生達が、2009 年の鳴沢岳の遭難死亡事故のあと、大学山岳部としての活動を原点からとらえなおす過程で産まれてきたものです。その意味で、この遠征自体がとても強いメッセージ性を帯びていることは疑う余地がありません。かれらが何を考え、そして何を実現しようとしたのか、それを文書のかたちで遺すことには大きな意義があると思います。

もとより若い学生たちで進めたことですから、社会常識からみて勝手気ままに映ることも多々あったと存じます。いろいろご注意をいただいた方々には、この場を借りて御礼申し上げます。この報告書が、我々に様々なご注意いただいた皆様方にたいする真の御礼になることを願ってやみません。

京都府立大学山岳部顧問
牛田一成

目次

巻頭言	
祝辞	1
遠征概要	
隊員紹介	
地図（概念図）	
行程断面図、各隊員行動表	
行動記録	
遠征前半（2/17～2/29）	
遠征中盤（3/1～3/9）	
遠征後半（3/11～3/19）	
各係り報告（方針と結果、評価）	
装 備	
医 療	
食糧・燃料	
輸送・梱包	
保 険	
会 計	
渉 外	
通 信	
気 象	
随 筆	
二ヵ年計画	
計画書作成、各種記録、議事録、所信表明、必要書類	
2011年度を振り返って	
提 言	
その他 自由記述 参考情報	
参考文献&参考 Web ページ	
Summary	
新聞・報道・報告会	
御礼	
編集後記	

山岳部 アコンカグア登頂・おめでとう

京都府立大学山岳会
塚本圭一

今回の登山は私の評価は、少し甘いですが、5段階の「5」である。南アメリカ最高峰登頂は人生のなかの勲章の一つだろう。ノーマルルートであっても高所順応が難しく、強風、20日間の時間制限の中など難しい山である。

スライドで見た山々は殺風景で砂塵と熱風を感じ、私のこれまでの山とは違っていた。私の体験したカラコルム、中国領パミールでの登山は日数も食料も豊かだった。高山症状がでて、体質的なものを除けば、10日もたてば回復した。もちろん、登山のために3ヶ月間の休暇を取ったり、仕事を辞めたりすることは人生の中では大変なことであった。

私の登山の師匠は、同志社讃嶺岳会の野淵輝君で、それなりの「個人」の世界であった。彼とは後の顧問でもあった徳永先生の昆虫学教室の仲間となった。

彼は金比羅岩場では麻ザイルでの岩登りを私に教えてくれ、書斎の山の本は、モルゲンターラーとか、ヨーロッパ・アルピニズムに関するものなど多く、いろいろとお借りして読むことになる。最近の若者は本を読まない。私は山の心象風景とか哲学的思考の熟成にも山の本の助けを得てきたのだろう。

1965年、私たちも今西先生の『カラコルム』のミナピン氷河舌端に立ち、小山、高田、上田君らと最初のヒマラヤ登山を体験し、頂上を踏めなかったが、ヒマラヤ学への道となる。そして、私の「山の牧場」という終生の学問のテーマとなった。私の「リーダー学」は、RCCIIの代表画家の上田哲農さんとの出会いで、ウシバ隊の隊長に選ばれ、東京のお宅にご挨拶に伺う。上田さんはアトリエで絵筆を動かしながら、山の話ではなく庭にやってくる野鳥の話を読まれる。山の助言を得られるという期待は裏切られ、山の哲学というか、「山に入る人の心」を教わった。

ロシアへの船中のバーで一緒した一人の怪物が奥山章さんで、奥山さんの話はエベレスト南壁への挑戦前日という具体性があった。この時の話が、1989年のコングール北陵の登攀隊長・須藤健志君のタクティクスそのもので、全員9名が登頂できた。タクティクスは、デザインであり、人間的葛藤とか、チームワークの原点でもある。

1977年のK2は学術隊で参加し、吉沢一郎さんの「読み書き登る」の学習の日々であった。山頂に立った隊員は芯からの「人間的強さ」を持っていた。最近、その一人、重廣恒夫さんの講演を聴いたが、彼は高所でのゴミ処理、酸素ボンベの指導など適切だった。21世紀になってK2隊のゴミ処理計画は高い評価を得た。重廣さんは、現在も真摯に山に取り組み啓蒙活動をやっている。

報告会での君たち隊員の示した、「自分たちの登山」については、私たちのそれとは次元も思考も違っているが、自分なりの山・登山の哲学はこれから熟成されるものだろう

う。もう一つ「時流に揺るがないオーソドックスな山の実力」という表現に隊員の思いと決意があったのだろう。最近の登山は「時流意識」がある。君たちは「目指すもの（自由な発想）」と決断している。ヒマラヤを選ばずアコンカグアを選択した意味も大きいだろう。そして君たちは、表現を変えて「世代ごとの自分たちの登山を大切に」と結ぶ。

登山は本来、自己責任と自己管理という厳しいものであり、他者の管理とか規則の中にあるものではない。私たちの登山は、常に「自由であること」を求めて山に登ってきた。自由であることは楽しいが、厳しいことであることを忘れがちである。

現在、私の仕事は、昔のフィールドノート再読で、忘れていた若い日の思いとか、思考が発掘でき、そのことを新たなベースとしていろいろな学的生産がある。このことは今西錦司先生の「フィールド科学」のあり方でもあった。良き山があることを祈る。

アコンカグア遠征・登頂を祝う

京都府立大学山岳会
井川 裕

アコンカグア遠征の成功、おめでとう。アコンカグアの登頂を心から祝福したい。2009年4月の鳴沢岳遭難事故を乗り越えて京都府立大学山岳部は2010年5月にはいち早くアコンカグア遠征を標榜し、二年間に亘る7000メートルの高峰を目指したトレーニングを経て見事この度の登頂成功を勝ち取った。アコンカグア遠征の実現には幾多の困難があったと思うが、鳴沢岳遭難事故発生時の現役学生による遠征隊の実現と成功に大きな意義を認めたいと思う。

2009年4月の鳴沢岳遭難事故の発生により、一時は60有余年の歴史を持ち国内外に幾多のパイオニアワークを記してきた府大山岳部の存続を懸念する声もあった。我々は鳴沢岳遭難事故を引き起こした要因（直接・間接）に真摯に向き合い、情報化社会の進展や登山行動の変容のなかで見落とされ失われてきたものを見つめ直し、高い危機管理意識のもと府大山岳部の特質と伝承システムを再構築するべく登山活動を継続することを府大当局に申請してきた。（「山岳部活動の指針」平成22年7月提出）幸いにも竹葉学長（2010年7月時点）をはじめ関係諸先生の承認を得られ、山岳部活動は継続できることとなった。

このようにして今回のアコンカグア遠征隊の実現には府大の多くの教職員や森なかま、山岳部OB、鳴沢岳遭難事故調査委員会メンバー（平林克敏氏、粟飯原一成氏、宮永幸男氏、横山宏太郎氏、松林公蔵氏）をはじめ府大山岳部の復活を願う多くの方々からの温かい励ましとご支援をいただいた。こころよく息子を送り出してくださった遠征隊員のご家族（ご両親）には言葉では言い尽くせぬほどの感謝の気持ちでいっぱいである。それぞれの隊員は父母の思いの深さを知り、遠征計画遂行にあたり隊員相互の信頼と紐帯をより深いものとしたと思う。

登山の安全は知識経験判断力・体力・技術力の総合的な関係の中で決まる。大学時代の登山活動への投入時間は限られている。いかにパイオニアワークを発揮しパーティシッップを練り上げるか。組織の消長に見失うことなく、「今、自分は何処にいるのか？」「自分にとっての遥かな山はどこにあるのか？」「大いなる山旅はどこなのか？」時には少し永い時間スパンで、俯瞰する目線でいま向かっている登山を見つめて欲しい。そして本来の位置を取り戻すべくチャレンジを続けて欲しい。もとより登山は自己責任が基本である。何故、仲間とともに登るのか？確りとした目的意識を共有する仲間との登山は、登山の楽しみを倍増する。アコンカグア遠征で得られた知識や経験や行動力は遠征隊員に限らず他の部員とも共有して欲しいと願っている。個人のノウハウから部のノウハウへ広がったときに府大山岳部の復活がなされたと言えるだろう。

遠征概要

文責：寿栄松孝介

遠征隊名： 京都府立大学山岳部 アコンカグア遠征隊 2012
Kyoto Prefectural University Alpine Club Aconcagua Expedition 2012

目標ルート： 南米 アコンカグア ポーランド氷河ルート Polish glaciar route

遠征の目的：

- ① 京都府立大学山岳部単独による海外遠征登山隊を組織すること
- ② 南米最高峰アコンカグア（6962m）に登頂すること
- ③ 海外での登山活動を通じて人間的な成長をすること

期間： 2012年2月17日（金）出国～3月19日（月）帰国（登山期間は20日間）

計画概要

- 2月17日～： 関西空港 18:15(DL182 便)発＝19日メンドーサ市（アルゼンチン）
20～21日： 登山許可取得 買出し 情報収集 登山準備
22～24日： メンドーサ＝プンタ・デ・バカス～プラザ・アルゼンチナ B.C.
25日～： 登山活動開始 荷上げを兼ねた高所順応
(3月8日頃 ポーランド氷河より登頂し、ノーマルルート下降の予定)
- 3月14日： 登山活動終了（メンドーサ市まで戻る）
15～16日： 休養 反省会・総括 隊荷整理 観光
17日～： チリ出国＝19日 15:30 関西空港着（帰国）

実動行程概略

- 2月17～19日： 関空発 米国で食糧を没収される チリ経由でメンドーサ市に19日昼着
20～21日： メンドーサ市内にて登山許可申請 食糧買出し 装備レンタル 梱包
22～24日： メンドーサ市からバス移動。その後、プンタ・デ・バカスからキャラバン
(3日間かけてプラザ・アルゼンチナへ移動。ムーラによる隊荷輸送) 25日は休養
26日～： BC(4200m) ⇔ C1(5000m) ⇔ C2(5850m) 【荷上げ・高所順応・偵察】
29日： ドクターストップのため藤井のみ BC で休養。強風でポールが折れる
- 3月6日： ファルツ・テ・ロス・ポラコストよりアタック。強風の為、インデペンソア小屋(6380m)で敗退
7日： C2 ⇔ アコンカグア山頂。小屋からノーマルルートで全員登頂(現地時間 12:20)
8～9日： C2 → BC。全ての荷物を撤収。9日は一日休養。撤収時に罰金
10～11日： BC～プンタ・デ・バカス(1日半のキャラバン途中雷雨)＝メンドーサ市
12～19日： 休養。隊荷整理。自由行動(3日間) 観光。17日出国、19日に無事帰国

隊メンバー：

隊長 藤井良太 生命環境科学研究科環境科学専攻 博士前期課程 1 回生

(Ⅵ：24 才 男 B 型) 担当：記録・会計・保険

隊員 河村友裕 生命環境学部農学生命科学科 3 回生

(Ⅲ：21 才 男 O 型) 担当：装備・渉外・医療

隊員 寿栄松孝介 公共政策学部公共政策学科 2 回生

(Ⅱ：20 才 男 O 型) 担当：食料・現地会計 ※ローマ数字は山岳部在籍年数

遠征本部：

京都府立大学山岳部 〒606-8522 京都府京都市左京区下鴨半木町 1-5 京都府立大学内

留守本部長：牛田一成 (山岳部顧問)

留守本部事務局：横山義靖 生命環境学部環境デザイン学科 4 回生 (Ⅳ：22 才)

中村琢磨 (京都府立大学山岳会 現役担当)

隊メールアドレス：kpuac.pa2012@gmail.com

後援： 京都府立大学山岳会

協賛： 株式会社イスカ、株式会社モンベル、国立登山研修所 (五十音順)

遠征の趣意 (遠征計画構想)

60 年以上の歴史を持つ京都府立大学体育会山岳部 (以下、府大山岳部) は、創部以来今日まで、個人としての海外登山経験者は決して少なくないが、大学山岳部の一団体として独力で遠征を企画し実施したことはこれまでなかった。また、近年は、ヒマラヤでの少数精鋭によるアルパインクライミングが行われる一方、観光ツアーと思えるほどの高所ハイキングなども流行しており、海外で登山を行うことは現実としてそう難しくない時代でもある。海外の高所登山においても、個人単位や少人数で個性や独創性を表現していく場と変わりつつある。

そうした中で、府大山岳部は、北アルプスの黒部・立山・劔岳を中心に登山を続けてきたが、2009 年の鳴沢岳遭難事故の影響を受け、部員数の減少や遭難事故による精神的負担、蓄積技術の損失など部組織として大きく後退しているのが現状である。私たちは、部として新たな目標設定と活動計画を模索してきた。困難を乗り越えて一步前進するという気概をもとに、危機管理と安全対策を徹底しながら、学生らしい積極的な活動で、府大山岳部の信頼を取り戻すべく活動してきた。

ここで、私たちは、部の復興をかけて、府大山岳部の歴史に新たな節目を切り開くために、登山の本来の姿である“憧れの高みを目指す”という初心に基づき、世界七大陸最高峰の一つ、南米アンデス山脈の最高峰アコンカグア (Aconcagua 6962m) を目標に定めた。アコンカグアは、世界で最後の秘境とも言われる南米エリアにおいて最も標高の高い

山岳であるが、技術的な難易度は相対的に低く、学生だけの登山隊でも登攀対象にするのに適した山であると考えます。このために、山岳部では高所順応と強風低温対策に重点を置いた二ヵ年計画を2010年5月に策定し、トレーニングを続けてきた。この計画を通して、私たちにとっての最高目標を目指し、その頂きから府大山岳部の新しい未来を考えていきたい。さらに、私たち府大山岳部にとって、独力での海外遠征という新しい第一歩は60年の歴史の中で果たせていない未知の領域でもある。その意味でも、この遠征の価値は大きいと考えている。

平林委員長をはじめとする事故調査委員各位にいただいた提言と、部の存続に尽力していただいた牛田顧問をはじめ山岳部OB各位の支援を受け、将来の府大山岳部員の登山計画につながることを期待して、私たち学生の情熱と若さの可能性を最大限に活かしたい。そして個人としても部としてもこの大きな登山を通して、独創力や団結力、社会で生きるために必要な総合力を磨き、人間的な成長を遂げたい。以上が本遠征隊の目的である。

最後に、この遠征の実現・遂行と成果を、北アルプス鳴沢岳で見守ってくれている三人に捧げる。

2010年5月 遠征隊隊長 藤井良太

解説 遠征実施に至る経緯

山岳部の目的の一つは、より高い頂きを目指すことである。そのこと自体は単純明快な行為であり、その動機もまた純粋なものであるが、それを実現するための方法は数限りなく存在する。この目的の実現方法としての海外高所登山は、普段の山登りの範疇を越えた魅力ある登山形態の一つである。もちろん、その実現には多大な労力と時間を要することになるが、それだけ得られる経験や満足感なども大きいと考えられる。さらに、海外に飛び出すことは、私たち若者にとって、体験をもって異文化に接触し、自身の新たな刺激や可能性を見出すことのできる場であり、自分たちの目的のためにあらゆる能力と知識を現場で活用することで、人間としても大きく成長できる。喜びも大きいはずである。

「海外遠征は出発すると半分が成功した」と言われるほど、計画の遂行と準備が大変な登山である。しかし、それ以前に目的とする山が決まり、夢が実現できる一冊の計画書へと形を変えるまでが最も困難であると考えられる。そして本気で目標を実現するため共に行動する仲間が必要である。海外遠征を単なる旅行の延長におくのではなく、これまで続く山岳部ひいては登山界の中で取り組まれてきたような海外遠征とするためには、私たちの目的をより多くの人たち・仲間と共有できる大義名分が必要である。仲間と目的意識を共有することにより、遠征計画の実現はさらに意味のあるものとなり、他の登山者に対する意味合いも大きくなると考えた。

これらのことから、三つの遠征目的を作り出した。第一に、京都府立大学山岳部にとって初となる「学生部員だけの海外遠征」を実現することを目的とした。対象の山選びは「高さ」「遠さ」「難しさ」の3要素を兼ね備えたアコンカグア・ポーランド氷河ルートを

選定し、エスケープとしてノーマルルートからの登頂もめざせるように、登頂の実現可能性を重視した。登頂に際し、現実的には主な越えるべき困難な目標となる壁を 7000m 近い「高さ」に設定したと大学当局に説明し、海外高所登山の中でも危険度をできる限り下げられる対象とした。期間は、大学の講義に影響の出ない春休みの区間とし、対象山域が厳冬期に当たらないよう南半球に設定した。その中でも、計画説明から報告まで、全ての過程を大切にする「人間的成長」を根底の目標に掲げ、鳴沢岳遭難事故の教訓を十分に生かせるよう努めた。このような計画を打ち出したこと自体も鳴沢岳遭難事故の影響が大きかった。計画発表当時（2010年5月時点）の全部員9名中、参加を希望した者は6名いたが、退部や学業優先などの諸事情により最終的には3名となった。人員が足りないことは、何においても総合力の低下につながった。しかし、残念ながら隊員から外れたメンバーも、本計画の実現のためのサポートに力を注いでくれたことは、遠征をお互いにより意味のあるものにできたと信じている。

これらの経験は、国内において創造的な登山を行う際にも必要とすべき基本的な考え方であると思う。応用次第で、海外登山より面白い登山を国内ですることも可能であると考えられる。登山は本来、完全なる自己責任のもと、孤高の自己満足を求めるものでしかないかもしれない。それでも、自分たちにとっても周囲の関係者にとっても意味ある登山を実行できたことは、大きな成果であると信じられる。

京都府立大学山岳部として得たものは、“海外登山”というひとつの新しい選択肢である。今回は、他大学をまねせず、個人主義の時流に揺るがず、チームで登る大学山岳部としてオーソドックスな登山にこだわった。これは私たちの山岳部らしさである。大学山岳部組織の衰退が著しく、登山の結果のみがもてはやされる中、私たちの目的とした正しい判断ができる人間的な成長とは、登山者にもっと認識されるべき指針ではないかと考える。山登りとは何かを深く考えることが創造性を延ばすことにつながる。今回、登山自体の難易度的評価は低いものだが、山はそれだけではなく、もっと総合的な広がりがある。同じ部の仲間と目的を共有し、自分たちで考えて登る、自分たちの目標に向かって努力するという基本的な過程がとても重要であった。海外登山を通してオーソドックスな山の総合力を伸ばし、自分たちの大学山岳部らしさを再認識できたと思う。この遠征を通して得たことを大切にして、鳴沢岳遭難事故の教訓とともに「京都府立大学山岳部」ならびに「大学山岳部」の復興につなげていきたいと考える。

隊員紹介

隊メンバー



名前：**藤井良太** FUJII RYOTA

学科：生命環境科学研究科環境科学専攻
博士前期課程 1 回

年齢：24 歳 血液型：B 型

担当：隊長・記録・会計・保険

山岳部所属年数：5 年

隊長であり遠征企画者でもある。ヒマラヤの未踏峰クビ・カンリ(6,721m)に登頂しており、隊員の中で唯一海外登山経験がある。また、カナダへの留学経験も

あり、現地人とのコミュニケーションでも力を発揮した。



名前：**河村友裕** KAWAMURA TOMOHIRO

学科：生命環境学部農学生命科学科 3 回

年齢：21 歳 血液型：O 型

担当：装備・渉外・医療

山岳部所属年数：2 年

遠征時の山岳部主将。海外旅行自体が初めてであったが、高所には強く、荷上げの際には他の隊員よりも重い荷物を担いでも一番元気であった。また、隊のムードメーカーであり、しばしば隊の雰

囲気を和ませてくれた。白飯が大好き。あだ名はカワムーラ。



名前：**寿栄松孝介** SUEMATSU KOSUKE

学科：公共政策学部公共政策学科 2 回

年齢：20 歳 血液型：O 型

担当：食糧・現地会計

山岳部所属年数：1 年

隊の中で最年少。他の隊員とは違い、大学から登山を始めた。遠征中は「日本に帰りたい」が口癖であり、登頂時も「これでやっと日本に帰れる！」が一言目であった。三度の飯より酒が好き。

在京メンバー

横山義靖（京都府立大学山岳部4回生）遠征事務局長

無口だが気さくなおしゃれボーイ。おばちゃんにもてる。現役時代は沢登りにもっぱら力を入れていた2010年度主将。現在は建築構造学の研究に熱心で、その姿はまさに学生の模範である。今回の遠征では連絡係として陰ながら重要な役割を果たしてくれた。

牛田一成（京都府立大学山岳部顧問）遠征本部長

京都府立大学生命環境学部動物機能学研究室教授。京大山岳部のOBで、海外登山経験も豊富。1982年カンペンチン峰7281mの初登者。登山で培った体力や技術を氷河微生物の調査などの研究に活かしているすごいお方。最近はゴリラとツキノワグマの糞を採取して、それらの腸内細菌を研究している。

中村琢磨（京都府立大学山岳会）遠征事務局（現役担当OB）

環境学博士。現役時代のあだ名は「シュタイン」。卒業後はしばらく山に行けない期間があったが、体力は現役部員に負けず劣らず強靱。博学多趣味で、創作料理が得意。

当時（2010～2012年度）の山岳部員 ※（）内は山岳部に在籍した期間を表す

・菊澤健一（2006年度～）

文学部史学科。思想にふける歴史好きのお兄さん。山にはあまり登らない菊神様。

・竹中雅幸（2008年4月～2013年3月卒業）

公共政策学部公共政策学科。2009年5月以降主将。緑のカップがトレードマーク。しばしば単独で山に登る。2011年度は休学してニュージーランドを歩く。

・中村俊彦（2009～2010年夏退部）

生命環境学部森林科学科。ガタイがよくてキノコが好き。温和な口調が特徴的。林業の勉強がしたくて「森なかま」に転部。日本酒が好き。

・三好 遥（2010年春～2011年退部）

府大ワングル引退後、岩登りがしたくて山岳部に入部。紅一点。生き物好き。

・國只信治（2011年春～）

公共政策学科。高校ワングル出身でワングル部も兼部。岡山出身のオールラウンダー。

・末田一成（2011年春～）

生命環境学部森林科学科。元野球部。良くも悪くも少し鈍感。森好きの好青年。

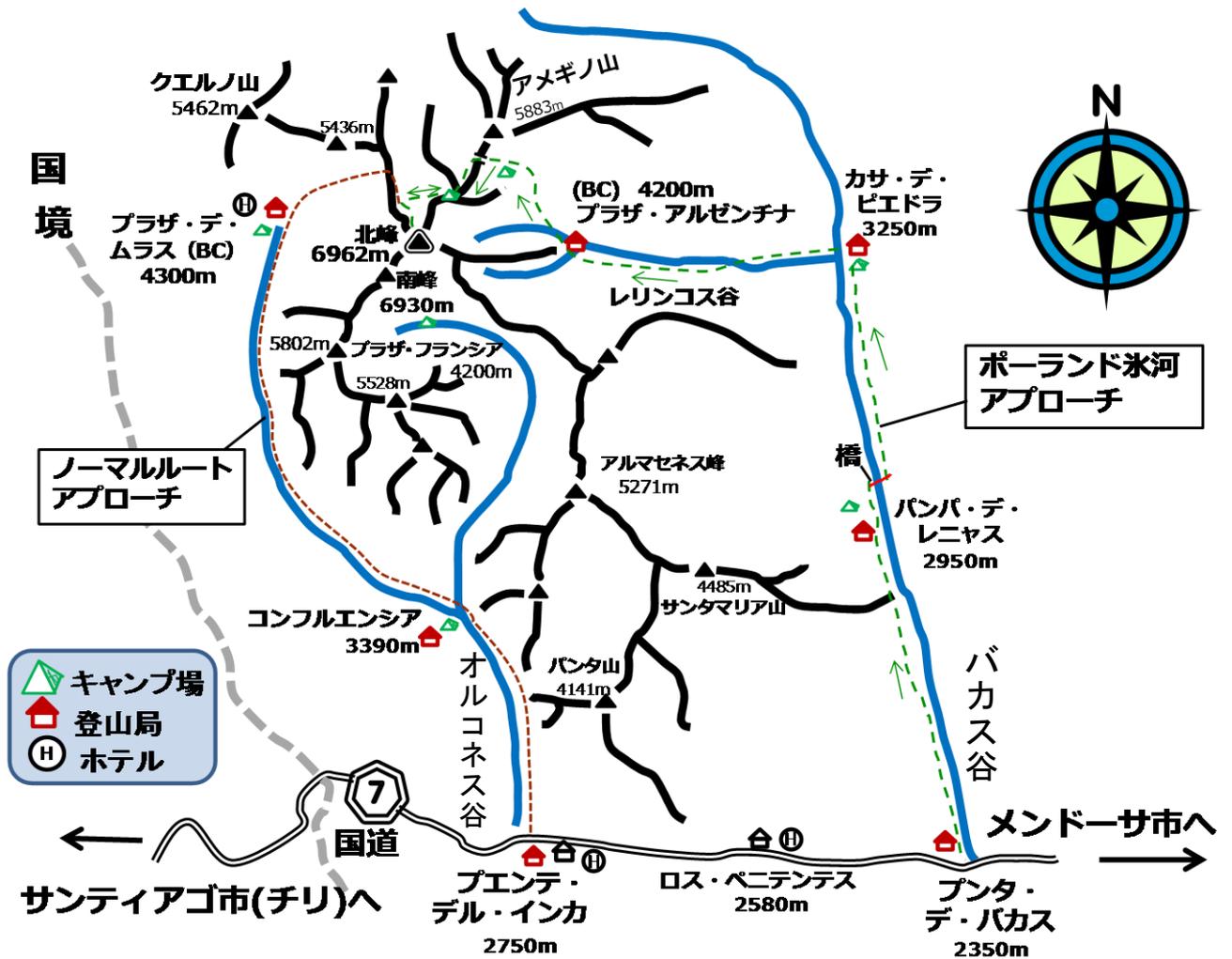
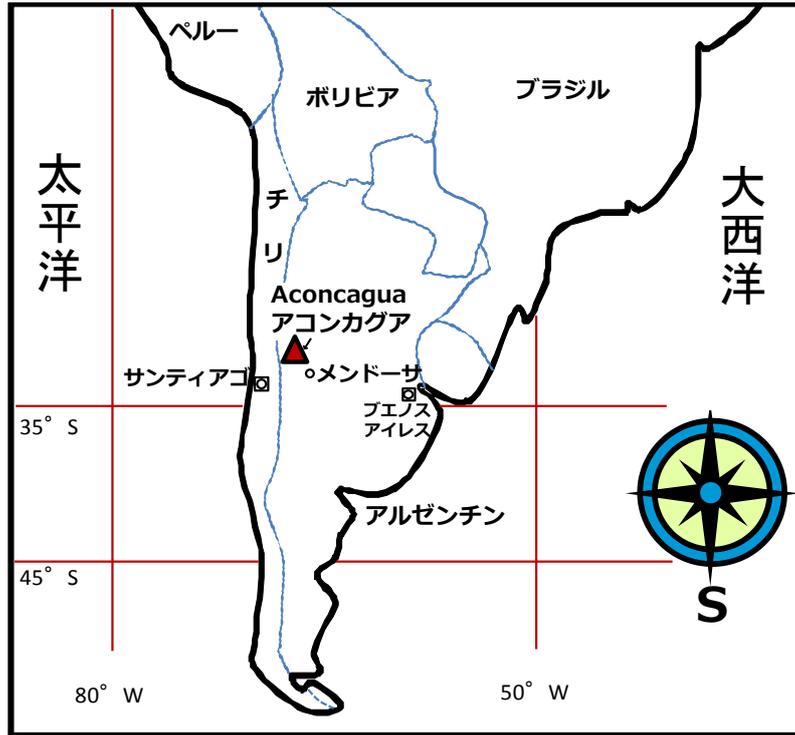
・和田 周（2011年春～2012年3月退部）

生命環境学部森林科学科。あだ名はシュウシュウ、体はムキムキ。チャリ好き。

・西上真司（2012年春～）

生命環境学部農学生命科学科。海外遠征とは関係なく入部した九州男児。釣り好き。

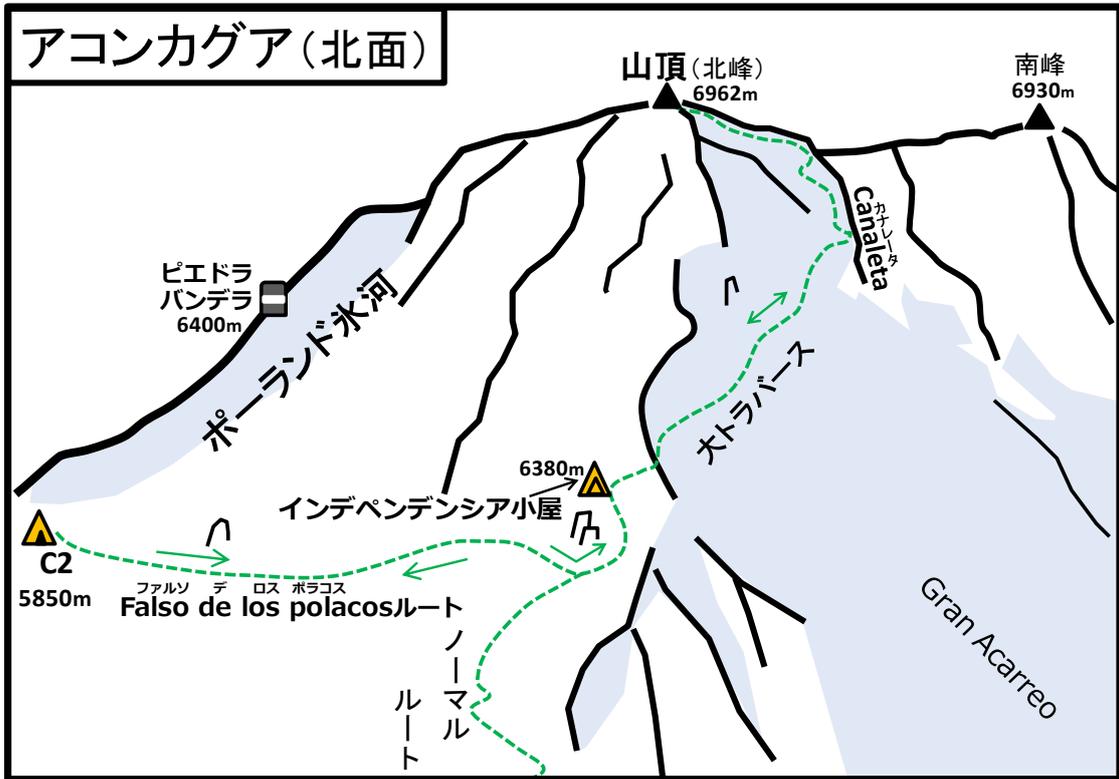
地図
(概念図)



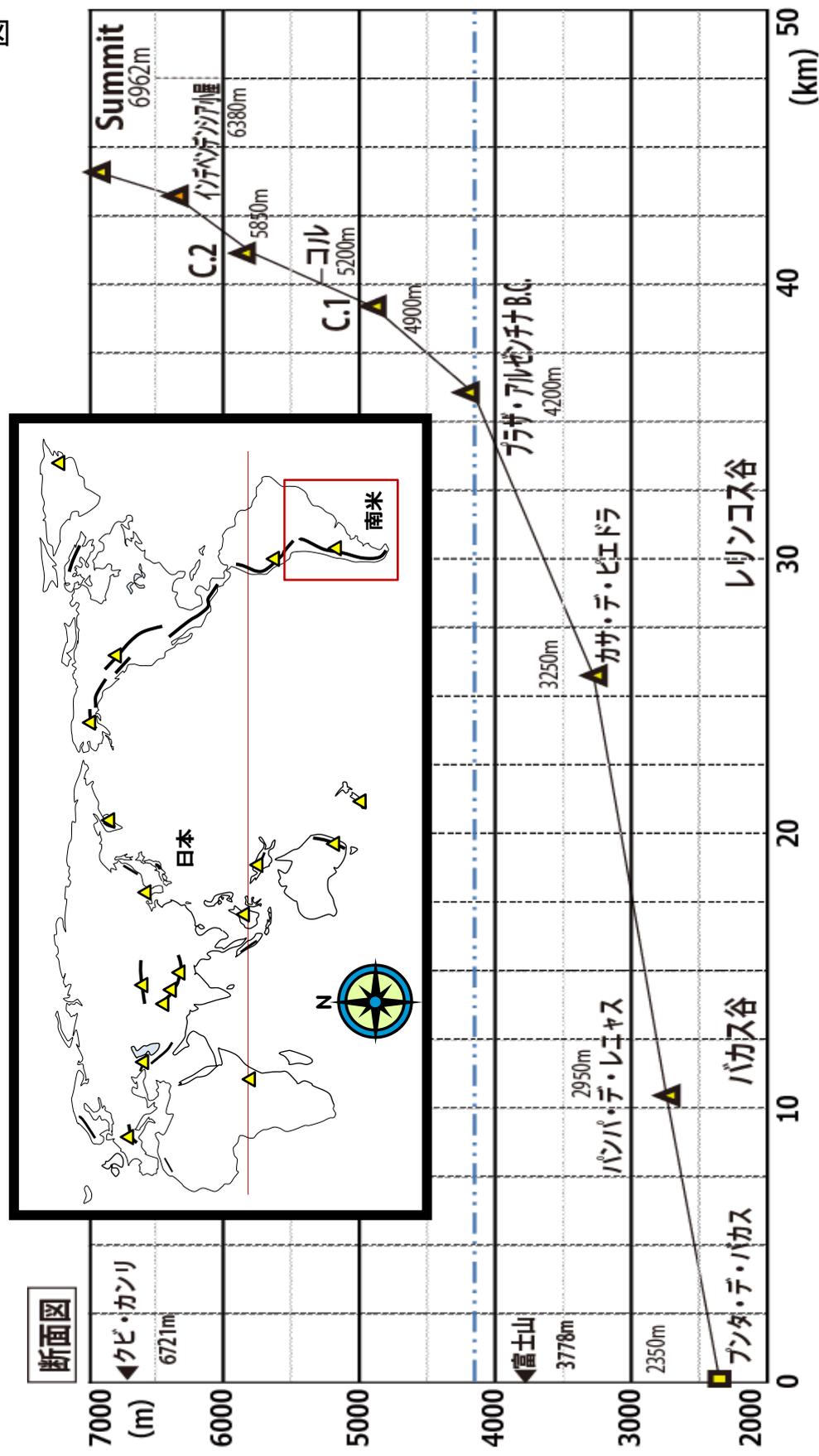
アコンカグア(東面)



アコンカグア(北面)



断面図

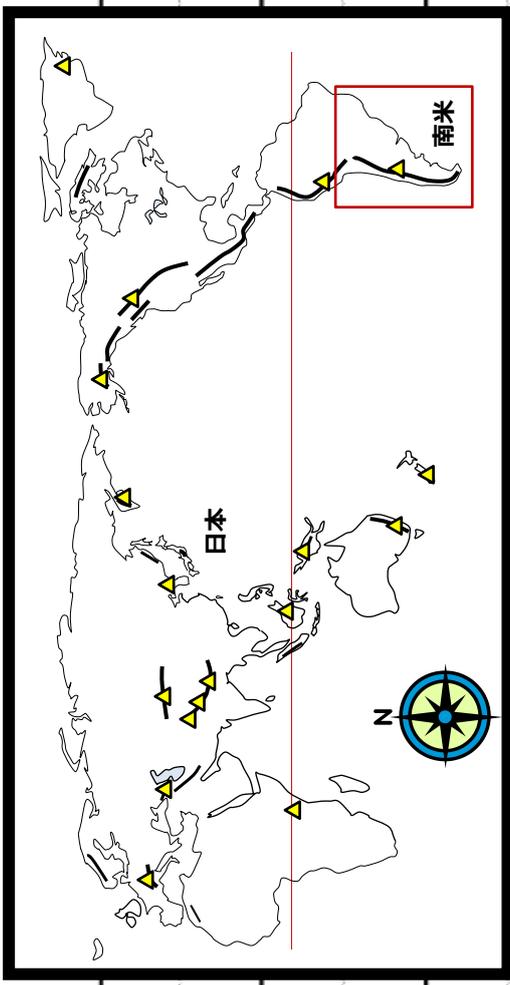


プンタ・デ・パカス(国道)からの距離

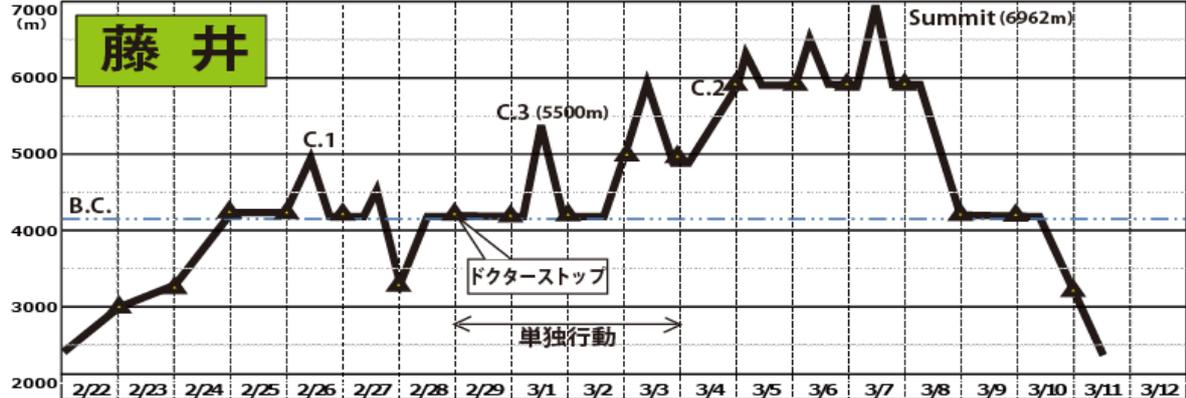
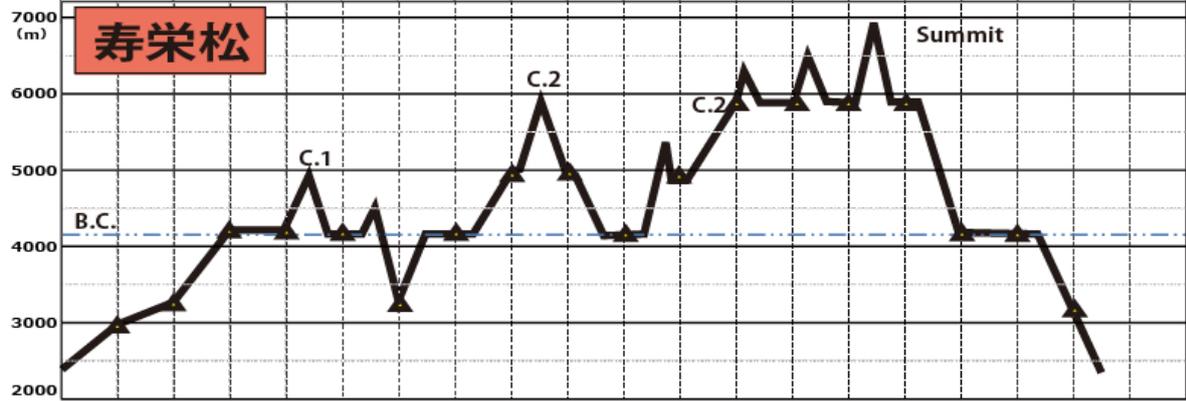
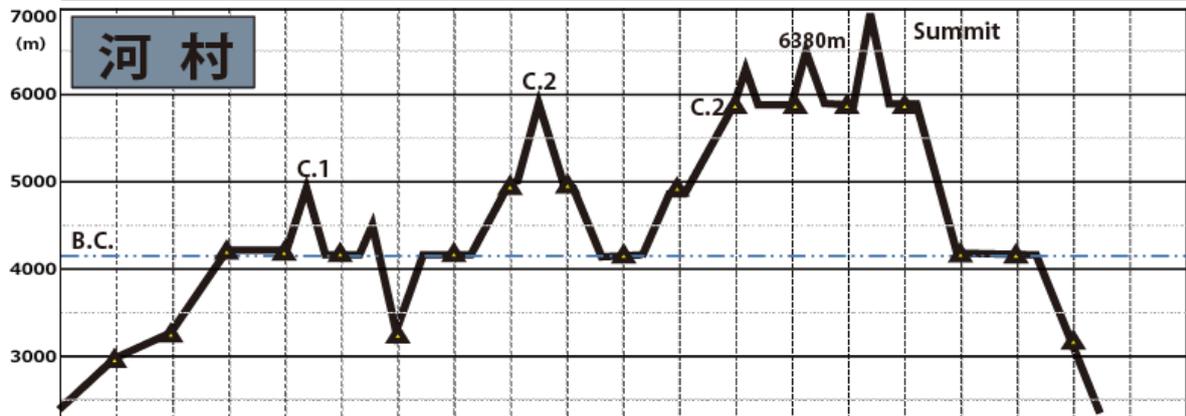
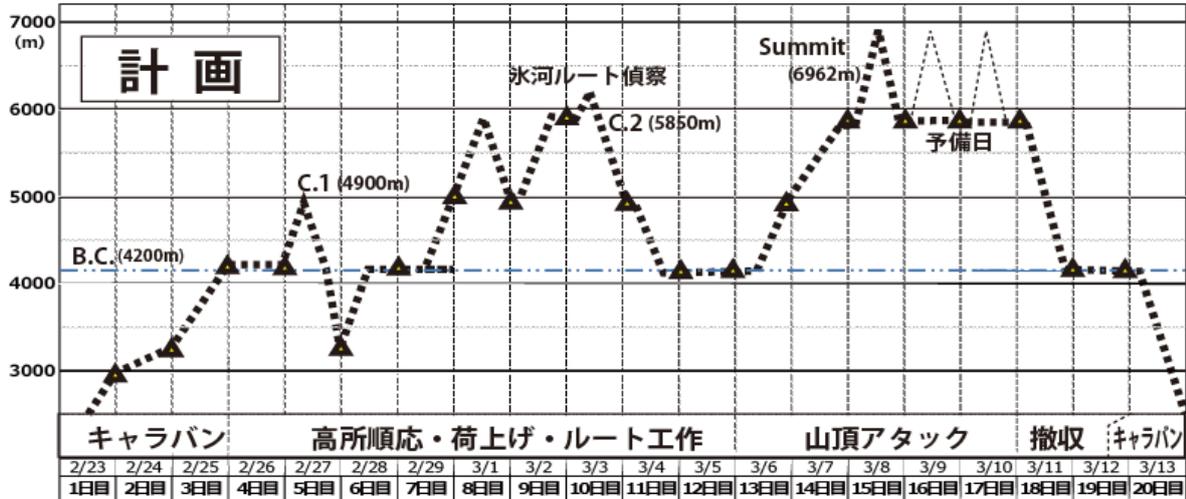
断面図

クビ・カンリ
6721m

富士山
3778m



個人別行程表



行動記録

行動記録

遠征前半 アプローチ (期間 2012-2/17~2/29)

河村友裕

2月17日(金) 天気:(日本)晴れ→(米国シアトル)雨→(米国アトランタ)晴れ
大学発 10:50=下道=関西国際空港(15:20~18:25)=米シアトル空港(10:00~13:25)=
21:10 米アトランタ空港 22:00 =22:10 ホテル着 ※時刻は現地時刻

10人乗りのレンタカー(運転:横山)で関西国際空港へ向かった。高速道路を用いなかっただけで、到着に少し時間がかかった。関西国際空港に到着すると、すでに藤井、寿栄松隊員のご両親が見送りのために来られていた。搭乗手続きと両替を済ませた後、井川 OB と吉田 OB、現役山岳部員、ワングル部員の友人からの見送りを受け、飛行機に乗り込み出発した。「遠征は出発すれば半分成功」であるため、隊員たちは満足感と解放感に浸り、南米の期待を高めながらアプローチの旅を楽しむことにした。

米国のシアトルに到着したのは現地時間2月17日10時であった。時間が巻き戻った。税関を過ぎ、受託荷物検査に入ったところで事件が起こった。なんと一部の食料(具体的には、フリーズドライ食品、カップ麺)が没収されたのである。ビーフとチキンが入った食品は持ち込み不可と言われ、目の前でゴミ箱に捨てられたのはショックだった。各国に持ち込むものに関して、医薬品については予め問い合わせたりしていたのだが、食料に関しても問い合わせしておくべきであった。封を開けていなかったら大丈夫だろう、という考えは甘いということを感じさせられた。続いて手荷物検査を受けた。手荷物のサブザックの中にたまたま入れていたペグが凶器に成りうるので、受託手荷物に入れてこいというようなことを言われ、手荷物預け場所を探して空港内を歩き回るようになった。しかし、結局空港会社のスタッフと意思疎通ができず、ペグはそのまま手荷物で持ち込んだ。次は注意されずに手荷物検査を通過できたので、結局検査基準はよくわからなかった。食料の不安を抱えたままシアトルを後にした。アトランタへ飛ぶ機内からは、アメリカ大陸の雪をかぶった山々を見下ろすことができ、美しかった。

アトランタからチリのサンティアゴに飛ぶ便は、翌18日の夜に離陸するので、アトランタで一泊する必要がある。予約したホテル「Comfort Inn & Suites」へのシャトルバスが出ているらしいが詳しい場所はわからないので、河村が公衆電話からホテルに連絡したが、英語の聞き取りに四苦八苦し、シャトルバス乗り場に到着するまで少し時間がかかってしまった。ちなみに、後から気づいたのだが、空港内には空港周辺のホテルへ無料で電話ができるコーナーがあり、公衆電話を使う必要はなかった。

ホテルに到着後は、荷物整理や夜の街の散策をし、シャワーを浴びて就寝した。

2月18日(土) (米国アトランタ)晴れ→雨

ホテル発 10:00=10:10 アトランタ空港 ⇄ アトランタ市街 = 離陸 21:50 = 赤道越

チェックアウトが11時であったため、10時過ぎの無料シャトルバスに乗って空港へ向かった。空港に到着すると、今度は問題なく搭乗券を発行してもらえた。ただし、受託手荷

物を預けられるのは16時頃からということだったので、その時まで市街を散策しようということになった。そこで、手荷物を預かるサービスの場所を探すわけだが、ここでまたトラブルに巻き込まれる。河村がサービスの場所を航空会社のスタッフに聞いたのだが、聞き方が悪かったのか向こうは「今、受託手荷物を航空会社に預けたい」というふうに意味をとったらしく、とりあえず荷物を持ってこいと言われた。ややこしそうだったので逃げようとしたが、とても怒っているようなので言う通りに受託手荷物を持っていった。すると、「日本からサンティアゴまで無料であるはずの受託手荷物の超過料金を払え」と予想外のことを言われた。理由としては一度空港を出ているから、アメリカからサンティアゴでの区間のルールが適用され、その区間では超過料金が発生するというらしい。こちらとしては日本からサンティアゴまで1枚のチケットで購入しているため、日本からサンティアゴまでの区間が適用されるはずだと、河村が必死に無料であることを主張し続けることになった。結局、他のスタッフが仲介に来て、「無料で行けるのでまた16時に来てください」ということになった。河村が空港で荷物番をすることになり、寿栄松と藤井は市内散策に出かけた。

16時頃に受託手荷物を預けた。搭乗時間までまだ余裕があったため、アトランタ市街を散策することにした。雨が降っており、オリンピック記念公園を歩くといったのんびりとした時間の使い方はできなかった。代わりにコカ・コーラ博物館へ行くことにした。試飲コーナーでたくさんジュースを飲めたのはよかったが、そのせいかどうかはわからないが、後に河村のお腹の調子が悪くなったのは残念であった。夕食を軽く食べて、飛行機に乗り込んで、機内食も食べた。いよいよ赤道を越えるので、期待が高まった。

2月19日(日) (刊・サンティアゴ) 快晴→(アルゼンチン・メンドーサ) 曇り時々晴れ

ーサンティアゴ空港(9:20~13:00)=13:50 メンドーサ空港(~14:20)=15:00 ホテル 17:00
~スーパーへ買い出し~20:30 ホテル

サンティアゴに到着した後、メンドーサ行の搭乗券発行へ向かう。ここで受付の人から、航空会社がデルタ航空からエアロアルゼンチナにかわるため、60kg以上の受託手荷物の超過料金(USD8/kg)が発生するという説明を受け、交渉したものの少しまけてくれると言うので超過料金320米ドルを支払った。この受付の人は美人だったのでしょうがなかった。いろいろなことを勘案すると、カタール経由の別ルートの方が安くすんでいたかもしれない。

まだ時間があつたので、空港内外を散策した。外に出ると雲は一つもなく、日差しがとても強くて、真夏であった。気温26℃。山は既に荒涼とした岩山だった。出発時の荷物検査で、寿栄松が呼び止められた。どうやらデジカメの予備バッテリーを5個ほど持っていたため、怪しがられたようだ(何故怪しがられるのかはわからない)。指定された搭乗口についたが、搭乗時間になっても、飛行機に搭乗することができなかった。航空機の遅延が発生していたらしい。結局、予定時間より1時間遅れて出発した。窓からアンデスの山々を望むことができたが、この時はどれがアコンカグアかわかっていなかった。

メンドーサに到着すると、「民宿アコンカグア」を営む増田すさな氏の妹であるピオレッ

タ氏が出迎えてくれた。そして夫妻の車二台に乗り、メンドーサ市内のホテル「Gran Hotel Venus」に移動。ホテルの前は汚水が地下ではなく路肩の溝を流れていたため臭かった。しかし、ホテルの中は香水のいい香りで一安心であった。ホテルにて「Juan Antonio Herrera」という Expediciones & Trekking 会社のエージェント、ラウラ Laura 氏に会い、早速打ち合わせを開始した。登山許可取得の手順、ムーラの手配と料金、装備レンタル、ルート状況など様々なことを話した。特にルート状況に関して、ポーランド氷河は雪というよりむしろ氷なので、アイスクライミングの経験が無いと難しいということをラウラ氏に忠告された。アプローチからもノーマルルートが勧められたが、私たちは現場を見て判断すると言い、氷河ルートを今諦めることはしないと伝えた。とりあえず、翌日に登山許可申請をラウラ氏と取りに行くことになった。

打ち合わせが終わった後、近くのスーパーへ物色しに出かけた。食料や調理器具を買った。途中、商品がどこにあるかを聞くのに、英語が通じないのが大変であった。「日本で英語が通じない程度に通じない」と聞いていたとおりだった。シアトルで没収された食料の代替物も購入したが、味は未知数であった。ホテルに帰り、食料を試食してシャワーを浴びると、旅の疲れが押しよせてきて、皆いつの間にか部屋の鍵を閉めるのも忘れて寝てしまっていた。

2月20日(月) 曇り→晴れ

メンドーサ市内(登山許可取得、装備レンタルなど)

朝7時前に起床し、朝食後にメンドーサの町を散策する。主な目的は、両替する所や登山許可の手続きに必要な場所の確認である。サンマルティン通りを歩いていると、胡散臭いオッサンに話しかけられた。どうやら両替商のようである。1ドルを42アルゼンチンペソに両替するよ、というようなことを言ってきた。レート的には問題はなさそうであるが、どうも胡散臭い。ここで、出国前に増田氏から「メンドーサ市内は偽札が流通しているので、信用できる場所でしか両替してはいけない」という忠告を思い出した。どうせ偽札か高い手数料を取られるだろうということで、しつこかったが「後でまた来る」といって回避した。広場にはいろいろな植物が植えられていて楽しかったが、結局、目的の場所はいまいちわからないままホテルに帰った。ただホテル近辺にユースホステルがあり、一泊30ドルくらいで非常に安かったので引っ越ししようかと考えたが、登山前に手間を増やすことはしない方がよいと判断した。

10時にエージェントのラウラ氏とホテルで再会し、そのまま登山許可取得に出かける。登山許可の手順は①Fagophasi という所で登山許可取得に必要な料金を支払い、②その領収書を得て、③メンドーサ市観光局にて必要な書類とその領収書を提出して④説明を受けサインした後登山許可を得るという流れである。まず、料金を支払うにはアルゼンチンペソが必要なので信用できる両替所へ行き、ドルをアルゼンチンペソへ両替してもらった。ちなみにラウラ氏曰く、街で話しかけてくる両替商は信用ならないから、利用しないほうがいいと言われた。朝の胡散臭いオッサンはやはり、信用ならない人だったようだ。次に

Fagophasi へ代金を支払いに行った。僕らが行った Fagophasi は薬局 Farmacia であり、薬局が Fagophasi のサービスも行なっているような感じだった。その後、メンドーサ市観光局へ向かった。観光局の白壁の建物の2階で手続きを行い、無事に全員が登山許可を取得することができた。やはりエージェントがいるとスムーズである。

その後、ホテルに戻りラウラ氏とミーティングを行なった。ムーラ、水場、ルート状況、メンドーサ市内から登山口への行き方、そしてその方法を聞いた。一旦お別れしたあと、16時頃に再会し、一緒に今度は登山用品店『ORVIZ』に行くことになった。16時になると、登山用品店『ORVIZ』のオーナーが車で出迎えてくれて、隊員とラウラ氏を乗せて店へ行った。装備レンタルは共同装備としてダッフルバック、個人装備としてオーバークロブ、フリースパンツ、ストックなどを借りた。ダウン系の防寒具のレンタルは行なっていなかった。また、ガスボンベを購入したが、数量が不正確であったため計算しなおし多めに買った(1498ペソ)。他にガイド本(144ペソ)、地図(3枚207ペソ)やカラビナ(二個212ペソ)も買った。フリーズドライ食品も扱っていたがほぼないに等しく、あまりおいしそうなものではなかった。河村の VISA を使って支払った後に、おっさんから『ORVIZ』Tシャツと古いフリーズドライ食品を二袋もらい、ホテルまで送ってもらった。

部屋に戻って、再度荷物を整理していると、鍋の中から没収されずに残っていたシチューが出てきた。歓喜。今日も疲れ果てて就寝した。

2月21日(火) 曇り→晴れ

メンドーサ市内(バスチケット購入・衛星電話確認、梱包作業など)

朝一で、足りない物の買出しのためスーパーに出かけた。途中の公園で、衛星電話が在京につながるかをチェックすると、無事に日本の横山さんにつながった。買出しをして帰る途中、TRANSPORTS USPALLATA という店でメンドーサから登山口であるプンタ・デ・バカスまでのバスチケットを事前に購入した。その後は部屋に戻り、ムーラ用のダッフルバックをパッキングした。ムーラはたまに暴れたりするらしく、担がせている荷物が破損してしまうケースもあるので、いかに緩衝材をうまくバックに詰め込むかがカギになる。今回は薄いウレタンマットをスーパーで購入して、それで荷物を覆い緩衝材とした。すでに藤井のオーロラバッグとアディダスバッグは穴が開いていたため、針金やガムテープなどで補修なども行っておいた。計量器を忘れたため苦労したが、なんとか出発前にパッキングが完成した。ホテルの一階で、無料でネットが使えるため、在京の横山に今後の予定などを連絡し、天気などを調べた。夕食は、最後のぜいたくということで、店でアルゼンチン牛と赤ワインを食べた。また、酔っぱらって寝てしまった藤井の代わりに、寿栄松がホテルの支払いも済ませた(三人三泊一部屋で312米ドル)。

2月22日(水) 曇り→快晴 【入山初日】

ホテル＝バスターミナル 6:00 =9:30 プンタ・デ・バカス(2725m)11:00~16:55 パンパ・デ・レーニャス T.S. (2700m)

朝 4 時半に起床。前日に予約していたタクシーが 5 時過ぎにホテル前に到着したのでそれに乗り込み、バスターミナルへ移動した（二台で 60 ペソ）。陽気な運ちゃんだった。

6 時前出発のバスに乗った。荷物は運び屋に 100 アルゼンチンペソを支払い、バスのトランクに載せてもらった。アルゼンチンのバスは停車アナウンスがないので、うかうかしていたら乗り過ごしてしまうと思うとあまりリラックスできなかった。バスはいくつかの町を経由し、アンデス山脈に向かい、どんどん緑が無くなって行った。

9 時半前にプンタ・デ・バカスに到着した。「Bienveni dos Parque Provincial ACONCAGUA（ようこそアコンカグア州立公園へ）」という看板がある。バスから荷物を降ろし、写真を撮って、さていよいよか〜、と思っていたその時、異変に気づいた。荷物が 1 つ足りない……。どうやらバスのトランク内に放置してしまったらしい。もちろんのことバスはもうすでに見えなくなっていた。呆然としていると、ムーラに運んでもらう荷物を預かるエージェント会社のオズバルド氏が予定通りに車でプンタ・デ・バカスに来てくれた。一刻も早く事情を説明したいところだが、オズバルド氏には英語が通じなかった。すると、オズバルド氏が気をきかせてラウラ氏に電話してくれた。こうしてラウラに電話越しに通訳してもらい、オズバルド氏にバス内に荷物を置き忘れたという事情を説明できた。すると、オズバルド氏が車に乗れというサインを出してくれた。藤井が車にのせてもらい、バスを追いかけて、プエンテ・デル・インカで置き忘れた荷物をなんとか回収できた。ありがとう、ラウラ。ありがとう、オズバルド。こうして登山口敗退は回避できた。オズバルドに、「荷物をよろしく」と言って、100 ペソ渡すと喜んでた。

ムーラ用の荷物をオズバルドに預け、緑色の建物へ向かう。ここで登山許可のチェックを行なった（10:30）。説明を受け、指定のゴミ袋をもらい、いざ出発。周りの山は植生がほとんどなく、砂、岩山である。樹木は、川沿いにポプラとヤナギの類が数十本生えているだけだ。動物では、三色のトカゲや蝶などに出会えた。登山道は谷沿いについているが、整備されていて歩きやすい。しかし、ムーラの糞が大量におちていて少し汚い印象を受けた。にしても、とても暑い。乾燥しているので水分がどんどん奪われる感じがした。ストックと日よけは必須だ。途中で知り合ったオーストリア人のおじさんも山頂を目指しているということで親近感がわいたが、彼には強力なガイドがいた。「お互い頑張ろう」と握手をした。藤井は半そで短パンにヤッケを着て歩いた。寿栄松は長シャツに長ズボンの夏山高山スタイルだ。河村はオーロンのアンダーを着ていて軽度の熱中症に陥ったのか少しバテ気味であった。小川を渡る時、のどの渇きに負けて河村が生水を普通に飲んだ。藤井は細菌が多いことを気にして「なんで飲んだんだ!？」と叱ると、河村は「冷たいから」と理由を答えた。河村はこの後便所で恥をかくことになる。とてもゆっくりとしたペースで、テントサイトのパンパ・デ・レーニャス（右岸）には 17 時ごろに到着した。登山許可証をレンジャーに見せて幕営の説明を受けた。今夜は南米で初めての野宿であるため実感がわいてきてわくわくした。水場では蛇口をひねると勢い良く水が出てきて、頭を洗ったときはとても気持ちよかった。下山してきたイタリア人も頭を洗っていた。ポーランド氷河を登った人はいないらしい。谷底なので陽が陰るのが早く、一気に寒くなった。トイレは水洗

なのはよかったが、肝心の鍵がなく、さらには便座もなかった。男女共用なのでせめて鍵はつけてほしいところである。夕食は現地のものを使って作った「トマトシチュー」なるものであったが、味付けが濃すぎて食の進まない者もいた。夜 20 時過ぎに就寝した。

2月23日(木) 晴れ→雨→曇り

T.S. (2700m) 7:30 ~7:40 橋 ~カサ・デ・ピエドラ(3200m) 14:00

6時に起床。7時過ぎに出発した。引き続き、大きな谷の底を歩く。出発してすぐに一人用の赤い橋を渡り、それ以降は川の左岸を歩いた。1 / 3 間隔で右岸に大きな谷が入り込んでいるので、いい目印になった。基本的には平坦で歩きやすい道であったが、途中 30 度ほどの土斜面をトラバースするところもあり、そこは崩れやすいので注意して通過した。対岸をさっそうとムーラの群団が追い抜かしていった。次第に雨が降り出し、カサ・デ・ピエドラに到着した時は土砂振りになっていた。外は 9°C だった。

カサ・デ・ピエドラには岩小屋があったのでその中で雨が止むのを待った。水はホースから勢いよく湧き出ている、水不足の心配はなかった。が、テントサイトからトイレまでが 100m 弱あって遠いのと、そこに行くまでの斜面がムーラの糞でいっぱいだったり、トイレにまたもや鍵がなかったりしたのは残念であった。雨が止むと背後の山の稜線が白くなっていた。この雨は上部では雪だったようだ。レリンコス谷の方向はガスっていて見えなかったが、アコンカグアにも積もっただろう。雪の山はやはり美しかった。

2月24日(金) 快晴→曇り時々あられ→晴れ

T.S. 7:45 ~アコンカグア見参~11:00 渡渉 ~17:10 プラザ・アルゼンチナ B.C.(4200m)

カサ・デ・ピエドラから BC であるプラザ・アルゼンチナまではレリンコス谷をつめていくのだが、カサ・デ・ピエドラからレリンコス谷をつなぐ橋などはなく、そこに取り付くにはバカス谷を渡渉しなければいけなかった。カサ・デ・ピエドラと BC の標高差は 1000m あり、本日の行程で標高自体は 4000m を越えるので、上手く高度馴化するためにゆっくり時間をかけて登りたかった。そのため、朝早くから出発したのだが、陽が差し始める前に渡渉しなければならず、とても冷たい思いをした。気温 0°C。浅瀬を探し、奇声をあげながらサンダルで渡った。ちなみにお金を払えば、ムーラに乗って川を横断できるそうだ。

レリンコス谷の下部は川幅が 5m ほどであり広くなく、日本の沢に近かった(もちろん植物は全くと言っていいほどないが)。兩岸に巻き道がついていて、この時は左岸のものを利用した。ムーラは右岸を歩き、一瞬で私たちが抜かしていった。遠くで、頭のはげたコンドルがいるのを見つけてしばらく観察していた。50m ほどの滝を巻くと、ついにアコンカグアがお目見えした。心が躍った。そこからは谷も傾斜がほとんどなくなり、右岸上をゆっくりゆっくり歩いた。ところどころボルダーがある日陰で休んだりした。

BC に到着した時は天気あまりよくなく、BC より上部はガスっていた。全員、頭が痛く、しんどそうであった。レンジャーに許可証を確認してもらい、企業テント「MALLKU」のスタッフからムーラに預けた荷物を受け取った。ここにいる企業のスタッフはエルナン

Hernan 氏とダニエラ Danniela 氏とホセ Jose 氏の三人だった。ちなみにこのホセ氏は塔下さんにとっても似ていた。企業テントではテント場、トイレ、水の利用が可能で、食事やムーラ・ポーターなどのサービスも有料で行なってもらえた。これから二週間近く暮らすことになるので、しっかりと整地をしてテントを立て岩で囲った。設営はともしんどかった。その後はゆっくり過ごした。荷物を出して整理していると、寿栄松のザックの中から破裂したマスタードが見つかった。

◎B.C.到着時の感想

藤井：無事に心配されていた BC までの道のりをクリアしました。ここからは山にいることを楽しみたいと思います。

河村：今のところは快適です。無理せずがんばります。

寿栄松：お酒が飲みたいですが、登頂のために我慢します。BC に着いてやっとアコンカグアに来たという実感がわいてきました。たくさんの方の応援を無駄にしないように頑張ります。

2月25日(土) 晴れ時々曇り

休養日。BC は S32° 38' 46.3S"、69° 56' 39.2" W 標高 4196m (GPS 測位による)

高度馴化のため、この日は休養日とした。みな頭痛持ちで身体中が酸素不足なので、朝はやさしくパンとスープだけ食べた。隊荷整理などをし、シュラフを干した。午後には、ドクターチェックを受けた。ラテン系の女医であった。SPO2 の他、脈や呼吸を測られ、英語でいくつか質問された。途中、向こうの岩まで歩いて来いという時もあった。血中酸素濃度は河村、寿栄松、藤井の順に、良、普通、悪といった感じだった。明日は C1 へ荷上げ予定で、藤井にドクターストップがかけられるか心配であったが、C1 に行くのは高度馴化も兼ねて往復するだけと説明すると OK してくれた。SPO2 は 80 以上ないとダメらしい。ただ、全員血圧が高めで水分を 1 人あたり 6~7ℓ 飲み、コーヒーやスパイス類、塩分をとるなどと言われた。全員高血圧なのは、高所という理由だけでなく、現地の食料の塩分濃度が高い影響も少なからずあっただろう。よく噛んで食べることも大切だ。ドクターは「明日の夜にもう一度診るから来い」と言うので、当初は高所順応のため明日中にカサ・デ・ピエドラへ下りる計画であったが、やむなく C1 往復のみに変更した。ネット 30 分 20 米ドルで在京と連絡を取ろうとしたが、PC が途中で壊れて使えなくなった。ここでイモトのアコンカグア敗退を知った。天の川のかかる夜空が綺麗だった。

2月26日(日) 快晴

BC(4200m) 8:25~10:20 ポーランド氷河が見える場所(4540m)~11:20 東部氷河出合(4635m)~14:30 Camp1(4900m)15:20~BC(4200m) 17:00

前日の内に、C1 に上げる荷物を用意しておいた。在京の横山に衛星電話をかける。BC から C1 へは氷河上を歩く。といっても、氷河の上に砂礫(デブリ)が乗っかっている状態で、まさに「ガレキくずのたまった岩山」だった。南米特有のペニテンテス(氷塔)も 2

月後半（晩夏）にもなるとだいぶ退化していて、雪氷上を歩くことはなかった。各隊員とも頭が痛く高度障害に苦しんだが、寿栄松が最も調子が悪く、藤井がサポートで後ろを歩いた。河村は比較的元気で、後の二人より時間差でいうと1時間ほど先行していた。C1はルンゼを乗り越えた上の台地にあった。眺めは最高だ。寿栄松はC1についても不調で座り込んでいたので、藤井と河村で荷上げた荷物は周りに石を積んで風に飛ばされないように施した。オーストリア人のガイドはこれからC2に荷上げするというので驚いた。下りは早かったが、足をくじかないよう注意して歩いた。上りは6時間かかったが、下りは3時間もかからなかった。

さて、BCに戻り、約束通りドクターチェックを受けようと医療小屋に行くと、誰もいなかった。レンジャーに聞くと、20時ごろにヘリに乗ってくるらしい。状況がイマイチ呑みこめないがとりあえずドクターが到着するのを待った。そして、20時半ごろにヘリが到着するのだが、ヘリから降りてきたのは昨日のドクターではなく、白人系の女医になっていた。謎の「ドクターチェンジ」である。診察してほしいというと、あと30分待ってと言われたが、時間も遅いので明後日にBCに戻ってくるのでその時に診察してくれと言った。結局計画を狂わされただけだった。27日は高度馴化のためカサ・デ・ピエドラへ下りることにした。この晩も星が綺麗だった。河村は飯を食い過ぎて、夜中に吐きそうになっていた。

2月27日（月） 快晴（午後は強風）

**6:00 起床 - B.C.8:30～登攀練習（4400m 付近の氷河；10:30～11:30）～12:00 BC(4200m)
13:20 ～15:20 渡渉～17:00 カサ・デ・ピエドラ T.S. (3200m)**

高度馴化のためにBCから氷河の露出している標高4400m付近まで行き、アイススクリーとアイゼン・ピッケルのコンビネーションを練習した。ポーランド氷河の氷はコンクリートのように硬い可能性があったので、その対策として少しでも氷に慣れておきたかった。また、高所での技術トレーニングもしたかった。クライミングのバランス練習、ピックを利かせるいい練習になり、氷河ルートの想定に少しは役に立ったと思えるが、日本でアイスクライミングを練習できなかったことはやはり痛かった。

昼過ぎにBCに戻り、休憩してからカサ・デ・ピエドラへ。この日も天気がよく、振り返ればアコンカグアをきれいに見ることができた。下るにつれてガスが出てきて、山はビエント・ブランコに覆われていった。下りはやはり酸素が濃くなってくることもあって、どんどん楽になり、皆速いペースで下っていった。最後にバカス谷を渡渉してカサ・デ・ピエドラに到着。渡渉した時間帯が昼であったため、前回よりも冷たい思いはせずに済んだ。到着後は風が強く、モンベルテントを立てるのに難儀した。

その後はテント内で、入山前にメンドーサの街で買ったアコンカグアのガイドブックや地図を見て、これから登るルートの勉強をした。藤井以外の二人は未知であったことも多く、有意義ではあったが、同時に出発前に二人が下調べを怠っていたということが露呈し、反省の多い時間となった。食欲は◎で、おいしくたくさん食べられて幸せだった。

2月28日(火) 快晴(強風)→曇り時々雪(強風)

カサ・デ・ピエドラ T.S.(3200m) 9:40~11:30 渡渉~14:30 ボルダー岩~14:55 BC(4200m)

起床後、SPO2を測ると皆90近くある。この高度(3200m)には完全に順応できているようだ。朝はゆっくりして、風が出てきて冷たい渡渉を終え、レリンコス谷とバカス谷の合から少し上がったところで岩陰に、上部ではもう使わない空ガス缶などを土嚢袋に入れてこっそりデポし、その後登り続けた。ザックが軽いこともあり、初めて渡渉点に着いたときよりも楽に半分の時間で登ることができた。これも高所順応がうまくいっている証拠であろう。このタクティクスは効果的だったと言える。しかし唇が乾燥して痛い。

途中で追いついたスイス人らと同時にBCに到着し、4時間ほど休憩した後ドクターチェックを受けた。河村、寿栄松は、SPO2は大丈夫だが血圧が高いと言われ、BCより上部に行く際はこれを飲み、とドクターから血圧を下げる薬をもらった。しかし、藤井はSPO2の値が80よりも低かったので、ドクターストップをかけられた。テントに戻り、今後の方針を3人で話し合った。隊長である藤井がBCより上部へは行けないので、河村、寿栄松で装備、食料をC1、C2へ荷上げし、同時にポーランド氷河の状態を確認してBCに戻り、その時にアタックをノーマルルートからか、ポーランド氷河ルートからのどちらにするかを最終的に決めることにした。夜は小雪が舞っていた。天候は今週ずっと悪いらしい。

2月29日(水) 快晴(強風)

藤井はBC停滞。BC発7:30~13:15 C1着(5000m) ⇔ 5200m地点(河村のみ)

河村、寿栄松の荷上げ隊は、BCで藤井に別れを告げC1へ向かった。重量は20kgほどであるが、高所であるのと同時にこの日は風が非常に強く(風速25m以上)、C1まで上がるのにとっても苦勞した。突風が吹いたときは瞬時に座ることで吹っ飛ばされるのを防いだ。

この時、BCでも風が非常に強く吹いていた。藤井は、度重なる強風に対し、6テンの内側から必死で布とポールを支え、折れないようにこらえていた。外では物が飛びまわっている音がしており、砂埃も舞っていた。しかし昼になっても風が止むことはなく、テント内は高温になり、蒸し暑かった。風はさらに弱まる気配を知らず、さらに強くなった。テントは大きくひしゃげ、ボキッという鈍い音がしてとうとうポールを折られてしまった。折れたポールが布を破ったようであったが、強風がおさまらないため直しに外にも出られなかった。さらにもう一本折れそうな勢いだったので、ポールを片側テントから外した。このまま治まらないと考えると恐怖だった。河村たちを案じている余裕もないくらいだった。BCテントが飛ばされると登山どころではない。いやな想定ばかりしていたが、夕方になりようやく風が弱まってきた。被害を確認するとポールのジョイント部分が折れ、リペアポールは河村たちと一緒に上部に行っていた。しかも、外張りの下のポール道の内側であるから、一人では確認も一苦勞だった。二人が降りてくることを待つことにし、とりあえず応急処置をした。こうしてテントを死守したため、被害を最小限に抑えることができたが、BC常在の仲間がほしい所だった。藤井は18時過ぎにドクター小屋に行き診察してもらった。SPO2が89であったので、明日一日はC1まで順応に往復することの許可がも

らえたので、リペアセットを取りに行くことにした。藤井はこの夜もダイヤモンドを半錠飲んで 20 時に眠りに着いた。

一方、上部の二人は C1 に到着したあと、上部を見たいということで河村のみアメギノコルへ続くトラバース道の途中まで登った。ポーランド氷河もきれいに見られて、とてもよかった。
(河村 記)



プラザ・アルゼンチナ B.C.にて、アコンカグア（左奥の白峰）をバックに。

遠征中盤 登頂にむけて（期間：3 / 1 ~ 3 / 9）

寿栄松孝介

3月1日（木） 快晴 【入山9日目】

〈河村・寿栄松〉起床 6:00~C1 発 8:15~アメギノコル 11:20~C2 15:10~荷物デポ、ポーランド氷河偵察(15:10~17:00)~18:00 C1 着 - 就寝(22:00)

〈藤井〉8:30 起床-9:30 BC 発~10:30 東部氷河出合~12:00 C1~13:30 コル~14:00 テン場適地 (5435m 地点) 15:30 C3~16:10 コル~C1 (16:30~17:35) ~18:20 BC

河村・寿栄松は初めてのC1泊だったが、やはり朝はBCと比べると冷える。天気も非常に良いので放射冷却の影響もあるだろう。昨日とはうってかわって無風。用を足すのも非常に楽だ。ザックの重量は昨日とほぼ同じくらい(15~20kg)。C2で一泊する予定なので幕営具も担ぐ。河村は用を足すとのことで寿栄松は一足先に出発した。トラバース手前まで歩くと河村から「ちょっと待ってー！」と聞こえたので待っていると、空身の河村が歩いてきた。何かアクシデントがあったか？と思ったが、どうもザック重量が重く、C2まで荷上げできそうにないらしい。C1まで少し距離はあるが、シュラフ等はC1にデポしていくことにした。ザック重量はおおかた想像のつくものであったため、行動については前夜に話し合っておくべきだった。

気を取り直して再出発。トラバース上部まで歩くとポーランド氷河も見えてきた。ここから見るとかなり寝ているように見える。アメギノコルまで高度を上げるが、スローペースで歩いたためか、頭痛はない。コルはやはり少し風が強いため、少し上がった岩の横で休憩する。ここで二人とも便意を催したので、岩をはさんで二人とも用を足す。5500mを越えると酸素はさらに薄く、二人とも喘ぎながら高度を上げる。苦しみながら Camp2 Polaco に着くと、目の前にポーランド氷河が現れた。テントサイトからは山頂も見えるため、ポーランド氷河もすぐに登れそうに感じたが、やはりピエドラ・バンドラ横は青白く光っており、傾斜も強く難しそうに思えた。何より滑落した場合に止まりそうどころがなく、そのまま下まで滑り落ちていきそうなのが恐ろしかった。ひとまずザックを下ろして少し休憩すると、寿栄松の体調が急に悪くなった。ひどい吐き気と頭痛に悩まされながらも河村主動でテントやギア類を土嚢袋に詰めてデポする。C2はC1同様、岩の積んである整地されたところがいくつかあるが、ほとんど他のパーティの荷物がデポされていた。

その後、ポーランド氷河の偵察をしようとするが、寿栄松は基部で足が止まり、河村も基部の少し上を歩く程度となってしまった。下部の雪質は日本の春山のようなグサ雪で想像以上にやわらかかった。時間も時間なので下降することに。やはり初高度の6000mは辛かった。登りに7時間かかった道を1時間で下る。C1に着くと体調もかなり良くなっていた。C1付近にあるペニテンテスの間を流れている水流からきれいな水を取り、 α 米とカレーを食べて22時就寝。

この日、藤井はドクターの許可をもらい、単独で高所順応を行っていた。一人でモレーンを登っていると、後ろから大きな荷物を持ったポーターのような人が一人で登ってきた。会釈をして追い抜かされたが、その人はほとんど休むことなくどんどん進んでいったのに

は驚いた。途中で10人以上の登山隊を抜かしたが、その人たちのスピードと比べても、そのおじさんがずば抜けて速いことが分かった。12時ごろ、藤井がやっとの思いでC1に着くころには、コルの近くまで登っていた。コル付近には赤と灰色の服がうごめいているのが双眼鏡を通して見え、河村と寿栄松が無事なのを確認できてホッとした。まだ自身も元気があったので、彼らの順応に追いつくためにもコルまで登ってみることにした。A. el. Monjeなどの巨岩やその背後のポーランド氷河を眺めながらやっとの思いでコルまで上がると、トラバースの手前をよたよたと歩いている二人が見えた。ほんとに進むのが遅く大変そうだなと思ったが、しかし、荷物を担いだおじさんはすでに二人を抜かし、C2直下までたどり着いていた。BCをほぼ同時に出発したのに、C1から出発した河村らを追い抜き数時間でC2までたどり着くなんて、本当に強い人がいるものだと思った。藤井はコルから標高5350mほどのテント場適地（整地跡がある）まで登った後、コルからノーマルルートに向かうルートを偵察しに行った。小さなペニテンテスの氷河を二つほど超えると、Camp3 Guanacoに到着した。一張りのテントがあるだけで、北面にはアンデスの素晴らしい眺めを見ることができた。この時ふいに後ろから声をかけられ驚いたが、レンジャーが巡視をしているのだった。どこに行くのかと聞かれたので、B.C.に帰ると答えた。そのままぶらぶらと来た道に戻り、コルからは駆け下りてC1まで戻ってきたころに陽が陰ってきた。レンジャーはゴミ拾いもしていた。C1にBCテントのポールが折れたことを書き置きして、BCまで下った。本当に下りは早いのだった。

藤井は、BCに戻っても一人で暇なので、企業テントに遊びに行った。僕らお客のために用意している食材がたくさんあるという。僕らは何も買うつもりはないと言っていたら、どうせ余っているから、とケーキと紅茶 La Virginia を御馳走してくれた。彼らはポーターやガイドもしながら、特別な許可証でもう3ヶ月間BCに滞在して仕事しているとのことだった。レンジャーもやってきてマテ茶を飲ませてくれた。渋い味であったが、高所でゆっくり飲むには向いているような気がした。スペイン語でやけに楽しそうに会話する内容はほとんどわからなかったが、あとで彼らはさっきからタバコについてしゃべっていると聞き、なぜそのネタだけで延々としゃべれるか不思議だった。アルゼンチンの人は陽気なことがよくわかった。最後に、レンジャーの着ているモコモコのダウンジャケットを着せてもらい、写真を撮ってもらった。現地の人たちと触れあえた、楽しい一時だった。これが海外遠征の醍醐味だと思う。

3月2日（金） 快晴

8:00 起床 - C1 発 9:25 ~4600m 地点 9:40 ~10:40 BC 着 - ドクターチェック - 21:20 就寝
〈藤井のみ〉 BC 16:00 ~4600m 地点 17:00 ~19:00 C1 着

今日はBCに下りるだけで気が楽だ。7時に一度起きるが、二度寝し8時起床。初めてC1まで上がった時と比べるとBCまでの道のりにあった残雪もかなり減っていた。1時間半ほどでBCに着く。BCに戻るとほとんど人がいない。エージェントテントも減っており、聞くとところによると私たちが登山期間中最後のパーティのようだ。エージェントやパーク

レンジャーは私たち待ちで退屈しているということだ。BC 周辺を散策していた藤井と合流し、2月29日の強風でテントのポールが折れた惨劇を伝えられる。その後、昼食をとりながら今後の計画について話し合う。まず、ポーランド氷河ルートの可能性について検討する。河村らの偵察結果では下部の氷河の状態を見る限り、技術的にはそこまで困難ではないと考えられる。一方で高所順応は順調に進んでいるとはいえ、ノーマルルートから登頂を狙って敗退する可能性も十分に出てきた。高所順応のためにノーマルルートを登頂し、その後ポーランド氷河ルートからの登頂を狙うという案も出たが、日程的に無理があり、やはり確実にピークを踏むことと安全性を優先し、Falso de los polacos ルートからノーマルルートに合流し、登頂を狙うことにするしかなかった。

メディカルチェックを受けるためにドクターのテントへ行く。ここで初めて全員 SPO2 の値が基準以上になった。パークレンジャーには、以下の計画を伝えると、また彼らから提案された。

私たちが提案したプラン

レンジャーに提案されたプラン

日付	藤井	河村	寿栄松	日付	藤井	河村	寿栄松
3月2日	BC→C1	BC 停滞		3月2日	BC→C1	BC 停滞	
3月3日	C1⇄C2	BC→C1		3月3日	C1⇄C2	BC→C1	
3月4日	C1→C2			3月4日	C1→C2		
3月5日	C2→C1			3月5日	C2→Summit→C1		
3月6日	C1→C2			3月6日	C1→BC		
3月7日	C2→C3			C3はノーマルルートとの合流点付近にある幕営可能場所。3/9にかけては晴れるが天気は下り坂、強風の日もありとのこと。			
3月8日	C3→Summit→C2						
3月9日	C2→BC						

C3はノーマルルートとの合流点付近にある幕営可能場所である。しかし、標高が高く、水も採れないため幕営にはあまり向かないと説明され、高所に長く滞在しても疲労がたまるだけだとアドバイスされる。また、藤井は最も SPO2 が低かったため、レンジャーから「彼に登頂は無理だ」とも言われた。天気もやや下り坂傾向だということで、C3泊が現実的ではないということは納得したが、できるだけ高所順応はしっかりとしてアタックしたかったため、C1往復はしたいと主張したが、聞き入れてくれない。私たちがしっかり高所順応したいという気持ちとは裏腹にレンジャーは早く下山してしまいたいのだろうか？とりあえずがちが明かないので、私たちにも初めての高度・順応不足・自信がないという落ち度があるため、ノーマルルートで決着した。おおむね計画をのむことを伝え、登頂を目指して様子を見ることにした。藤井は、なにより河村や寿栄松がドクターストップをかけられずに済んだのでよかったと思った。それにしてもレンジャー小屋の中は、ガスコンロや電灯があり、ベッドがあり、調味料や嗜好品など食料も豊富にあって快適そうだった。

企業テントでネットを借り、横山にこれからアタックが始まることを連絡する。後日衛星電話で天気予報を確認することやブログになかなか反映されていないことも忠告した。

藤井が C1 に上がる前に皆でテントのポールを修理することになる。出発前に予備ポールジョイントのサイズを確認しておいてよかったが、完璧には直らなかった。藤井を見送り、河村は天気情報を得ることと、横山への連絡のためにネットを借りる。その間、寿栄松はエージェントのホセ氏に計画を伝え、無線を借りに行った。無線は 2 台借りたかったが、非常時のみの使用という条件で 1 台しか借りることができなかった。夕食後、ホセ氏が充電した無線のバッテリーをテントへ持ってきてくれた。アコンカグアの緊急連絡周波数は VHF142.800MHz であるらしい。いよいよアタックだ。次に BC に戻ってくるときには登頂の余韻に浸っていることを願った。いつものように目先の苦勞に負けないようにと自分に喝を入れ、少し緊張しながらもぐっすり眠った。

藤井も 3 時間程度で楽に C1 に到着し、かなり順応してきていることが分かった。このような高所に一人であることの自由さに少し興奮しながらも、ダイヤモンド半錠を服用して一刻も早く順応が進むように祈って眠りに就いた。

3 月 3 日 (土) 快晴

**8:00 起床 - BC 発 9:45 ~4600m 地点 11:30 ~12:50 C1 着〈寿栄松のみ〉⇔16:45 コル
〈藤井のみ〉起床 8:50 - C1 発 11:15~コル 12:15~C2 周辺(14:00~16:45) ~17:30 C1 着**

河村と寿栄松は、ゆっくり 8 時に起床。今日からアタックだが、C1 に上がるだけなので気が楽だ。いつもは高所靴を履いていたが、寿栄松は高所靴を担いで、トレッキングシューズで出発した。初めのところは果てしなく感じていた C1 への道のりも、今ではほぼ日本の夏山と同じような感覚で進むことができる。初めてきたときは 6 時間かかったところを 3 時間で上がることもできた。しかも頭痛等も全くない。やはり順応は重要だ。

藤井は、5000m での孤独な一晚を過ごし、二度寝を重ねて 9 時前に快適に目覚めて C2 に向けて出発した。マイペースで登っていると、激しい頭痛や体調不良などはなかったが、やはりしんどかった。怪我をしないように慎重に歩いた。C2 にはテントはひとつもなく、ポーランド氷河の基部まで行ってみた。気温 15°C、気圧 502mbr。下部は本当に薄く雪が載っているだけで、ひたすら長い斜面なので、ふつうに登れそうな気がした。藤井は個人的には登頂より氷河ルートに挑戦することを重視していたが、隊としては悩みどころであった。ピエドラバンデラはものすごく近くに見えたが、BC へのアプローチ時に見た距離感とあまりに違った。あまり氷河を登って行くわけにはいかないので、雪の切れた箇所をつないで、西側にトラバースし、氷河を横から見てみることにした。傾斜角もそれほど強くないが、それでもピエドラバンデラは非常に近く見えた。岩砂利の上をトラバースしていたが、そこにも踏み跡があった。それをたどり、Falso de los Polacos ルートに合流した。ノーマルルートへ合流する方角と位置関係を地図と照らしてよく把握した後、C2 まで引き返した。どちらに行くにせよ、天気条件がどうなるかが一番気になった。

河村と寿栄松は C1 で水を汲み、テント内でゆっくりお茶を飲む。昼過ぎなのでとても暖かく、しかもすることがないため猛烈な眠気が襲い掛かる。睡眠は高所順応にマイナス効果があると聞いていたので、必死に目を開けていようとするが限界だと感じ、外に出る。

せっかくなので寿栄松は順化と荷上げを兼ねて高所靴とギア、ハーネスを持って高度を上げることに。アメギノコルを越えたあたりでデポ適地を探していると、16:45 ごろにちょうど藤井が下りてきたので、そこにデポすることにした。その後、2 人ともテントへ戻り、久しぶりに 3 人で夕食をとる。西陽のあたる東側の山々が薄ピンク色にひかり、とてもきれいだった。22 時ごろ就寝。

3月4日(日) 晴れのち曇り

7:00 起床 - C1 発 9:05 ~アメギノコル 10:25 ~13:15 C2 着 - 就寝 21:20

今日も行動時間は短いことが予想されるので、ゆっくり準備して出発する。アメギノコルまで 1 時間ほどで着き、皆体調も良さそうだ。デポを回収した後から寿栄松が遅れだす。やはり 6000m 以降の順応は簡単ではない。それでも昼過ぎには C2 に到着し、テント設営する。初めて C2 に来たときと同じで、やはりテント設営などの作業後は頭痛がひどい。できるだけ薬には頼りたくなかったが、寿栄松はダイアモックスを半錠服用した。

夕食後、天気情報を得るために在京の横山に衛星電話で連絡を取る。横山によると、5 日から 7 日にかけて徐々に風は弱まり、8 日から降雪の可能性があるとのことであった。最も風の弱い 7 日にアタックするという案も出たが、予備日を残しておきたいという気持ちが大きく、6 日にアタックすることとした。5 日は最も風の強い昼頃にノーマルルートとの合流点まで行き、偵察と強風を体験することにした。

就寝前、今まで応援してくれた人の顔が思い浮かび、正直「登りたい」という気持ちよりも「登らなければ」という気持ちのほうが大きかった。たくさんの応援を裏切ることだけはできないと思った。

3月5日(月) 快晴

9:30 起床 - C2 発 12:30 ~15:30 ノーマルルート合流点~16:10 C2 着 - 就寝 20:00

アタック日は 3 時半発の予定なので、3 時半に一度起きて SPO2 を計る。みな数値は高くはない。すぐに二度寝し、9 時半に起きる。食事をとり、昼過ぎにノーマルルートとの合流点を目指して出発する。Falso de los polacos ルート との合流点まではトレースのない雪面を上がっていく。風は予報通り強いが、天気は良く、行動に問題はない。C2 までの道のりとは比べ物にならないくらい手と足が冷える。オーバーミトン等で対応するが、鼻や口元がとても冷たく、息苦しい。ノーマルルートとの合流点までに 2 度アイゼンを使い、雪面をトラバースする。合流点には小さな赤旗のようなものがあり、左へ 90° 曲がるとインデペンデンシア小屋への登りが続いている。2 時間ほどで合流できると思っていたが、3 時間もかかってしまった。周囲の地形を確認し、下降する。アタック後の下降は夜間になる可能性もあったため、目標物となるものをこまめにチェックしながら下りた。下りはあつという間だが、やはり高所での行動は非常に体に応える。テントに着くと疲れがどっときた。ポーランド氷河は相変わらず白く、技術的にはとても簡単そうに見えてきていた。ノーマルルートを終えたら、ちょっと登ってみようと思っていた。

夕食準備をしながら明日の行動について話し合う。明日は起床時 1 時半の時点で全員の SPO2 が 70 以上なら出発するということにした。藤井は SPO2 が三人の中で最も低いため、そのコンディションで隊員の安全を確保するため責任重大であった。夕食時は 3 人で色々なことを話しているのがよかったが、シュラフに入り、沈黙が続くと急に登頂できるかが不安になってきた。何度も地図を見るが、やはり山頂は遠い。そもそも 1 年間国内の山に登ってきただけでこんな山に登れるのか？などという根本的な疑問さえ湧いてきた。とにかく明日の朝、体調がいいことをひたすら祈って眠りについた。

3月6日(火) 快晴

1:30 起床～C2 発 4:00～6:50 ノーマルルート合流点～7:50 インデペンデンシア小屋 8:00～9:10 C2 着 - 就寝 19:30

予定通り 1 時半起床。おそらく人生一の早起きだ。緊張と寒さであまり眠れなかったが、もはやあまり関係ない。今日は自分で自分にストップをかけなければならない時がやってくるかもしれない。最善の判断をしたい。ゆっくりと準備し、予定の 3 時半になるが、風が強くて、少し弱まるまで様子を見ることにする。4 時になり、少しは弱まってきたため出発。藤井は「退く時には退くのでその時はよろしく」と声をかける。出発時から全ての衣類や手袋を着ける。ノーマルルートの合流点までは昨日と同じくらいのスピードで進むが、昨日以上に風は強く、気温自体も低いので、手足がとても冷える。やっと着いたノーマルルート合流点でツェルトをかぶってテルモスの飲み物を飲むが一向に温まらない。それどころかどんどん体力を消耗していきただけだ。途中、ツェルトの外から声が出たのでのぞいてみると、単独の登山者がいた。彼はノーマルルートから上がってきたようで、休まずに高度を上げていった。じっとしていても仕方がないのでとにかくインデペンデンシア小屋目指して進むことにした。インデペンデンシア小屋までは距離は短く歩きやすい道ではあるが、酸素が薄く、かなり辛い。

なんとかインデペンデンシア小屋前まで行くが、そこはさらに風が強くて、すぐに小屋に入った。小屋といっても半壊しており、大人 3 人が入ればいっぱいである。先ほどの単独登山者もいた。「今日のうちにまだ上がるか？」と聞かれ「Yes!!」と元気よく答えるが、正直苦しかった。小屋内ではしばし沈黙が続いた。「今日を逃せばチャンスは明日しかない。でも明らかに風が強すぎる」とおそらく全員が同じ思いでいたが、なかなか下りようとは言い出せずにいた。そのうち河村が「風が強すぎます。明日再アタックを狙って、無理ならそれまでの実力ってことですよ。」と言う。まさにその通りだと思ったし、妥当な判断だと思ったが、明日登れなかったら…と考えると非常に心苦しかった。6000m 以上の上空をふきわたるゴオオオという風のうめきはそれだけで背筋が冷たくなり恐怖を感じることができた。それでも風は強まる一方で、仕方なく小屋を出て下降を始めた。

ノーマルルートとの合流点まで下りると風も弱まり、一気にテントまで下りた。行動中はそこまで疲れを感じていなかったが、テントが見えると疲労が襲いかかってき、倒れるようにそのままテントで眠ってしまった。

30分後、目を覚ますと2人も同じように高所靴を履いたまま眠っていた。高所での行動はいかに体力を奪うかを痛感した。私個人としては、この時「アコンカグアを舐めていた」と感じた。多少の風があっても日本の冬山経験もあるし、大丈夫だろうと甘く見ていたが、アコンカグアの風と気温の低さは日本の冬山とは比べ物にならないくらい自分たちの体力を急速に奪った。最も風の弱いとの予報の3/7をアタック予備日としたのは焦りの表れだったと思う。ルートをノーマルルートに変更したことで、登れなければいけないという気持ちが強まってしまった。

メンバー全員かなり疲労はたまっていたものの、チャンスは明日しかない。明日は予報通り風が弱まることを祈って、眠りについた。

3月7日(水) 無風快晴 【入山15日目】

1:30 起床～C2 発 4:10～6:15 ノーマルルート合流点～7:15 インデペンデンシア小屋～9:20 カナレータ入口～アコンカグア山頂(12:20～13:15)～14:15 インデペンデンシア小屋～14:30 ノーマルルート合流点～15:15 C2 着 - 就寝 21:00

深夜に起きる。SPO2は昨日よりも低い、風はかなり弱い。昨日の疲労はあまりとれていないが、行けるかもしれないと思った。ノーマルルート合流点までは3度目に通る道で、すんなり登っていこうとするが、しばらくすると藤井・河村が遅れ出した。ノーマルルート合流点で河村と合流し、河村から「藤井さんは少し遅れているが、気にせず進んでいい」と伝えられる。寿栄松がインデペンデンシア小屋に着いたときにはまた二人と距離が開き、ここで1人でも登る覚悟を決め、小屋にハーネス・ギアをデポした。出発。昨日よりもかなり調子は良く、天気もよかったため、かなりテンションは上がっていた。先行する登山者もいた。大トラバースも順調に越え、核心と思われるグラン・カナレータの入口で休憩していると、はるか後ろから藤井・河村の姿が見えた。ここで待とうと思うが、藤井に「行けるなら先に行け」と指示され、そのまま進む。グラン・カナレータはやはり傾斜が比較的強く、空気を吸い込むだけで一苦労だが、聞こえるのは自分の荒い吐息とアイゼンが雪を踏む音だけで心地よかった。後ろで河村の息遣いがうるさいが、振り返れば南米の大地が延々と広がっている。えらいところに来てしまった、親不孝だなあ、などと妙に冷静に頭が働いた。カナレータを越えると広い斜面に出て、雪岩混じりの稜線を東に向かって歩く。山頂直下、本当にもう少しというところで2人を待って合流し、全員で最後の岩を越える。現地時間12時20分、無風快晴、やっとピークに着いた。長かった。本当に長かった。入山口からの道のりも長かったが、2年前からの計画検討や日本の山でのトレーニングを思い出し、やっと努力が報われたと感じることができた。まわりを見渡すと360° 広大な大地と青空だけが広がっている。地球の上にいることを実感した瞬間だった。後から登ってきた河村と抱き合うと、自然と涙が流れてしまった。藤井は相変わらず飄々としている。写真を撮りまくって、相変わらず無風快晴だが、たっぷり1時間弱山頂でゆっくりしたので下山を始める。いつもそうだが、下りはあっという間だった。ここで寿栄松が先に下りてしまったので、藤井は河村を見ながら寿栄松が滑落していないかハラハラしながら下りて

いた。しかし C2 付近に人影が見え安心した。藤井は最後の日に十分に統率できなかったことを反省した。高所登山はここが怖いと思う。

3人全員が無事 C2 に戻り、みんなで寝転び、にやけながら「登れたなあ」などと言い合う。藤井はここにきて涙を流していた。リーダーは登頂だけでなく下山まで責任を持たなければならないんだなと感じた。みな倒れるように眠り、19 時頃に起き出し、夕食の準備をゆっくり始める。夕食をとるとみな少し元気が出てきて、横山に衛星電話をいれる。もう SPO2 も気にしなくていいと思うとぐっすり眠れた。最高にワクワクドキドキした一日だった。

◎登頂直後の感想

河村：ピークに立てて一安心しました。いろいろ大変なこともありますが、それが登頂という形でむくわれてとてもうれしかったです。いろんな景色が見れて良かったです。

残りの日も楽しんで、無事に日本に帰りたいです。

寿栄松：日本に帰りたい。ノーマルルートではありますが、たくさん応援をしてくれた方々に対して、登頂という結果で応えられたことを嬉しく思います。改めて、多くの方に感謝したいです。今回味わえた感動を後輩と共有できるような活動を続けていきたいです。

藤井：三人全員で登頂できて、とてもありがたいと思っています。遭難事故以来、三年分の思いが詰まっていた分、無事に下山した時は、安心して胸がいっぱいになりました。責任のおもい立場でしたが、今は挑戦して良かったと思っています。あたたかい支援をくださった皆様、支えてくださった皆様には、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

3月8日(木) 快晴

10:00 起床 - C2 発 12:40~13:00 コル~13:15 C1 (撤収) 14:10~15:15 BC 着 - 就寝 23:00

7時起床のはずが二度寝三度寝し、10時起床。C2にもかかわらずおそらく今までで一番良く眠れた。やはり登頂するまではかなり気を張っていたのだろうか。C2を撤収しようとするが、打ち込んだペグや支点としていた岩が凍って外張りや地面にくっつき、回収に非常に苦労した。C1も撤収しながら下りるが、ザックは25kg~30kg程度あり、重い。よくこれだけ荷上げたなあと自分で感心した。

BCに着き、ホセ氏やレンジャーの歓迎を受け、頭を洗ったりテントでぼーっとしたり、各々自由な時間を過ごす。BCは平和だ。しばらくして3人で隊荷整理をしていると、ホセとパークレンジャーが装備の一部を売ってほしいと言ってきた。20mロープや細引き、アイゼンなど、それぞれ拙い英語で交渉しながら売っていった。少し落ち着いたところでテントに入り、BCにある食糧を全部出してみると、すさまじい量の食糧が余っていることが分かった。夕食でもできる限り消費したが、明日以降は毎食苦しくなるほど食べないと無くなりそうにない。贅沢な悩みが増えて嬉しい限りだった。

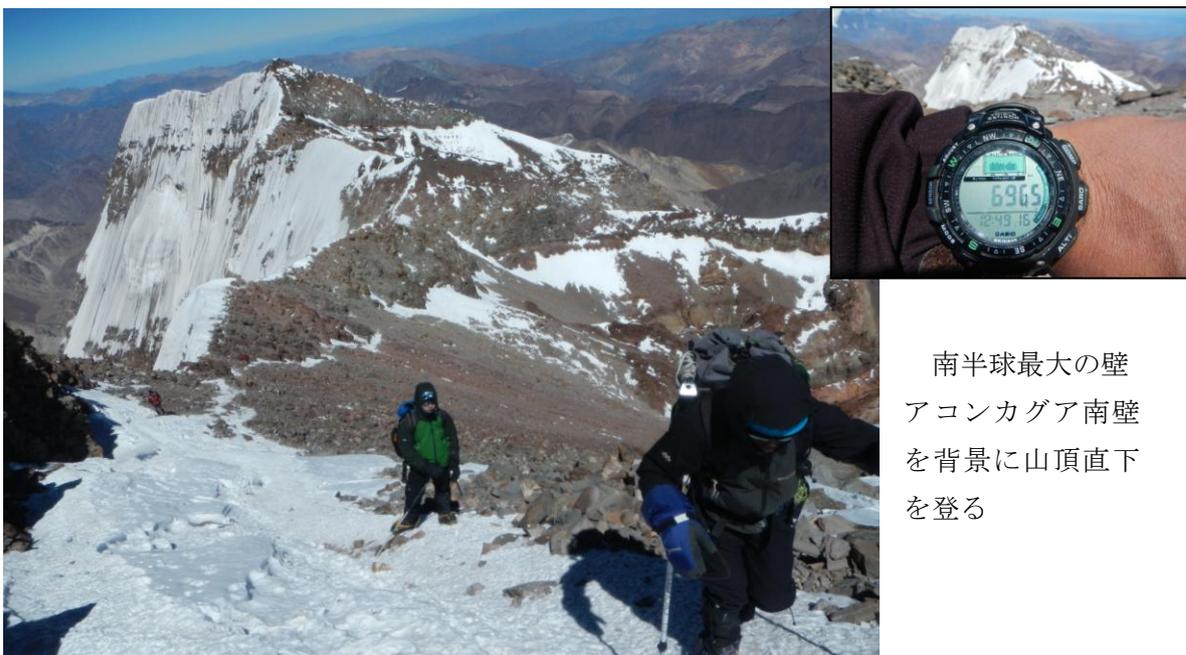
3月9日(金) 快晴

休養日。9:30 起床～隊荷整理～就寝 22:30

今日は完全な停滞日だ。上部キャンプの荷物を全て撤収し、一段落。次は残った食糧を大量に消費するという課題が残っていて、朝食からパン、ツナ、チーズ500gを、様々に工夫をこらして食べ続けける。間食としてひたすらチーズをガスであぶって食べ、昼食にパスタとチーズ400gを食べた。常に胃がはち切れそうだ。もう体調を気にしなくて良いので気が楽なうえ、はやくビールが飲みたいと飢えている。じっとしては腹が減らないので、水を汲んで洗濯したりブラブラしたりで時間をつぶす。夕方になるとホセ氏がムーラに乗せる荷物を預かりに来てくれた。ホセ氏と荷下ろしの重さの交渉をする。ゴミはタダで預かってくれるというので、壊れたダッフルもゴミとして一頭分60kgそろえる。しかしホセの重量計で計るとなんと70kg以上ある。ホセは荷をはかりにかけてもち、目盛りを読めという。確かに60kg以上はありそうだったが、計りは計量前の時点で2kgを指している。明らかに計りも狂っている。ムーラは60kg以上持てないと言い、べつの土嚢袋を持ってきてそっちにつめろと言う。しきりにOKOKというので、土嚢袋2つに荷を少し移し、はかるとそれぞれが10kgだという。明らかに計りがおかしいと抗議するが証明ができない。ホセはしきりにOKOKというのでサービスで持ってくれるのだと思い、82kg分の領収書もらう。下りはムーラ一頭しか雇っていないため、60kgまでしかのせられないはずだが、OKと言って快く受け取ってくれた。ほとんどのテントが消えていた。

帰りは2日かかり、11日にプンタ・デ・バカスに着いた後、バスでメンドーサまで行き、ムーラにのせた荷物はホセ氏がメンドーサまで運んでくれると説明された。至れり尽くせりで本当に助かった。一応荷物のパッキングが終わり、後は明日になるのを待つだけだった。登頂には成功したが、ノーマルルートであっても全てうまくいった訳ではなかったので少し心残りや反省点はあったが、もう下山するしかないので気持ちは楽だった。夕食も食べきれないほど調理し、苦しみながらなんとかたいらげた。明日はBCともお別れだ。相変わらず天気は良く、美しい星空を目に焼き付けた。

(寿栄松 記)



南半球最大の壁
アコンカグア南壁
を背景に山頂直下
を登る

遠征後半 最後のアルゼンチン（期間：3/10～3/19）

藤井良太

3月10日（土） 曇りのち雨 【入山18日目】

8:00 起床 - BC 発 11:00～渡渉連続～カサ・デ・ピエドラ対岸 14:00～渡渉～13:40（標高3120m 地点）～降雨 17:00～17:30 露営決定 - 就寝 22:00

7時起床予定だが、8時起床。もはや二度寝は登頂後の定番となってしまっている。朝食をとり、さらっと下山してしまいたかったが、テントがたたみ終わりパッキングを済ませる頃に、一人のレンジャーが近寄って来て、何やら請求してきた。話を聞くと、ゴミ袋を出せ、排泄物を見せろというのだった。よく聞いてみるとどうやら高所キャンプでのトイレはどうしたかと尋ねているようだ。私たちは、ゴミ袋の使い方を勘違いしており、普通のゴミ袋として使っていた。それは上部キャンプでの排泄物入れだった。確かに日本で読んでいたガイド本の記事には書いてあり、登山許可証の裏面にも書いてあり、河村も登山研修で聞いていて携帯トイレまで用意していたことを思い出した。しかし、実際にはすっかり忘れていたと言うほかない。その上、入山口のレンジャーは、英語の下手なレンジャーで、うまくコミュニケーションができていなく、また上部キャンプにも排せつ物がたくさん落ちていたため考えが甘くなったようだ。英語の課題点がこの最後で暴露される結果となった。しぶしぶ三人分の罰金 US\$200/人を支払った。やはりトイレの件はもう少し慎重になっておくべきだった。腹は立ったが一応お礼をし、別れを告げて下山する。

11時ごろに下山を開始した。結局、大幅に出発が遅れてしまった。しかし勝手知ったる道なので進度は早い。何度もアコンカグアをふり返りながら写真を撮りながら名残惜しげに下る。2時間ほどで渡渉地点に付き、峠で一休みした。すると、川の上流部を4本足の動物が渡っていった。グアナコだった。野生を見るのは初めてで、最後に見れて良かった。そのまま狭くなる谷を渡渉しながら下りていく。3度くらい渡渉をすることになったが、ここで河村が着地しそこなってこけてしまった。怪我はなかったが、重いザックのため痛かったようだ。油断大敵だ。

帰りは、カサ・デ・ピエドラのキャンプ場は通らずに、右岸の踏み跡をショートカットして進む。雲が出てきた。湿地帯になり、このまま右岸を進めるかどうかわからなかったため、ひざ上くらいの渡渉をして左岸のもとの道に戻った。ここでも大量のグアナコを発見した。やはり野生動物も多くすんでいるようだ。

天気が徐々に悪くなってきた。4000mより上はガスって雷も鳴っているようだ。この悪天が上部キャンプにいる間に来なくてよかったと思った。下りはほとんど無口で進んでいく。行きに高まった道がよくわからなくて、崩れる斜面をえいやと巻いて渡った。河村は、一度渡渉で失敗していて靴の中がびしょびしょなので、気にせず水の中を直進している。本当にまるでムーラのようなようだった。それからもひたすら長い道を下る。14時過ぎから小雨。一本道ではないので、道を見失うが、突き進めば合流できる。あと2時間ほど歩けばパンパ・デ・レーニャスにつけると思ったが、雨が降って来てどうにも進みたくなかった。雨は雷も混じりどんどん強くなった。道の途中（3120m 地点付近）であったので河村は嫌

がったが、藤井がここでビバークすることに決めた。指定地以外で宿泊すれば、レンジャーに見つかったらまた罰金になってしまうが、この雨の中歩を進めるのは常識から考えてありえないのでテントを張り、もぐりこんだ。結果的にこの判断は正しかった。本当はもう2時間早く出発できていればちゃんと着けていただろうが…。

外張りはムーラに預けたため、テントはびしょ濡れで、中にもどンドン水はたまってきた。ちょうど水も汲みに行けなかったので、コッヘルを全て使って雨水をひたすら集めてる過し、ペットボトルにためた。濾過機がとても役に立った。その雨水は調理にも利用した。相変わらず飯はまずいが、明日でこの生活も終わりだと思うと全てが許せる気がした。残ったパンや肉を食べて時間をつぶしていると、夜中に雨はやんで冷え込んだ。乾燥したこの土地ではガスをたくとすぐにあらゆる服は乾いた。テントのびしょびしょのテント内で、なんとか寝る体制を整えて、10時頃睡眠した。

一度トイレに外に出ると、真っ暗な両側の山の山頂がうっすらと白く染められていた。

3月11日(日) 快晴→晴れ 【入山19日目】

4:30 起床～3120m 露营地 6:45～パンパ・デ・レーニャス 9:00～13:40 プンタ・デ・バカス=14:30 プエンテ・デル・インカ=メンドーサ市～就寝 26:00

朝早く人が通る前に起きた。簡単に食事を済ませて、テントを畳んだ。テントはすでにかかなり乾いていて、やはり日本の山と違うなあ実感した。忘れ物がないか確認し、ふたたび歩き始める。谷底なので最初は寒かったがすぐに温かくなっていく。西側の山の頂に朝陽が差しとても美しかった。河村はおなかをこわしてトイレに行ったため少し遅れ気味になった。丘を越え、橋を渡った所で休憩した。あと10分でキャンプ場だ。「昨夜はどこに泊ったか」と聞かれるのを心配したが、チェックアウトは最初の登山口でやってくれとのこと、あいさつ程度で通してくれた。ヘリが上流に向けて飛んで行った。もう登山シーズンも終わりだ。

そこから先も長かった。道ははっきりしているものの、徐々に暑くなって来て疲れてきていた。三人はそれぞれ自分のペースで歩き、付きつ離れつで歩いた。この時河村は妙に遅かった。ようやく国道正面の山が見えてきてからも先は長かった。ポプラの木々が見えてきてダムが現れた。ずいぶん砂がたまっていた。そこから木陰で休んで三人集まり、ともに出発した場所に無事ゴールインした。これで終わった。

チェックアウトを行い、「次来た時にはトイレ袋を忘れるな」と注意を受けた。その後、待っていてくれたオズバルド氏のトラックに乗って、プエンテ・デル・インカまで移動した。プエンテ・デル・インカは観光客でごったがえしていて、とりあえず店でビールとバーガーをいくつも注文し、無事下山を祝った。この一杯のアンデスビールは自分の中で最高にぜいたくだった。店からラウラに電話をかけて下山報告を行うと喜んでくれた。バスまで3時間ほどあったが、ビールを何杯もおかわりしておなかいっぱいホロ酔いになった。店の裏には地名の由来になった「インカの橋」があって、ぶらぶら見学もした。

16時ごろ、バスに乗り込み、アンデス山脈を後にした。賑やかなメンドーサ市内に着い

たのは19時頃で、暗くなっている。ホステルの兄ちゃんの「日本人の女の子も泊っているよ」という誘いこみに乗って車で送ってもらった。下山後は、結局そのホステルで連泊することになった。久しぶりのベッドに戻れて、シャワーも浴び、きれいな身体でぐっすり寝ることができた。

3月12日(月)、13日(火) 隊荷整理。休養日。

レンタルしていた装備を店ORVISに返しに行き、再びおっさんからバンダナをプレゼントにもらった。ピッケルやギア類は早めに梱包してしまったが、それ以外の装備は処分に困った。食品類はホステル滞在期間におおかた食べつくした。民宿アコンカグアを見学するのも兼ねて増田氏にあいさつに行ったが、あいにくの留守で面会することはかなわなかった。登頂写真を現像して裏に、応援していただいたみなさんにメッセージを書いて投函。広い郵便局だった。夕食は約千円で食べ放題のバイキング「Las Tinajas」。あとはお土産さがし。翌日からの各自自由行動の計画を考える。見たいもの・行きたいとこ・やりたいとこはたくさんあり、なかなか決められなかった。地図では近く見えるが、パタゴニアやイースター島、ウユニ塩湖、ペルーアンデスに行くには、少なくとももう一週間ずつはほしい所だ。

早稲田大学山岳部の登山隊も、全員ではなかったものの登頂に成功し、皆無事下山してきたということでもよかった。彼らはブログにアップするのがとても早く感心した。KPUACのブログにも登頂写真をすぐにアップしてもらった。心配してくれていた人たちへ、登頂成功の報告ができて良かったうえに、様々なコメントも頂いてうれしかった。

アコンカグアに挑戦し同じホステルに舞い戻ってきた日本人放浪者らのカップルと会食し、お互いの身の上話や、なぜ山に登るのかなどのお話をして盛り上がった。手料理も御馳走になり、ありがとうございました。

3月14日(水)～16日(金) 自由行動。観光。

14～16日の3日間で、河村と藤井はとなりのサスカチュワン州に旅行。早朝に長距離バスで出発。世界自然遺産で奇景の有名なイスチグアラスト州立公園や、タランパヤ国立公園の観光を通して、サボテンのある現地の風景と人々を堪能した。古生物を研究している者にとって、大変魅力のある場所であった。河村は、同じく観光していたフランス人の人らとコントのようなことをして楽しんでた。ここでもアサードと呼ばれる炭火焼牛肉が最高においしかった。しかし河村はアコンカグアの方が充実していたと言っていた。

寿栄松はメンドーサ周辺に留まり、15日と16日は、プエンタリング(バンジージャンプ)やワイナリー巡り、自転車で市内観光をして、酒と肉の豪遊を楽しんだ。

結局、アルゼンチンに居残る人間は出なかったのは残念であった。

3月17日(土)、18日(日) 帰国フライト

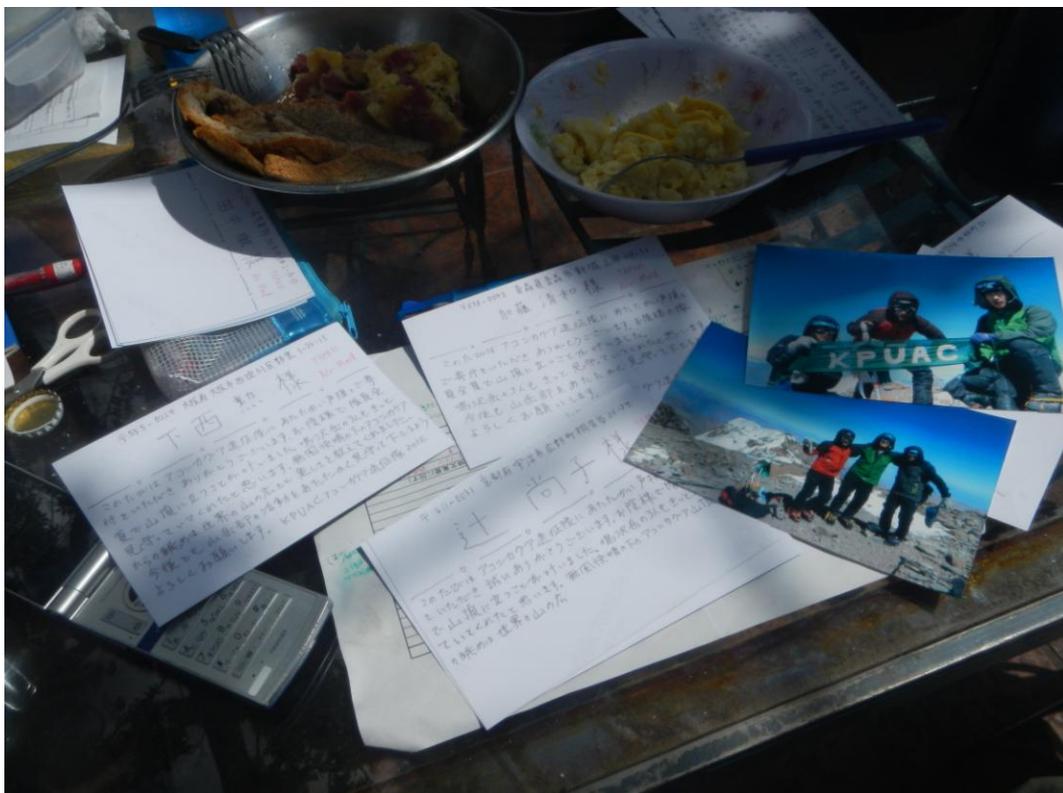
17日の昼にタクシー二台で空港に移動。待ち時間があったので、ペソを使い切る意味で、

空港内のレストランで肉とワインを食べ、最後のアルゼンチン食を楽しんだ。アンデスを越える帰りの飛行機からは、アコンカグアが間近にぼちりと見え、うれしかった。登ったルートが分かるので、とても綺麗に見えた。「山よ、さよなら」と心の中で別れをつげた。

チリのサンティアゴでは観光している暇はあまりなかったが、空港内の土産物屋を回った。米アトランタでは、またもや乗り継ぎ時間に余裕があり、町を少し観光したが、とくに何もなく、長いフライトまでの時間をつぶしただけであった。機内では映画を何本も連続で見られる計 20 時間以上のフライトであったが、帰りということもあり、気は相当に楽であった。報告書の作成に忙しくなるなと思っていたが、帰国するまでは考えないことにした。しかし最後に問題が起こり、シアトルで寿栄松のアンプロバッグが出てこなかった。ロストラゲッジの情報を得に行くことで時間を費やしてしまった。結局、どこかにまぎれて日本に届くだろうから大丈夫と言われ、米国を離れた。

3月19日(月) 帰国

帰国。結局、寿栄松のバッグは見つからず、空港スタッフに謝罪され、送り届けてもらうことになった。これは後日無事に藤井宅に届いた。空港には、山岳部員と藤井両親が出迎えに来てくれていた。山岳部一回生のしゅうしゅう(和田)が作ってくれた登頂祝いの旗を前に写真を撮って、横山の運転で帰路に就いた。途中、くら寿司で日本の米をたらふく食べた。やはり日本食はうまかった。(藤井 記)



登頂後のホステルで

係 報 告

P 計画→D 実行→C 評価→A 改善

装 備

医 療

食 料

燃 料

輸 送

梱 包

保 險

会 計

涉 外

通 信

気 象

在 京

装 備

担当：河村友裕

装備表は「登山技術全書 12 海外登山」(山と溪谷社)をもとに作成した。日本の冬山縦走装備を基本とし、加えて羽毛ミトンや高所帽、ダウンパンツのような高所登山に適する装備やスクリー等の水氷登攀用装備、衛星電話といった通信機、パスポートなどの海外旅行に必要なものを揃えた。

登攀具はポーランド氷河ルートを選択しなかったため、使用しなかった。氷河末端は夕方時で雪がグサグサで、日本の残雪期のような雪質であったため、スノーバーも使用できそうであった。しかし、朝方やさらに寒い上部ではその雪質のままでは考えにくく、硬い氷面を登ることを想定してスクリーを持っていくべきだと感じた(今回は4つ持参)。

最終アタック時に羽毛ミトンや革 or 化繊のダブルブーツ、高所帽を着用しても、日光が当たるまで手足の指先が終始冷たかった。凍傷予防を全部装備の質の向上で賄うことはできないと感じた。また目出帽は息がしやすいように鼻や口の部分に穴が開いているものが使いやすかった。今回、オーバーシューズを用意しなかったが、インデペンデンシア小屋以降はアイゼンを着用し続けたので、あつたら足の先が冷たくならずにすんだかな、と感じた。

幕営に関しては、BC と BC までのキャラバンで「RIPEN エクスペディションドーム ナイロン 6」を、C1 で「モンベルジュピタードーム 4 型」を、C2 で「RIPEN エクスペディションドーム ナイロン 6」を使用した。今回の登山では強風が予想されたため、テントにはすべてフライではなく外張りを使用した。それでも、強風の日では、BC テントのポールが折れるなどの被害が出て、自然の猛威を思い知らされた。

現地購入品リスト

ウレタンマット	1 枚 (1 m × 15m)
トイレトペーパー	1 2 ロール
包丁 (果物ナイフ)	2 本
ライター	6 本

現地レンタル品リスト

フリースパンス	2 着 (河村、寿栄松)
フリースミトン	1 セット (寿栄松)
ストック	1 セット (藤井)
ダッフルバック	1 つ

個人装備

[ウェア類]

ダウンジャケット・・・フード付のものがやはり暖かった。

ダウンパンツ、フリースパンツ・・・河村、寿栄松は現地でレンタルする予定であったが、それがレンタルされていなかったため、代わりにフリースパンツをレンタルした。保温性に問題はなかった。

羽毛ミトン・・・藤井、河村は予め用意した羽毛のものを、寿栄松は現地でレンタルしたフリース地のものを使用した。薄地と中厚手のウール製の手袋 2 枚の上に着用したが、それでもアタック日は日差しを浴びるまで手先が冷たかった。凍傷予防には羽毛ミトンに加えて、更なる工夫が必要であると感じた。

高所帽・・・河村のみが最終アタック時に使用した。使ったものはマジックマウンテンのデナリ。被るのと被らないのとでは暖かさが全然違った。やはり頭部を暖めることは重要だと感じた。

目出し帽・・・口の部分が空いているものが、息がしやすく使い勝手がよかった。

[ブーツ類と登攀具]

高所靴・・・藤井と河村はボリエールの G1 を、寿栄松はスポルティバのспанティークを使用。特に問題はなかった。

オーバーシューズ・・・今回は使用しなかったが、あればアタック時の足の冷えに困ることはなかったように思う。ただ、アイゼンと靴とのフィッティングが重要なので、日本できちんと用意したものをしようするべき。

アイゼン・・・寿栄松の靴(спанティーク)とアイゼン(モンベル-カジタックス)の相性が悪かった。具体的にいうと靴先がアイゼンの前爪に少し被っていて、蹴りこんでも前爪の先しか雪に食い込まない状態であった。氷河ルートはアイゼンがないと話にならないので、予備アイゼン(カジタックス)を用意したが、それがよかった。

ストック・・・用いた方が身体のバランスをとりやすく、重宝した。長さ調節がねじ式のもものは結合部に砂塵が入って調節しづらくなるので、要注意。

[生活用具]

エアマット・・・河村、寿栄松はイスカに協賛してもらったピークライトマットレス 165 を使用したが、寿栄松のものが、空気が抜けていて使い物にならなかった。寿栄松は予備マットを持っていたのでそれを使っていた。エアマットはこういうことがあることを頭に入れておき、丁寧に扱うべきである。

シュラフ・・・ダウンが 800g ほど入ったものを使用した十分に暖かった。

尿ボトル・・・高度に身体を早く慣れさせるために、ダイアモックスを服用した隊員は、この薬の利尿作用により、尿の頻度が高かったためこれを重宝していた。

個人装備一覧表

総重量 (/人) 27,095g 重量の単位 g ※は特に重要なもの

	品目	単重量	数量	重量	備考	
ウェア類	※ダウンジャケット	370	1	370	フード付、高保温性、軽量なもの	
	※ダウンパンツ	210	1	210	軽量なもの	
	アウタージャケット	570	1	570	モンベル協賛品、藤井=緑、河村=灰、壽榮松=赤	
	オーバーパンツ	570	1	570	モンベル協賛品、黒色	
	フリースジャケット	360	1	360	保温性を得るための中間着	
	フリースパンツ	290	1	290	オーバーパンツ着用時にも足の動きを妨げないもの。	
	トレッキングパンツ	400	2	800	町からベースキャンプまでのアプローチ用	
	長袖シャツ	250	2	500		
	アンダーウェア上	245	2	490		
	アンダーウェア下	215	2	430		
	半袖シャツ	145	2	290		
	下着	60	3	180	速乾性	
	※羽毛ミトン	210	1	210	落ち止め	
	ミトン	100	2	200	落ち止め、一部イスカ協賛品	
	オーバーグローブ	95	1	95	落ち止め、イスカ協賛品	
	保温グローブ	115	3	345	落ち止め	
	インナーグローブ	30	3	90		
	軍手	70	1	70	現地購入	
	ゴム手袋	30	1	30	現地購入	
	ソックス(高所靴用)	120	3	360	1足は予備	
	ソックス(キャラバン用)	95	2	190		
	高所帽	130	1	130	長めのイアーウオーマー付、内側は保温素材	
	目出し帽	55	1	55		
	日よけ帽子	50	1	50	紫外線が強い、キャップ+サンスクリーンでもよい	
	ブーツ類と登攀具	※高所靴	2600	1	2600	
		キャラバンシューズ	1500	1	1500	
ロングスパッツ		350	1	350		
オーバーシューズ		500	1	500	現地レンタル可、※アコンカグアには不適?	
※アイゼン		845	1	845	共同装備で予備あり	
サンダル		225	1	225		
ハーネス		600	1	600	雪山用	
ピッケル		600	1	600	長め、めやす60cm以上	
アイスピル		600	1	600	長め、めやす60cm以上	
ストック		270	2	540	現地購入可能	
環付カラビナ		80	3	240		
カラビナ		60	5	300		
ソウンスリング		30	4	120	60cm長×2本、120cm長×2本	
ビレイ器		80	1	80		
ナイフ		50	1	50		
ヘルメット		450	1	450		
生活用具	※ザック	2000	1	2000	65リットル以上 RIPEN、ギアラック等要改良	
	ダブルバッグ	500	3	1500	輸送用。町にデポ	
	小型ザック	600	1	600	30リットル以上	
	※シュラフ	1320	1	1320	防水、-20℃対応	
	※シュラフカバー	410	1	410	防撥水加工、イスカ協賛品	
	※個人エアマット	530	1	530		
	テントシューズ	200	1	200	防水	
	※サングラス	30	2	60	ハードケース、紫外線が強い	
	ゴーグル	125	1	125	強風寒冷下で使えるもの	
	ヘッドランプ	100	1	100		
	予備ランプ	28	1	28	予備電池含む	
	コンパス	40	1	40		
	呼笛	20	1	20	プラスチック製	
	ペットボトル	65	1	65	2ℓ分	
	テルモス	300	1	300	500ml以上	
	コップ・食器	240	2	480	スプーン&フォーク付	
	計量カップ	95	1	95	水作り兼	
	リップクリーム	20	1	20	紫外線が強い	
	日焼け止めクリーム	50	1	50	紫外線が強い	
	ウェットティッシュ	100	1	100		
	洗面用具	200	1	200	タオル、歯ブラシ、鏡、耳かき、石鹸など	
	裁縫用具	20	1	20		
	ノート、筆記用具	300	1	300	行動記録&日誌用	
	非常用パック	645	1	645	メタ、非常食、エマージェンシーシート、持病薬	
	地図	40	2	80	広域&狭域(原本とカラーコピー)、現地購入	
	尿ボトル	200	1	200		
	トイレトペーパー	111	2	222	防水	
	ライター	30	2	60	現地購入。	
	整理袋	160	2	320	ビニル袋・ゴミ袋多数	
	カメラ	500	1	500	予備電池含む	
計画書	10	2	20			
通貨				日本円 アルゼンチンペソ(US\$から換金)		
※パスポート				予備写真2枚、コピー2枚		

共同装備

[幕営具]

テント・・・強風に耐えられるかも重要だが、強風下でも立てやすいかどうかも重要である。その点では、協賛していただいたモンベルのジュピタードームよりもアライテントのエクスペディションドームが勝っていた。高所であるほうが身体の負担が大きく、テントは立てやすいほうがよいため、C1 でジュピタードームを、C2 でエクスペディションドームを用いた。どちらも外張りの上に岩を載せ、行動中に立てたままにしても飛ばされないようにした。結果、どちらも飛ばされなかったのがよかった。

ウレタンマット・・・梱包の際に緩衝材として用い、ベースキャンプではテントマットとして隊員に快適な眠りを提供してくれた。今回の遠征では大いに役に立った。

ペグ・・・今回は雪が少なかったため、テントの張り綱は岩に絡めるか、ペグで張るかのどちらかであった。そのため、特に上部キャンプにて大いに役に立った。

[生活用具]

スノースコップ・・・テント設営時に整地したりするのに用意したが、雪が C2 でもなかったため使わなかった。

LED ランタン・・・テント内での明かりとして用意するはずだったが、現地で購入するのを忘れてしまった。ただ、サマータイムで 20 時頃まで明るかったため、テント内で明かりを必要とする時間が日本の冬山に比べて少なく、予備のヘッドランプなどで賄うことができた。

[炊事用具]

浄水器・・・アーバンテック SUPER DELIOS を用いた。浄化したい水をマヨネーズの容器のような容器に入れてそこから水を搾り出して浄水するので、時間はかかるが、濁った水も飲めるくらいきれいになるので、持って行ってよかった。特に 3 月 10 日は重宝した。(行動記録参照)

共同装備一覧表

総計重量 174,437 重量の単位はg

品目	規格	単重量	数量	小計重量	備考
【幕営具】		合計重量		20,740	要防撥水加工、記名
テント本体、ポール他 (RIPEN エクスぺディションドーム ナイロン6)	6人用	5800	1	5,800	BC用テント(内張り1150g込み)
テント外張 (RIPEN ナイロン6)	"	2200	1	2,200	BC用テント、黄色
テント本体、ポール他 (モンベル ジュピタードーム 4型)	4人用	2900	1	2,900	C1用テント、協賛品、黄色/オレンジ
テントスノーフライ (モンベル ジュピタードーム4型)	"	1400	1	1,400	C1用テント、協賛品
テント本体、ポール他 (RIPEN エクスぺディションドーム ナイロン4)	4人用	2800	1	2,800	C2用テント
テント外張 (RIPEN ナイロン4)	"	1800	1	1,800	C2用テント、黄色
ツェルト	2~3人用	700	1	700	黄色
テントマット、ウレタンマット		560	4	2,240	4人用テントでマット1枚(あと2枚購入必要)
ペグ		60	15	900	
【生活用具】		合計重量		7,439	
スノースコップ		630	2	1,260	
細引	φ2mm×8m	16	3	48	3g/m、張り綱予備
LEDランタン		315	1	315	現地購入
たわし		60	2	120	BC用と高所テント用
リペアセット		450	1	450	ハサミ、針金、ペンチ、リペアシート、替えポール4
布テープ		200	1	200	
土嚢袋		50	20	1,000	荷物袋、デボ袋、雪袋
医療バック		1000	1	1,000	※詳細は別紙医療品リスト
予備ヤッケ		570	1	570	The North Face=黄
ヤスリ		160	1	160	
パルスオキシメーター		103	1	103	国立登山研修所から拝借
高度計	7000m対応	70	1	70	
トイレットペーパー		111	9	999	
乾電池(単3)		24	12	288	予備含む、携帯充電用1回分(2本)
乾電池(単4)		12	48	576	ヘッドランプ5回分(15本)×3+パルス予備
衛生電話(レンタル)	インサマット	280	1	280	受諾保険付、300円/分 TEL:870*****
クレジットカード	VISA	5	1	5	河村私有物
地球の歩き方(チリ・アルゼンチン)		300	1	300	
ジップロック		5	20	100	
ポリ袋		10	10	100	
電子辞書		500	1	500	
GPS		87	1	87	
錠		50	3	150	
コンセント変換プラグ		200	1	200	
【登攀具】		合計重量		6,420	
クライミングロープ	φ8mm×50m	1750	2	3,500	予備1本、フィックス兼用
アイスクリュー		200	4	800	氷河用
スノーバー		220	4	880	氷河用
予備アイゼン		845	1	845	
アッセンダー・ミニトラクション		255	1	255	環付カラビナ付
エイト環		140	1	140	環付カラビナ付
【炊事用】		合計重量		71,918	
鍋コップェル		345	2	690	
ボウル(大食器)		176	2	352	
フライパン		650	1	650	
調理器具		190	1	190	おたま・しゃもじ・フライ返し・へら・菜箸・パスタング
包丁(大ナイフ)		95	2	190	
まな板		100	3	300	
セームタオル		20	2	40	
ガスヘッド		210	3	630	
茶こし		20	1	20	水作り用
じょうご		20	1	20	水作り用
濾過器・コーヒーフィルター		58	2	116	水作り用
ペットボトル	2ℓ	50	16	800	2ℓ用と1ℓ用、日本製
食料	3食×3人分	3051	20	61,020	※詳細は別紙食糧計画表、現地分購入含む
燃料	1.5日×3人分	230	30	6,900	Progasガス缶、現地購入

医 療

担当：河村 友裕

本遠征では、2007年クビ・カンリ遠征の医薬品リストや「登山技術全書 12 海外登山」(山と溪谷社)、「登山者・トレッカーのためのサバイバル救急・処置読本」(本の泉社)の資料をもとに医療、医薬品を用意した。夏期にアコンカグアで登山を行う際には、BCにドクターが駐在しているので、BC～山頂の間でトラブルがあってもBCに戻るまでに十分な、必要最低限の量を用意した。

凍傷対策として、ビーソフテン軟膏とビタミン剤を持参した。軟膏はアタック前に手足や顔に塗ったが、ビタミン剤は摂取するのを面倒くさがったり、忘れていたりしてあまり摂取できなかった。アタック中に軟膏の効果をあまり実感できなかったが、軟膏はビタミン剤と併用して効果が大きくなるため、ビタミン剤をきちんと摂取していれば、効果をしっかりと実感できたかもしれない。

困ったことは現地で購入した加工食品(ハム、サラミなど)の塩分濃度が高く、皆高血圧になってしまったことである。ドクターチェックの際に指摘され、塩分を控えろと言われたので、そこからは塩分摂取を控えた。それでも高血圧の状態が続いたため、BCから荷上げする際にはドクターから血圧降下剤をもらい服用した。

また、医療、医薬品を用意するにあたって、OBの田中徹ドクターから多くのご助言をいただいた。ここに、心から感謝の意を表す。

系統	名称	主な用途	使用法	持参量	使用量	備考	
医療品	体温計	体温をはかる	脇の下で5分間計測する	1本	—	水銀式のを携行したが、高所では気圧が低いので、使い物にならなかった。	
	はさみ	包帯等を切る	—	1本	—	時々使用	
	ピンセット	ガーゼ等をつかむ	—	1個	—		
	爪切り	爪を切る	—	1個	—	時々使用	
	三角巾	腕等の固定をする	—	1枚	—		
	滅菌ガーゼ	傷を保護する	ピンセットでつかむ	適量	20枚	0枚	
	バンド・エイド	傷を保護する	—	適量	20枚	0枚	
	防水滅菌パッド(M)	傷を保護する	—	適量	4枚	0枚	
	防水滅菌パッド(L)	傷を保護する	—	適量	6枚	0枚	
	サージカルテープ	包帯等を固定する	—	適量	9m	0m	
	テーピングテープ(伸縮性)	足のつり、関節痛		適量	9m	0m	
胃腸系	包帯M	傷を保護する	患部にまいて保護	適量	5m	0m	
	大正漢方胃腸薬	胃痛、消化促進	1日3回食後	1回1包	12包	3包	胃薬。胃粘膜保護+消化酵素補給。登山中に限らず、海外旅行中では普段と違うものを食べるせい、食あたりを起こすことも多いので、持参すべき。
	OM散	健胃消化剤	1日3回食後	1回1包	12包	3包	
ガスター-D	胃潰瘍	1日2回朝、夕食後	1回1錠	16錠	0錠	胃が強く痛む時に服用するもの。痛みがとれても数日は続けて服用すべき。	

系統	名称	主な用途	使用法		持参量	使用量	備考
胃腸系	レベニン	整腸剤	1日3回食後	1回3包	40包	8包	ビフィズス菌による整腸
	プリンペラン	吐き気	1日2~3回食前	2~6/日	12錠	0錠	緊急避難用。吐き気がする時は吐いたほうがよい。
	ロペラミド	高所性下痢止め	1日1~2回	1~2/日	10錠	0錠	強力。胃腸運動抑制。眠気あり。
	コーラック2	便秘	1日1回	1~3錠	10錠	0錠	便秘よりも下痢に悩まされた。
鎮痛・解熱	パファリン	頭痛等を抑える	1日2回が限度 服用間隔6時間以上・ 空腹時以外	1回2錠	30錠	4錠	アタック前に頭痛のため服用
	ロキソニン	より強い。歯痛にも	1日2~3回	1回1錠	20錠	0錠	パファリンより強力。
	PL	風邪	1日4回	1回1包	28包	0包	
抗生物質	フロモックス100mg	抗生物質	1日3回食後	1回1錠	12錠	0錠	広範囲の菌に効く。体内の乳酸菌も殺菌するため、レベニンと併用。重症時2錠可、
のど	トローチ	のどの痛み	適宜 -	適量	18個	12個	アタック中に服用。のどが潤う。
高山病	ダイアモックス250mg	利尿剤	1回/日	1/2錠	30錠	6錠	藤井と寿栄松が服用。服用の経験がない人は効用を知るために予め地上で試してみた方がよい。
	アダラートCR20mg	緊急) 肺浮腫	2錠・1回・日		16錠	0錠	強力。ニフェジピン。心臓や体の血管を広げて血流をよくする。利尿剤と併用不可。比較的安全、血圧が下がり、めまいも。グレープフルーツジュース禁止
	プレドニン5mg	緊急) 脳浮腫	1~12錠・1~4回・日 分服		84錠	0錠	ステロイド剤。超強力。徐々にやめる
消毒	イソジン液	傷を消毒する	-	適量	1本	-	
軟膏	ポリベース	傷の化膿、とびひ	患部に塗る	適量	1本	-	
	リンデロンVG軟膏	虫刺され、かゆみ	患部に塗る	日1~2回	3本	-	蚊等の虫さされ、皮膚炎湿疹等。痒くて掻いているととびひに成るので、掻く前に塗る。ムヒより良く効く。
	ゲンタシン軟膏	感染予防	患部に塗る	適量	2本	-	擦り傷の感染予防に。
	バンテリン	筋肉痛・ねんざ	患部に塗る	適量	1本	1/4本	常用すると筋肉減少
	ビーソフテン軟膏	凍傷予防・血行促進	患部に塗る	適量	3本	少量	凍瘡(しもやけ、赤腫れ)。保湿・血行促進。おだやか。VE錠併用で効果大
目薬	クラビット点眼	細菌感染(抗生物質)	1日3回	1滴	2本	0滴	細菌性結・角膜炎に。
	ヒアール点眼	角結膜上皮損傷			3本	0滴	角結膜上皮損傷(雪目)に。
湿布	パテックス		患部に貼る	適量	10枚	0枚	

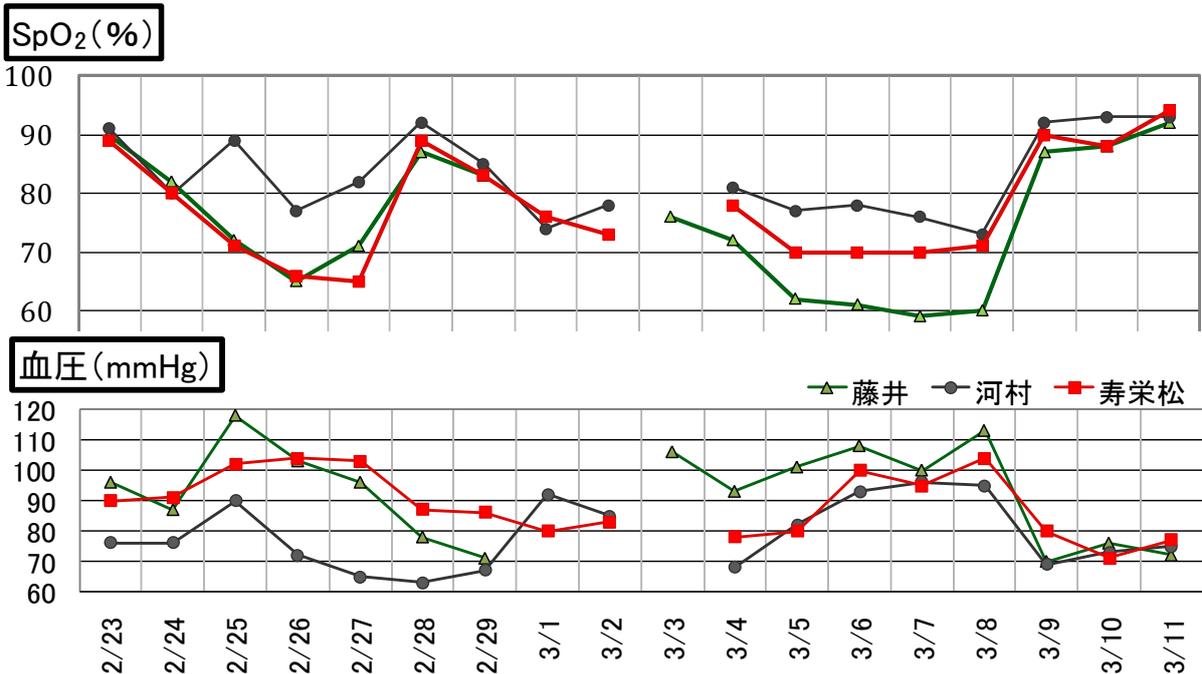
○高所順応について

高所順応を計る指標として血中酸素濃度(以下 SPO2)というものがある。これは言葉の通り血液中の酸素濃度を示すもので、下界での正常値は 90%前後といわれている。今回、高所順応を計るために SPO2 の計測器を持参し、毎朝、各隊員の SPO2 を計測、記録した。またこの測定器は血圧も同時に計測できるため、血圧も毎朝計測し、記録した。なお、SPO2 の計測器は国立登山研修所より貸していただいた。ここに、心から感謝の意を表す。

登山期間中の各隊員の血中酸素濃度と血圧は以下のようになった(図)。この図と実働工程表を見比べることにより、以下のことが見て取れる。

- ・ 血中酸素濃度順応に個人差がある。
- ・ ある標高において、最初に就寝し、起床した日の SPO2 の計測値よりも、次に就寝し起床した日の計測値のほうが高い (2/25, 2/29, 3/9 at BC. 3/1, 3/4 at C1.など)。

また、高所順応のポイントとして代謝をはやくすることがある。代謝をはやくするために水分を大量に摂取し、排泄することが大切である。今回は BC に着いてから毎日 6L 以上の水やお茶を飲むことに努めた。ダイアモックスは利尿剤であり、少なくとも代謝をはやめるといふ点で高所順応に有効であると思われる。



血中酸素濃度値および血圧値のグラフ

アコンカグア登山中の各隊員の血中酸素濃度(SpO₂)値(上)と血圧(下)。縦軸は計測値、横軸は日付、グラフの▲は藤井、●は河村、■は寿栄松を示している。計測は起床時に行った。3月1～3日は藤井と河村・寿栄松は別行動であるため、計測できていない箇所がある。

食糧・燃料

食糧

担当：寿永松孝介

計画方針・改善点

長期遠征では食事の時間が大きな楽しみとの一つとなる。「たかが食事」かもしれないが、充実した食事は行動の活力となり、登頂には絶対に欠かせない一要因であると私は考える。今遠征の食糧計画を立てる上では以下の項目を意識したが、改善点も多々あった。

① 食べやすい、食べ慣れたものであること

特に上部キャンプでは食欲減退が予想されたため、できるだけ普段から食べているものを持ち込んだ。また、行動食やBC食糧冬合宿などでよく使うメニューを採用した。

【評価】高所では予想以上に食欲が減退し、日本食を取り入れたことは正解であった。現地の食糧は口に合わないものもあり、時間があれば下界で試食しておくことが望ましい。

② 安価であること

学生にとっては重要な要素である。上部キャンプ食は軽量である必要があるため、FDなどある程度高価になってしまうが、行動食やBC食は現地調達でコストダウンを図った。

【評価】現地の食糧は安価で、パンやハム、チーズなど、ベースとなる食糧は特に安価に購入することができた。ただし、高所での行動中やBC入りしたばかりのときは食欲が著しく減退するため、できるだけ食べ慣れたものを購入すべきであると感じた。

③ 調理が容易で調理時間が短いこと

疲れてテントに入った後、できるだけすぐに食事ができるように調理が簡単で調理時間が短いような工夫をした。具体的には、下界で肉類を加熱処理しておく、できるだけ米ではなくパンを使う、加工食品(ベーコン、ウインナーなど)を使う、などである。これは保存性を上げることができるという副次的効果もある。

【評価】夕食には生肉を下界で加熱したものと食肉加工品とを併用する予定であったが、鮮度の問題上、すべてハムやサラミ・ベーコンに変更した。これらの食品は非常に塩辛いものが多く、何度か塩抜きする必要があった。

④ 現地調達をできるだけ増やす(重量面で)

輸送費節約・荷物運搬の簡易化のため、できるだけ現地調達できるようにした。日本で調達するものと現地で調達するものの重量比は約1:5にすることができた。

【評価】日本での調達食糧の軽量化には成功したが、アメリカ入国の際、シアトルの税関でビーフとチキンの使われた食品は没収されてしまった。これが大誤算で、ビーフ“エキス”とチキン“エキス”の入ったもの、つまり高所食としてもちこんだFDをごっそりと没収されてしまった。困ったことに、現地にはFDやインスタント食品が置かれておらず、パンやスープなどで高所食を補った。食糧を持ち込む際には経由国の持ち込み制限まで調べる必要があると感じた(ただし、鍋の中に入れておいた食糧はチェックされず、そのまま使用することができた)。

メニューリスト

【BC食Ⅰ】(休養日) (朝)		(昼)
①	ベーコンサンドイッチ	スープ スパ
②	サーデインサンドイッチ	
(夜)		
①	ビーフシチュー、パン、マッシュポテト、海草サラダ	
②	ホワイトシチュー、パン、マッシュポテト、酢の物	
【BC食Ⅱ】 (朝)		(昼)
①	ベーコンサンドイッチ	行動食
②	サーデインサンドイッチ	
③	スープスパゲッティ	
(夜)		
①	チキンカレーライス、マッシュポテト、海草サラダ	
②	ハヤシライス、マッシュポテト、酢の物	
③	ビーフシチュー、パン、マッシュポテト、海草サラダ	
④	ホワイトシチュー、パン、マッシュポテト、酢の物	
【高所食】 (朝)		(昼)
①	シーフードラーメン	行動食
②	カレーヌードル	
(夜)		
①	親子丼、マッシュポテト、酢の物	
②	ベーコンビーフシチュー、パン、海草サラダ	
③	ベーコン麻婆茄子丼、マッシュポテト、酢の物	
④	ベーコンホワイトシチュー、パン、酢の物	
【アタック食】 (朝)		
①	カレーヌードル	行動食
②	きつねうどん	
③	天ぷらそば	
(夜)		
①	麻婆茄子丼、海草サラダ	
②	親子丼、酢の物	
③	カレーライス、マッシュポテト	

記述の留意点を意識し、左記の食糧計画を立てたが、実際にはアメリカで高所食の大半が没収されてしまったり、食欲がないことがあったりと、出発段階では予測できていなかったことが多々あり、機能しないことがあった。逆に言えば、予測不可能なことは海外遠征では必ずと言っていいほど起こるものであり、食糧計画を作成する段階でも、あまり厳密に決めておく必要はないと感じた。

ある程度叩き台となるようなもの(方針や大まかな計画)を立て、現地の食材を見て検討するという形でもよかったと思う。

ただし、高所食はやはり軽量かつ食べやすく、さらに調理に手間がかからないものを事前に用意しておく必要がある、そういった配慮によってアタック時の力を発揮できると感じた。

B.C.での食事は比較的調理に手間のかかるものが多く、異国のどんな味か見当もつかない食品を

皆でああだこうだ言いながら調理するのは楽しかったが、多くのヒマラヤ登山のようにコックを雇うことのなかった今遠征では、高所順応できていない期間に一から野菜を切り、

食材を調理していくのにはかなり苦勞した。實際その苦勞のために使用しなかった食材もいくつかあった。結果として食糧は2割ほど余ってしまった。

食糧買い出し計画表

日本で調達予定 (総重量 12,323g)

現地で調達予定 (総重量 55,074g)

品名	数量	重量
リフィルカレーヌードル	9 個	885g
リフィルそば	6 個	420g
リフィルうどん	6 個	420g
リフィルヌードル	6 個	450g
アルファ米	2,400g	2,400g
ホワイトシチュールー	550g	550g
ビーフシチュールー	300g	300g
ハヤシルー	200g	200g
カレールー	400g	400g
FD 親子丼	9 袋	198g
FD 麻婆茄子	6 袋	130g
FD カレー	3 袋	90g
春雨	100g	100g
麻婆茄子の素	1 袋	180g
FD にんじん	20g	20g
FD たまねぎ	40g	40g
ドライポテト	450g	450g
乾燥わかめ	140g	140g
ラーメンの具	2.5 袋	150g
乾燥海草	210g	210g
総合ビタミン剤	60 粒	150g
粉末飲料(行動水用)	60 袋	4,440g
ふりかけ	10 袋	300g

品名	数量	重量
パン	78 枚	3,900g
パスタ	1,000g	1,000g
米	3,240ml	2,520g
ベーコン	1,150g	1,150g
鶏肉	1,050g	1,050g
ウインナー	450g	450g
オイルサーディン	600g	600g
にんじん	10 本	1,000g
たまねぎ	10 個	2,000g
チーズ(テント食用)	1,330g	1,330g
マヨネーズ	700g	700g
ブラックペッパー	24g	24g
マスタード	120g	120g
ドレッシング	300ml	300g
酢	330ml	330g
ドライフルーツ	7,200g	7,200g
チョコレート	1,800g	1,800g
ナッツ	2,400g	2,400g
ビスケット	6,000g	6,000g
チーズ(行動食用)	900g	900g
キャラメル	450g	450g
飴	1,800g	1,800g
粉末飲料(お茶)	11,400g	11,400g
粉末飲料(スープ)	2,400g	2,400g
砂糖	3,000g	3,000g

食糧の梱包

食糧の梱包は次のような分け方をとった。

[ビスケット(藤井分)] [ビスケット(河村分)] [ビスケット(寿栄松分)] [ビスケット以外の行動

食(藤井分) [ビスケット以外の行動食(河村分)] [ビスケット以外の行動食(寿栄松分)][BC 食(朝/主食)] [BC 食(夜/主食)] [BC 食(朝/主菜)] [BC 食(夜/主菜)] [上部食(朝/主食)] [上部食(夜/主食)] [上部食(朝/主菜)] [上部食(夜/主菜)] [BC・上部食(副菜)] [調味料] [お茶用粉末飲料] [スープ用粉末飲料]

それぞれ土嚢袋に詰めて梱包した。行動食はビスケットが中心であったため、ビスケットとそれ以外のものに分け、山中でそれぞれ翌日の行動に必要な分を小分けにパッキングした。テント食はパッキングしたのから調理時に一食分取り出し、上部食は BC での停滞日に高所食とアタック食に分けてそれぞれ一食分ずつパッキングした。



燃 料

燃料については、現地で購入可能という情報を事前に得ており、メンドーサ市内の登山用品店で購入した。ガスヘッドは普段部で使用しているものを日本から持ち込んだ。

商品名	DOITE GAS		
ガス	BUTANE 75%、PROPANE 25%		
内容量	230g	製造国	韓国
購入量	230g × 21 缶 = 4,830g (4,830g ÷ 20 日 = 約 241.5g/日)		
使用量	230g × 14 缶 + 60g = 3,280g (3,280g ÷ 17 日 = 約 193g/日)		
余り	4,830g - 3,280g = 1,550g		
備考	EPIGAS 対応ガスヘッドで使用可能		

購入量の計算は、国内の冬期山行でのガス使用量を参考にした(合宿時に事前に計算)。具体的には、まずベースキャンプまで(7 日間)は夏山、ベースキャンプ以降(13 日間)は冬山と考え、それを 2011 年度の夏・冬合宿のガス使用量と照らし合わせた。

2011 年度夏合宿 ガス使用量	約 167g(0.36 缶)/日	遠征時購入量計算	167g × 7 日 = 1,169g
2011 年度冬合宿 ガス使用量	約 258g(0.56 缶)/日		258g × 13 日 = 2,338g

1,169g + 2,338g に予備一缶を購入した。最終的には 3 割強のあまりが出たが、これはアコンカグアが国内と違い、非常に乾燥しており、衣服を乾燥させる必要がなかったことが最大の要因であると考えられる。しかし、燃料の枯渇は直接敗退につながり得るので、余裕を持った数量である方が望ましい。

輸送・梱包

担当：河村友裕

・ 大学から関西国際空港まで

大学から現地までの荷物はメインザック 3 つとダッフルバック 3 つに分けて詰め込んだ。このときデルタ航空に手荷物に関する規定に合わせて各ザック、バックが 23kg 以下になるように調整した(表)。荷物が多いため、それらを公共交通機関で運ぶのは困難であると考え、レンタカーで関西国際空港まで輸送した。レンタカーの車種はトヨタのハイエースである。

表. 利用した航空会社の手荷物に関する規定

航空会社 荷物の種類	デルタ航空 (日本～チリ間)	エアロアルゼンチナ (チリ～アルゼンチン間)
機内持ち込み	荷物の縦+横+高さの合計は 115 cm 以内	10kg まで無料
受託手荷物	50 ポンド(23 kg)まで無料。荷物の縦+横+高さの 3 辺の合計が 157cm 以内	20kg まで無料。それから 1kg ごとに 8 ドル追加料金発生

・ 関西国際空港からメンドーサ市内まで

飛行機に乗る前に荷物検査があるのは当然だが、出発国と到着国が異なる場合、入国審査として降りた時にも荷物検査がある。この荷物検査は降りた国の法律に基づいていて、例えば日本では、植物防疫の観点から一部の植物の特定の地域からの持ち込みを禁止している。今回、この荷物検査について下調べ不足であったため、アメリカ(シアトル)で食料が没収されてしまうという失態を招いてしまった。没収されたものはチキンエキスやビーフが原材料に入っているもので、インスタントラーメンやフリーズドライなどであった。早い段階できちんと下調べしておくべきであった。

シアトルにてさらに問題が続く。シアトルからアトランタへの飛行機に搭乗するため、受託手荷物を預けたあと、機内持ち込み荷物の検査を受けるとペグが凶器になりえるとして捨てるか受託手荷物に戻すかどちらかにしろと注意された。機内へは凶器となりえる刃物やバット、ハサミの持ち込みが禁止されている。よく考えればペグもそうなり得るので、飛行機に搭乗する前に機内持ち込みする荷物に凶器となりえるかどうかをしっかりと考える癖をつけるべきだと考える。この時は結局、航空会社の職員との英語によるコミュニケーションがうまくとれず、ペグを預けた受託手荷物のほうへ入れることができなかったのので没収覚悟で荷物検査を試みると、次は指摘されずにペグを機内に持ち込むことが出来た。

チリからメンドー市サへ飛行機で移動する際、航空会社がデルタ航空からエアロアルゼンチナに変わるため、受託手荷物の規定はエアロアルゼンチナの規定に当てはめられ、超過料金を結構とられた。予想していたことであったが、時が進んで帰路(メンドーサ市から

チリへの移動)では、最終的に日本へ行くとエアロアルゼンチナの職員に伝えると超過料金をとられずに済んだ。よって、受託手荷物の無料分は最初に搭乗した地点から最後に降り立った地点までの飛行機での移動距離に合わせて変動することが推定された。交渉の仕方次第では行きでも超過料金を支払わずに済んだかもしれない。

・ メンドーサ市内からプラザ・アルゼンチナ B.C.まで

滞在先のホテルからバスターミナルまでは荷物が多いためタクシー2台で移動した。バスターミナルから入山口のプンタ・デ・バカスまでは大型バスで移動し、荷物はバスのトラックに有料で入れてもらった。ただ、降りる際にひとつ荷物をおろし忘れてしまう(詳細は行動記録参照)。原因としては、荷物(ザックとダッフルバック)が忘れたものを含めて合計で7つあったが、飛行機での移動の際は常に6つだったので荷物を6つおろした時点ですべての荷物をおろしたと錯覚してしまったこと、そして忘れた荷物はサブザックをウレタンマットで包んだもので印象に残りにくかったということが考えられる。

キャラバンで必要な装備以外の大部分の荷物はダッフルバックに詰めて、ムーラ(馬とロバの雑種)に BC まで運んでもらった。ムーラ1頭あたり担げるのは 60kg までで、荷物の計量はばねばかりで計った。行きはムーラを 2 頭利用した。ムーラはムーラ使いがコントロールしている。ムーラの基地はノーマルルートの入山口であるプエンテ・デル・インカにあるので、プンタ・デ・バカスからプエンテ・デル・インカまでエージェントの人にトラックで輸送してもらい、そこからムーラが 3 日間かけて BC であるプラザ・アルゼンチナまで輸送してもらった。ムーラは興奮すると暴れてしまい、運んでいる荷物を周りにぶつけるなどして、荷物を破損させてしまうこともあるらしい。そのため、梱包は外側に緩衝剤となりえるテント類や衣類で固め、さらにその外側をウレタンマットで覆うという工夫をこらした。結果、ムーラに運んでもらった荷物に被害が出ることはなかった。ただ、寿栄松が背負っていたザック内ではマスタードと醤油が破裂して、ザック内がマスタードと醤油まみれになっていた。容器が丈夫でなかったためだと思われる。日本製のペットボトルなど丈夫な容器に移し替えておくべきであった。

・ プラザ・アルゼンチナ B.C.から帰国まで

下山の際の荷物はザックで背負えるもの以外、BCからムーラの基地までムーラ1頭に輸送してもらい、そこからメンドーサ市内まではエージェントのスタッフに軽トラで輸送してもらった。ゴミは企業がサービスで回収してくれた。ムーラ1頭あたり60kgまでであるのだが、オーバーしてしまったのでその分超過料金を払うことになった(詳細は行動記録参照)。

帰路の最後、シアトルから関空へ飛行機で移動した後、受託手荷物が1つ飛行機からおろされなかったトラブルがあった。どうやら何かの手違いで、まだシアトルにその荷物があるらしかった。その荷物は後日、藤井宅に届けてもらうことになった(送料はもちろん航空会社負担)。

保 険

担当：藤井良太

海外の6000m以上の山に登るような行為は、一般の人にとっては死ぬために行くことという認識である。そのため海外登山の傷害保険は危険割増で高額になる(常識的な補償額で行くと20万円/人近くかかる)。本遠征では、学生が行う部活動としての立場を強く認識し、危機管理面や事故対応面の費用には援助金を十分に当てさせていただくことにした。保険の内容については、2つの選択肢を持っていた。一保険ですべて対応するものと、複数の保険で割のいいように組み合わせるものである。特に疾病と傷害、それぞれの補償で6000m以上の山における特約では最も高い比率で高額になる点が課題であった。費用と適用額の料率を計算して一覧にし、知り合いの保険屋さんにも相談した結果、普段の山岳保険のためにすでに加盟していた日本山岳協会共済会の、団体傷害保険・海外山岳コースを疾病・傷害補償の特約付きで利用させていただくことにした。大きな隊の場合、組織で入る保険もあるが、今回は3名であるため、個人で申請書に記入しそれぞれ支払いした。出発前に、それぞれの家族(保証人)および遠征隊留守担当に、保険内容を説明し、証券・保険申込書(お客様控えコピー)、非常時の連絡先リストを含む説明文を預けていった。各自生命保険に入っていることも考慮し、事故発生後の保険申請の際は、家族の負担を最低限に抑えるため、隊員メンバーおよび遠征隊事務局が主体となって対応することに決めた。事故時の行動を事前に決めていくことは重要である。死んだら全て終わりなると、生きる場合にどんな費用がかかるかをとくに重視した。高度傷害は下山すれば回復するが、凍傷などで指切断になると今後の人生の影響が大きい。さらに少数の隊では、一人でも動けなくなった場合のリスクが高い。今回、結果的には保険のお世話になることがなかったが、万が一の事故想定のために役に立った。

【 保険内容 】

◎**運動危険割増 C 特約付海外旅行傷害保険** 日山協山岳共済会団体傷害保険(海外登山用)

◆一人当たり保険内容(申込書に記載) 保険料100,980円 期間2/17~3/19(32日間)
傷害・疾病による死亡(200万円;見舞金程度)と傷害による後遺障害(200万円)

疾病(高山病・凍傷)による後遺障害は含まれない。保険期間中の突発・偶発的の事故(傷害)による死亡、後遺障害の補償(事故発生日から180日以内)。※雪崩などの事故による凍傷については、対象になりうる。

治療救済者(500万円) 現地(事故発生地・被保険者の収容地)での傷害治療・疾病治療・救済者(3名14日間)費用を含む。現場～搬送～薬局～通訳～現地病院～国内病院まで適用。

賠償責任(1億円) 他者の所有物破損や他者を巻き込む事故により法的損害賠償責任を負われた場合。

携行品損害(30万円) 通信機器は別。衛星電話は、別途保険加入。

その他 航空機寄託手荷物遅延等費用(10万円) 航空機遅延費用(2万円)。

※3名とも加入している日山協の**山岳登攀コース1S**は、死亡・後遺障害・入通院については、国内外(6000m以上の高い山を除く)での山岳事故にも対応。日常生活の事故も対象。

会 計

担当：藤井良太

遠征の費用集めは最も重要な任務である。当初の計画構想より 50 万円以上膨らんだ資金を、多くの方々のご寄付・ご支援によりまかなえた。改めて感謝申し上げます。また、隊荷輸送超過料金、滞在費、食料再購入費及び罰金は予定外の高額支出であり、反省したい。

収 入

(単位は日本円)

個人負担金	1, 050, 000 (3人分)
山岳会援助金	70, 000 (2011年度山岳部会計)
山岳会寄付金	600, 000
講演会謝礼金	35, 000 (日本山岳会東海支部・京都支部)
その他(装備売却等)	4, 868
① 収入合計	<u>1, 759, 868</u>

支 出

航空券	660, 000 (3人分)
入山料	66, 960 (ローシーズン、20日間登頂許可証)
仲介人手数料	24, 300 (増田さん、ラウラさん)
ムーラ輸送費	72, 900 (行き2頭、帰り1頭)
装備・医薬品費	35, 260 (うちレンタル5, 265)
交通費	57, 942 (うち国内交通50, 000)
食料費・燃料費	37, 671
通信費	89, 835 (うち衛星電話諸費62, 900)
保険費	302, 940
滞在費	67, 330
報告書費(見込み)	150, 000
雑費	48, 842
不測金	90, 880 (うち罰金53, 460)
②支出合計	<u>1, 704, 860</u>

支出総計

①収入合計 — ②支出合計 = 残金55, 008

※残金は鳴沢岳追悼文集作成費用として山岳部会計に移譲いたします。

※両替レート(遠征当時) 米国1ドル(U\$D1) = 84日本円(JP¥)

米国1ドル = 4.35アルゼンチンペソ(AR\$) (AR\$1 ≒ JP¥18.6)

渉 外

担当：河村友裕

アコンカグアの麓の街であるメンドーサには、日系の増田氏が経営する「民宿アコンカグア」があり、毎年多くの日本人客で賑わっている。諸事情により、我々が「民宿アコンカグア」を利用することはなかったが、メールのやり取りで、増田氏よりアコンカグア登山に必要な情報を多くいただいた。以下に渉外の記録を示す。

●増田さんとの連絡

<2011年以降>

[出国前]	
10月1日	隊メールアカウント(kpuac.pa2012@gmail.com)を作成。
10月2日	京都府立大学山岳会（以下山岳会）の会長塔下氏、事務局高岸氏へ、山岳会会報発送の際に「アコンカグア遠征 寄付のお願い」という書類を同封させてほしいという旨のメールを送る。
10月4日	塔下氏より「アコンカグア遠征 寄付のお願い」の同封が了承される。
10月9日	高岸氏より「アコンカグア遠征 寄付のお願い」の同封が了承される。
10月21日	トラベル・スタンダード・ジャパン株式会社にて全員分の航空券（関空～サンティアゴ間、FIX）を予約。
10月25日	航空券代（関空～サンティアゴ間）を銀行から入金。エクスペディアにて航空券（サンティアゴ～メンドーサ間、FIX）を予約、VISAで支払う。
11月1日	航空券（関空～サンティアゴ間）をEチケットという形で入手。
11月2日	隊員家族へ家族説明会の案内状を発送。
11月3日	「民宿アコンカグア」の増田氏へ初めて連絡する。遠征参加人数と日程を伝え、入山前、下山後に民宿アコンカグアに宿泊できるかを尋ねる。
11月14日	株式会社イスカへ装備協賛をお願いする旨のメールを送る。株式会社イスカより割引販売なら応じることが可能という旨の返信メールが届く。
11月15日	株式会社イスカに割引販売をお願いする旨のメールを送り、了承を得る。
11月24日	株式会社ロストアロー、株式会社マジックマウンテン、株式会社ヘリテイジに装備協賛をお願いする旨のメールを送るが、いずれも断られる。
12月2日	尾西食品株式会社に協賛をお願いする旨のメールを送るが断られる。 株式会社モンベルに装備協賛のお願いする旨のメールを送ったところ「チャレンジ支援」の資料をいただく。 増田氏より「民宿アコンカグアへの宿泊が可能である」と連絡が入る。 US\$100/人で、現地エージェントと連絡をとったり、アコンカグア登山情報の提供を受けたり、事故時のアフターケアをしてくれるという情報を得る。
12月5日	株式会社モンベルに、装備協賛のための必要事項を書き込んだ資料を提出。

12月6日	株式会社イスカより装備を割引購入。
12月10日	家族説明会を開催。遠征承諾書に署名をいただく。
12月12日	国立登山研修所へ、パルスオキシメーターの貸出を依頼する旨の書類を送る。
12月13日	株式会社モンベルより、選考の結果、装備の一部を協賛、その他を割引販売してもらえることになる。
12月18日	国立登山研修所専門職の東氏よりパルスオキシメーターを借用する。
12月22日	株式会社モンベルに割引販売での購入希望リストを提出。
2012年	
1月5日	株式会社モンベルより協賛の装備が届く。
1月6日	増田氏より、入山前の民宿宿泊が不可能になったと伝えられる。
1月7日	増田氏に、どこか安く宿泊できる宿を紹介してもらえないか尋ねる。
1月11日	増田氏より、ホテルを紹介してもらおう。21歳未満は登山許可に両親の承諾書が必要であるという(実際は20歳未満しか必要なく、20歳の寿栄松も両親の承諾書は必要なかった)。また、エージェント(ラウラ氏)の情報をもらう。登山中の荷物は民宿アコンカグアにデポ可能という連絡を受ける。ムーラで運ぶ荷物の重量を尋ねられる。
1月12日	増田氏へムーラで運ぶ荷物の重量を伝える。ホテルの予約を一泊お願いする。
1月14日	増田氏より入山料を伝えられる。登山申請書の作成をしていただけるらしく、申請書のデータを受ける。個人情報を入力して送り返して欲しいとのこと。現地ホテルの予約が完了する。
1月15日	増田氏へ無線の持ち込みが可能かどうかを尋ねる。
1月19日	同じく3月にアコンカグアへ遠征する早稲田大学山岳部と連絡をとり、情報交換を行う。(※)
1月21日	増田氏より無線は持ち込み不可と伝えられる。衛星電話は使用可能という。
1月22日	増田氏へホテルの住所を尋ねる。メンドーサ市内の地図を送ってもらえるようお願いする。
1月26日	増田氏よりホテルの住所を教えてください。衛星電話のレンタルを申し込み、受理される。
1月27日	OB で医師の田中氏に医薬品に関して助言を求める。増田氏に、ムーラを2頭予約してもらえるようお願いする。エージェントの連絡先を教えてくださいか尋ねる。緊急時、増田氏がどのような対応をとってくれるか尋ねる。
1月30日	往路の途中、1日滞在するアトランタの空港近くのホテルをエクスペディアで予約。 VISA で支払い。空港送迎サービスについてメールで質問する。 OB で医師の田中氏より返事。以後連絡を取り合い医薬品に関して助言をいただく。
1月31日	株式会社モンベルに割引販売での追加の購入希望リストを提出。後日、モンベル京都店で割引購入。
2月1日	増田氏より、エージェントの連絡先は緊急連絡先に使われると困るので教え

	られないと伝えられる。増田氏自身は緊急時には、通訳以外なにもできないということであった。
2月8日	医薬品の各国への持ち込みに関して没収されないかどうかを航空会社、在アルゼンチン日本大使館、在チリ日本大使館、在シアトル日本領事館に聞く。航空会社からは各国の通関規定を確かめるのに、各国の駐日領事館へ確認することを勧められる。
2月9日	医薬品の持ち込みに関して在チリ大使館から、量が多いので、もしかしたら没収されるかもしれないが、その時の税関職員の対応によるようで、念のため医師の処方箋も持って行ったほうがよいという旨の返事をもらった。
2月10日	医薬品の持ち込みに関して、在シアトル領事館から、アメリカから日本への持ち込みについてはわかるが、その逆はわからないので在日アメリカ大使館に問い合わせてください、との旨の返事をもらった。また同時に規制となるのは薬ではなく成分なので、各薬の主成分を明記した一覧表を用意したほうがよいという助言をいただいた。
2月13日	在アルゼンチン大使館へ計画書を送る。
2月15日	増田氏よりメンドーサの空港からホテルまで増田氏の妹であるビオレッタさんが車で送ってくれと伝えられる。
2月19日	増田氏の妹のご家族にメンドーサ空港から、市内のホテルまで送迎していただく。
	【帰国後】
3月22日	遠征報告会案内状を送付
3月31日	遠征報告会開催
4月9日	株式会社イスカへ購入装備のレポートを提出
4月20日	遠征写真を株式会社イスカ、モンベル両社へ発送。

●早稲田大学山岳部との情報交換

出発前、2月12日～3月23日に早稲田大学山岳部もアコンカグア登山遠征を実施することを人づてに耳にした。早稲田大学山岳部はノーマルルートからの登頂を計画していたため、ルートは大部分が私たちと異なるため、登山情報の交換をすることはなかったが、私たちよりも一足先に現地へと向かっていたこともあり、現地情報の提供等非常にお世話になった。早稲田大学山岳部との情報交換の記録を以下に記す。

【早稲田大学山岳部日本出国前】

- ・ 早稲田大学山岳部がアコンカグア遠征を計画しているという情報を手に入れる。
- ・ 大学生リーダー登山研修で同班であったという塚本氏(当時4年生)を寿栄松の兄に紹介してもらう。

- ・ 塚本氏より渉外担当である中山氏(当時 5 年生)を紹介していただく。
- ・ 中山氏を通じて遠征計画書、食糧・装備表を交換。
- ・ 20 歳以下の者に必要であるとされている親族の承諾書のフォーマットをいただく。

【早稲田大学山岳部日本出国後】

- ・ 登山許可申請の際、親族の承諾書はフォーマットが提出すべきものと違い、現地で使用できないことを伝えていただく。
- ・ ただし、親族の承諾書が必要であるのは 20 歳以下ではなく、20 歳未満の者であったことが判明し、私たちの隊員には親族の承諾書が不必要であることがわかる。

●現地企業との連絡

アコンカグア登山に関してもガイドやサービスなどを行う様々な企業があり、メールにより連絡を取ることができる。2011 年 11 月に藤井は現地企業に質問を送って、料金、レンタルできるもの、現地の状況などの情報を手に入れた。(以下、返信メール転載)

- There is medical check points available (the season is ending on March 15th)
- There is internet access available at Plaza Argentina base camp.
- There are only a few climbers.
- The price of one mule (up to 60kgrs) up to Plaza Argentina is USD 340.
- You can rent equipment here in Mendoza
(but we recommend you to rent the satellite phone in your country).
- Weather in early March is colder than December or January, but is ok too.
- The price of one mule (up to 60kgrs) up to Plaza Argentina is USD 340.
- You can rent equipment here in Mendoza (but we recommend you to rent the satellite phone in your country).
- Weather in early March is colder than December or January, but is ok too.
- The prices of the permis for low, middle and high seasons 2011/12 are (per person):

【HIGH】	15 Dic. to 31 Jan.	: USD 730
【MIDDLE】	01 Feb. to 20 Feb. 01 Dic. to 14 Dic.	: USD 530
【LOW】	21 Feb. to 31 March 15 Nov. to 30 Nov.	: USD 300

Private Expedition (20 days) - Polish Glacier Traverse Route

The prices are the following: — Polish Glacier Traverse Route
2 persons: USD 3850 each 3 to 4 persons: USD 3650 each

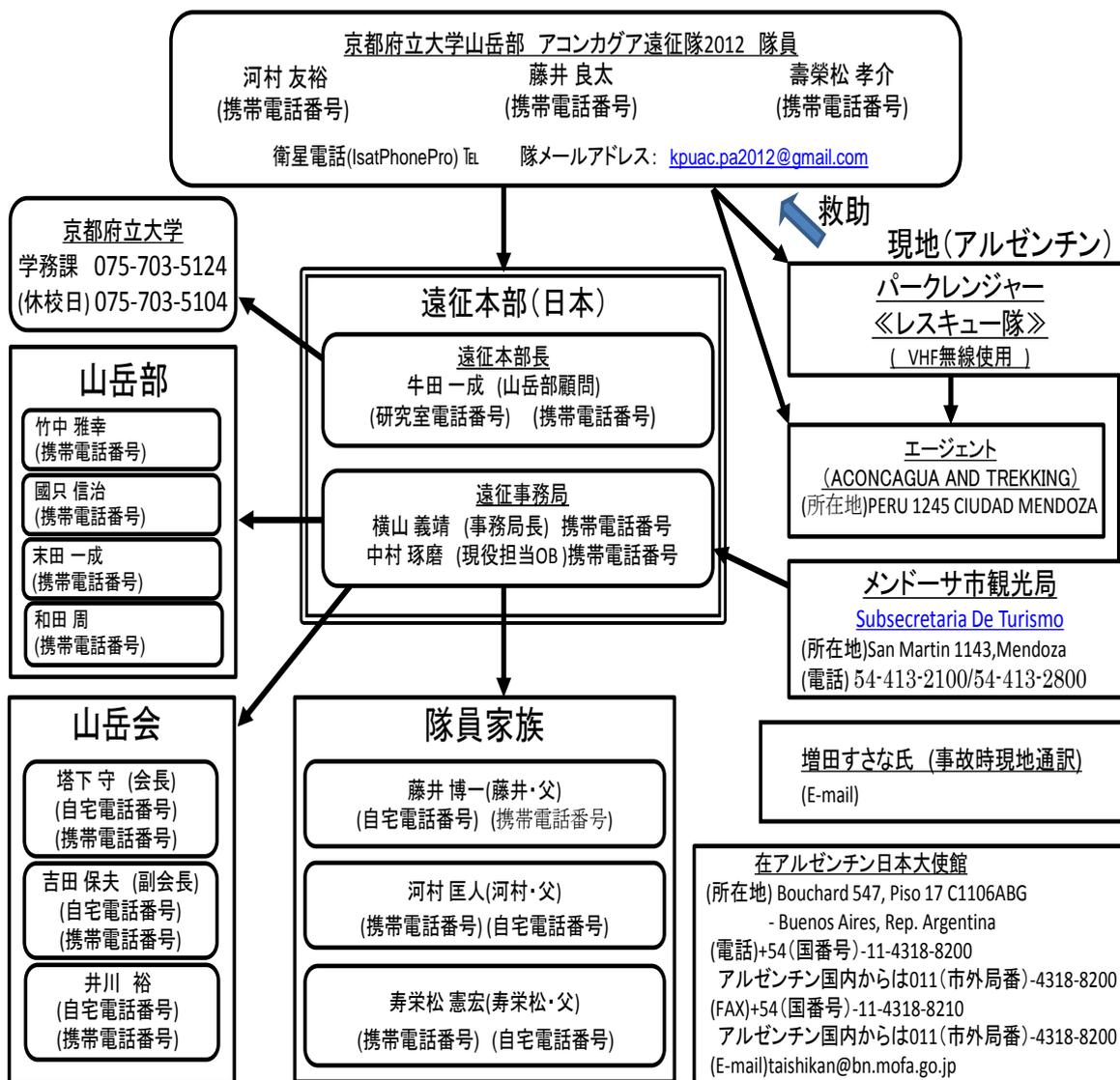
通信

担当：河村友裕

通信体制は、ネット通信を使ったPCメールを中心とし、確実な連絡手段として衛星電話の使用を計画した。また、無線は現地で企業から一台だけ借用し、緊急の際はレンジャーに連絡することを許可された。無線は日本から持参することが望ましいと考えられる。無線は違法であるが、登山目的（命を守るため）であるならば黙認されている例が多そうである。実際持っていきべきだった。連絡網は、事前に実効的なものにするため、何度も直接確認をとり、最新の情報を得て正確な記載をしておくことが必須である。

今回は、南米と12時間の時差の違い、PCの不調などで連絡が限られることなどが苦労したが、留守本部の対応もよく、気象情報を得るためにも有効だった。

緊急連絡網 Emergency Contact (2012月2月12日)



登山中における遠征事務局への通信手段としてインターネットと衛星電話を用いた。BCでは、企業テントによってインターネットのサービスが利用できた（20ドル / 30分）ため、インターネットを利用し、隊のメールアドレスを介して遠征事務局に近況を知らせたり、今後の天気予報を聞いたりした。

BC以降では、当然インターネットサービスはないため、通信手段として衛星電話を用いた。衛星電話にはいくつかの種類があり、今回はその中からカバーエリアに南米が含まれているか、そしてレンタル料が高くないか、という2点を主に着目し、インサルマット製の「アイサットフォン プロ」というものを選び、有限会社アクアテックからレンタルした。サイズが大きいのが難点であるが、防滴、防塵に優れ、-20℃まで可動する、堅牢なデザインとカバーエリアが極地方以外の地域であること、コストパフォーマンスに優れていることがよかった。主にC2にて遠征事務局に今後の天気予報を聞くために使用したが、テント内で使用するとつながりが悪く、双方が聞き取りにくい状況になったこともあった。衛星と衛星電話の間に障害物（雲など）があるとつながりにくくなるようで、テントが障害物となっていたのかもしれない。

また、無線機は現地の法律に基づく免許が必要であり、もちろん日本の無線局の免許は意味をなさず、無線機を免許なしで使用すれば法律違反である。そのため、日本から無線機を持参しなかった。ただし、BCにてエージェントから有料で緊急時用に1台だけ借りることはできた。



写真. 今回レンタルした衛星電話

（インサルマット衛星携帯電話

アイサットフォン / IsatPhone Pro）.

有限会社アクアテック HP

(<http://www.aqua-tec.jp>)より引用

事務局との連絡記録

担当：横山義靖

日本時間		現地時間		伝達関係	伝達方法	内容
日にち	時刻	日にち	時刻			
2月10日	10:57	-	-	横山→関係者	メール	挨拶、連絡確認
2月17日	-	-	-	-	-	関西空港へ見送り
2月18日	9:45	2月17日	21:45	横山→関係者	メール	出発したことを報告
	22:10	2月18日	10:10	隊→横山	メール①	
2月19日	21:30	2月19日	9:30	横山→関係者	メール	メール①報告
2月21日	21:30	2月21日	9:30	隊→横山	TEL①	通話確認
2月22日	5:27		17:27	隊→横山	メール②	*2/28に気づく
	6:09	18:09	隊→横山	メール③		
	12:20	2月22日	0:20	横山→隊	メール	TEL①、メール③を了解
	13:49	1:49	横山→隊	メール	気象報告①	
2月25日	0:20	2月24日	12:20	隊→横山	メール④(下書き)	
2月26日	13:13	2月26日	1:13	横山→関係者	メール	メール④報告
	14:16		2:16	横山→隊	メール	メール④に返信、気象報告②
	20:00		8:00	隊→横山	TEL②	
2月28日	6:57	2月27日	18:57	横山→牛	メール	メール②報告
	7:24		19:24	横山→関係者	メール	メール②報告
2月29日	9:14	2月28日	21:14	隊→横山	メール⑤	
	9:32		21:32	隊→横山	メール⑥	
	9:34		21:34	隊→横山	メール⑦	
	11:12		23:12	横山→関係者	メール	メール⑤、⑥報告
	12:50	2月29日	0:50	横山→隊	メール	気象報告③
3月2日	12:26	3月2日	0:26	横山→隊	メール	気象報告④
3月3日	4:45		16:45	隊→横山	メール⑧	
	9:58	21:58	横山→関係者	メール	メール⑧報告	
	13:00	3月3日	1:00	横山→隊	メール	メール⑧返信
3月4日	22:50	3月4日	10:50	隊→横山	TEL③	気象伝達ミス
3月5日	7:02		19:02	隊→横山	TEL④	気象伝達ミス
	7:13		19:13	横山→隊	TEL	通じず
	7:45		19:45	隊→横山	TEL⑤	TEL⑥約束
	8:50		20:50	隊→横山	TEL⑥	気象報告⑤
	9:29		21:29	横山→関係者	メール	TEL⑥報告
3月8日	8:00	3月7日	20:00	隊→横山	TEL⑦	登頂報告
	8:38		20:38	横山→関係者	メール	TEL⑦報告

* 関係者＝隊員の家族、大学学務課、山岳部顧問、山岳会、在日山岳部員

* 出国、B.C.到着、登頂報告については、大学学務課へ訪問し、直接報告を行った

メール内容

【メール①(日本時間 2/18 22:10)】寿栄松です。現在 am8:10、アトランタのホテルにてゆっくりしています。アプローチでは、シアトルの税関でチキン・ビーフが入っている食材(高所食の一部)を没収されてしまいました。隊員の体調等は問題ありません。これからホテルで朝食をとり、チェックアウトの 11:00 にはホテルのシャトルバスで空港に向かいます。次の連絡はメンドーサ市内からになると思います。では。

【メール②(日本時間 2/22 5:27)】藤井です。メンドーサのホテルから、2/21 の pm17:20。現在、メンドーサでの準備を済ませ、明日 2/22 朝に町を出発します。明日からは予定より早めの形で、ロス・ペニテンテスに泊まること無く、昼プンタ・デ・バカスから入山。午後にはパンパ・デ・レニャスで泊まります(行程は2-3時間。時間的にも十分可能のようで

す)。以降、一日ずつ繰り上げ。体調等問題ありませんが、一つルートの追加があります。まず、当初ポーランド氷河からの登頂が不可能と思われた場合に登頂ルートとして予定していた Falso de los Polacos (Independencia hut 経由) 登頂ルートについて、エージェン
トから「一日では C2 から往復は時間的に難しい。」と伝えられ、もっと手前(コル)からトラ
バースをして、ノーマルルートの C2 ベルリン付近からの一日山頂往復を勧められました。
こっちで購入した本でも調べています。そこで隊で(高所滞在時間とビバーク可能性を)検討
した結果、五万地形図の C3 guanacos、campcolera、Ref.Berlin 経由のトラバースルート
を追加します。ただし、Falso de Polacos ルートも使用する選択肢としては変わりありませ
ん。

現状ではポーランド氷河挑戦予定ですが、無理な場合でも現地判断で自分たちに合った
最も安全確実なルートを選びます。上記、余さず牛田先生に伝えてください。

家族には、「予定より一日ずつ繰り上げ」くらいを伝えてくれたら十分かと思います。毎日
暑いですが、みな元気です。また、本隊は多くの方から援助をいただいているので、プロ
グでの報告は逐一行ってください(無難な範囲で「隊から連絡があり、BC にいて、皆元気
のようです」とか数行の文章だけでも)。

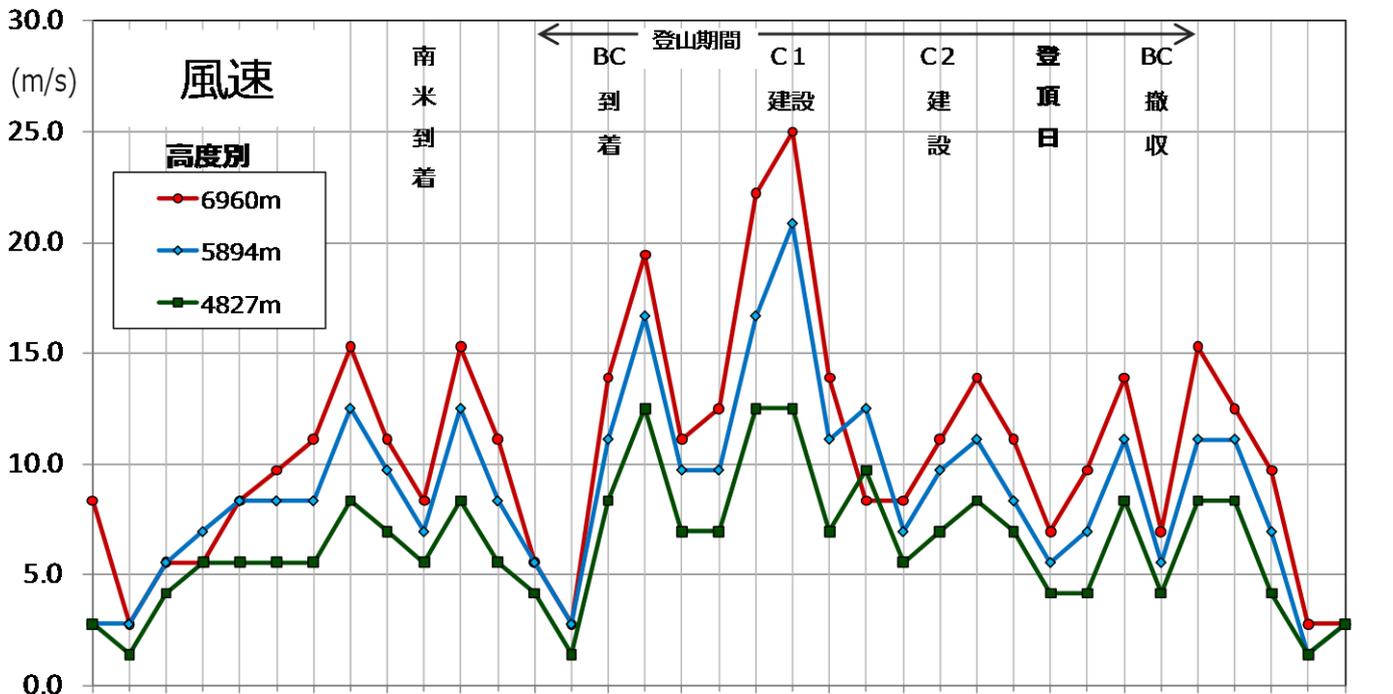
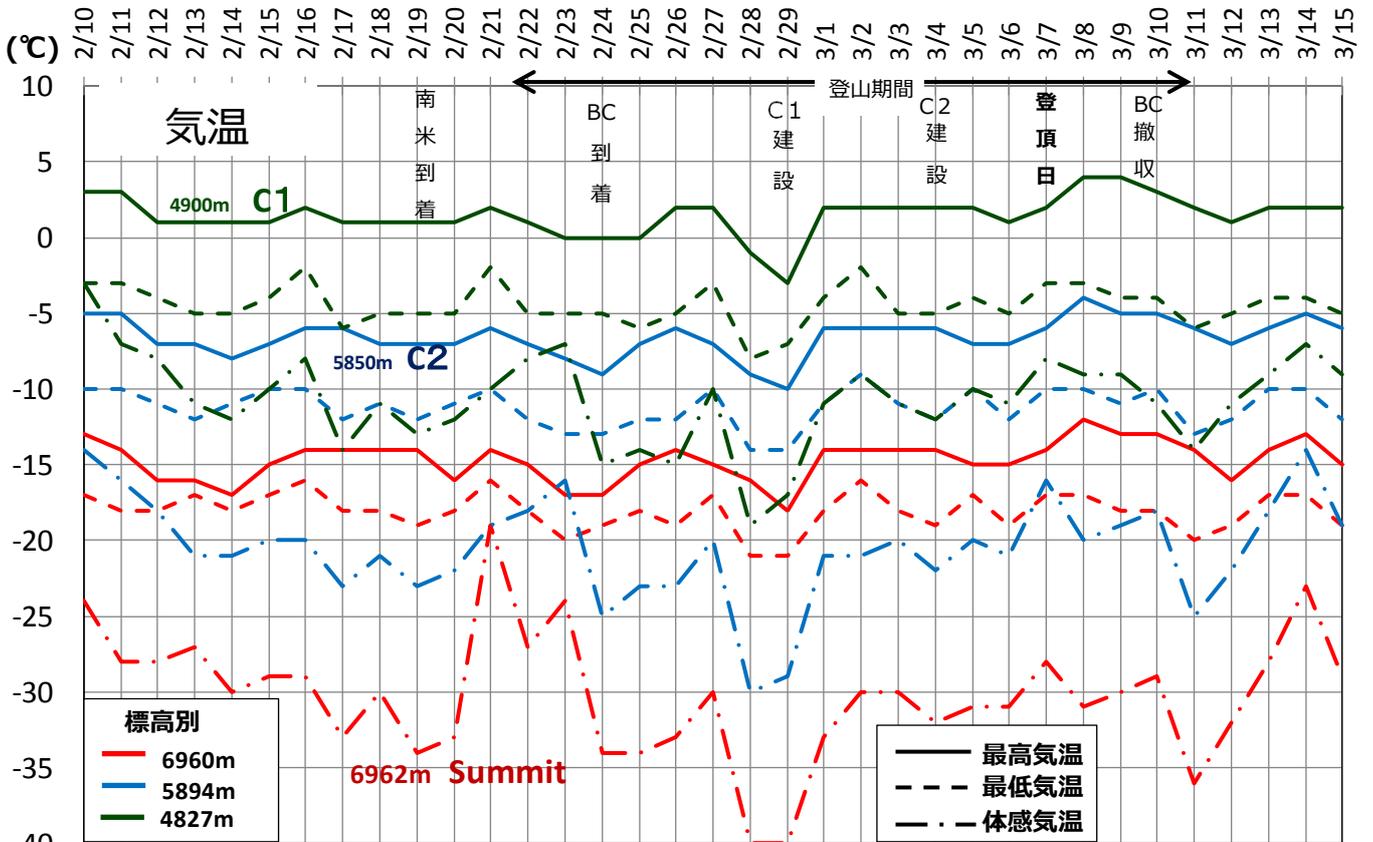
次は BC になると思いますが、現地ではネットの故障等で使えないことも多々あります。
必須な連絡はポイントごとに、衛星電話で伝えますが、山中では日時が前後する可能性が
高いので、あまり心配しすぎないようにお願いします。では、よろしく。

【メール③(日本時間 2/22 6:09)】横山さんへ。河村です。17 日に下さった気象の資料
ありがとうございました。とても見やすかったです。そこで、お願いがあるのですが、登
山終了日まで気象資料の作成を継続してもらえないでしょうか? アタック前に参考にした
いのと、報告書にのせるための資料作成の 2 つの意味があります。交信日のときに最新の
ものを送ってもらえると助かります。お忙しいところ申し訳ないのですが、よろしくお願
いします。

【メール④(日本時間 2/25 0:20)】Mr. YOKOYAMA YESTERDAY WE ARRIVED
AT BC . NOT BIG PROBREMS, BUT ALL MEMBER HAVE A HEADACHE. TODAY
REST,TOMORROW GO UP TO BC VIEW FORM BC IS FROM FUJII

気象

記録：横山義靖



2/10 2/12 2/14 2/16 2/18 2/20 2/22 2/24 2/26 2/28 3/1 3/3 3/5 3/7 3/9 3/11 3/13 3/15

アコンカグア周辺の気象変化（上）およびアコンカグア周辺の風速（下）

隨 筆

個人随筆

「登りたい山に登ること」の重要性

寿栄松孝介

アタック日、C2 までとは打って変わって体調のよかった私は、時折単独でメンバーよりも少し先行することがあった。そんなとき、ふと後ろを振り返ると自分以外は誰もおらず、荒涼とした南米の大地が果てしなく広がり、見上げれば恐ろしい程青い空、前方には山頂が静かに構えており、アイゼンのきしむ音と自分の吐く息だけが聞こえる。文才がないため上手く表現できないことが非常にもどかしいが、その時は月の上を歩いているような、またこの世に自分しかいないような感覚に陥り、でも恐怖や孤独感は一切なく、できればそのままずっと歩き続けていたいような瞬間が続いた。

アコンカグア山頂から凄まじく広大な南米の大地を見下ろした時には、生まれて初めて自分が地球に立っていることを実感し、「えらいところに来てしまったなあ」という思いと同時に、大きな達成感を得ることができた。しかし今、「今回の遠征に 100%満足しているか」と聞かれると、胸を張って「はい」と答えることはできない。もちろん、府大山岳部単独として初の海外登山において、登頂・無事故下山という結果を残せたことについてはおおむね満足している。ではなぜ心から満足することができないのだろうか。

それは、私が他者依存の登山をしてしまったからであり、心から登山を楽しむことができなかつたためであると考えられる。私が感じる登山の楽しみとは、自分で計画し、自分でチームを引っ張り、自分でいかなる責任でもとる覚悟をもって行動することにある。しかし、今回の遠征での自分の行動や姿勢、考え方を省みると、私には藤井さん・河村さんというガイドについていく「お客様」の意識があったように思える。もちろん、与えられた仕事は最低限こなし、自分自身が隊に求められていると感じたことはできる限りこなし てきたつもりだ。しかしそこには、「ミスをした先輩がカバーしてくれる」「私は言われたことをこなすことが必要で、計画全体を俯瞰する立場ではない」という他者依存の考えが潜んでいた。これは山中での行動にも現れており、山頂アタック時にインデペンデンシア小屋にギアをデポしたことはその一例として挙げられる。「藤井さん・河村さんに万が一のことがあっても、それは私の責任ではない。私は最年少であり、守られるべき立場だ。」という意識が潜在的にあったのだろう。

ポーランド氷河を諦めたことも、この意識が強く作用した結果だろう。確かに高度順応は順調であったとはいえ、技術的な不安が全くなかつたわけではないが、何よりも「ポーランド氷河から山頂を極めるんだ」という確固たる意志を欠いていたことが最大の原因であり、他人ではなく自分がやるんだ、という気概が欠落していた。

ではどうすれば常に当事者意識をもちながら主体的に取り組み、心から登山を楽しむことができるのだろうか。

ひとつは、山行のリーダーになることだろう。自分で計画を立て（登山は原則自己責任であるが）隊全体のあらゆる責任を負うことで、主体性が生まれざるを得ない状況を作り

だすことができる。しかし、全員がリーダーになれるわけではなく、この策は現実的ではない。そこで大切になるのが「登りたい山に登ること」だろう。誰も登りたくない山に登る人なんていないだろうが、ここでいう「登りたい山」とは、「確固たる信念に基づいて、登る意義・価値があると感じられる山」のことである。自分の信念や考えを軸に計画を立て、登山に個性を発揮することでこそ、達成感や面白みを見出すことができるのではないだろうか。なんとなく堅苦しい表現になってしまったが、要は自分のやりたいことを個々人が自分なりに考え、言葉にすることで、他者に依存しない山登りを実現することができるのではないかと私は考える。

こういった観点からすると、個人で計画を立て個人で山に登る方が、自分の感性や考えを計画に反映させやすく、登山を楽しむことができるようにも思える。つまり、異なった考えをもつ者が集まった部という組織で山に登る意味があるのだろうか、という疑問が湧いてくるのだ。確かに部という単位で共通の目標をもちながらも、それぞれの考えや思いを反映させた登山を実現することは簡単ではなく、煩わしいことも非常に多い。今回の遠征の実施にあたって、おそらく隊の全員がそういった煩わしさを絶えず感じていただろう。しかし、後輩にはそういった苦難や葛藤を是非とも乗り越えて欲しいと思う。なぜなら、山頂に立った瞬間に全ては必ず報われるからだ。もっと言えば、全ては登頂の喜びに上乘せされるからだ。これは今回の遠征経験から私が確信したことである。答えの見えない議論や無意味に思えた事務作業、他人の考えを受け入れなければならない不自由さ等は、登頂という結果の下で、全てが「必要であった努力」に変わるのだ。

登山という極めて“自由”な行為を、部という“不自由”な組織で行うことに疑問を感じる後輩もいるかもしれない。それでも、自分なりの考えをもち、とことん部員と話し合い、ぶつかりあってほしい。非効率に思えるそういった時間も、山頂に立つことができれば、全て喜びに変わると私は考える。

個人随筆

アコンカグア遠征を振り返って

河村友裕

2010年5月、初めて遠征の話を知ったとき惹かれる気持ちがある一方で、正直不安な気持ちもあった。いや、むしろ不安の気持ちの方が大きかったかもしれない。その不安の理由としては今までに海外旅行さえも行ったことがなかったため、海外に行って高山に登ることを具体的にイメージできなかったのもあっただろう。しかし、それ以上に遠征に必要なお金を用意できるのか、そして自分を心配するが故に遭難事故のあった山岳部に所属することさえ反対気味の親を説得できるのかどうか、といった遠征を実行するにあたって越えなければならない「壁」を越えられるほど遠征に対する意志を強く持てるのか正直自信がなかったからであろう。

元来、河村友裕という人間は「面倒くさがりや」で、「事なかれ主義」である。そのため、当時は金銭的な苦勞をあまりしたくなかったし、岩登りや雪山を反対する親を説得するまで言い争ってまで岩登りや雪山に行こうとはあまり思えなかった。それでもこの時までそれらをやってきたのは「山岳部の存続、発展のために自分も役に立たなければ」という変な義務感をもっていただけだろう。遠征に対してもそうした義務感がまわりついていたように思う。

こうして、自分にとってアコンカグア遠征は不安やプレッシャーの側面が強い中始まったが、山に登り続ける中で、次第に岩登りや雪山も含めて登山が純粹に楽しいと思う気持ちが大きくなり、さらに体力や技術を向上させてもっと素晴らしい登山をしたいと思うようになった。そして、遠征に対する姿勢も積極的なものになっていった。これは、他の山岳部員や登山研修などで出会った他大学の仲間、登山研修の先生と共に山に向き合うことで山に対してより一層深く考えることができるようになり、今まで感じなかった魅力に気づくようになったからであろう。アコンカグアに登頂してアンデスの山々を見渡し、魅力的な、次に登りたいと思うような山を見つきたい。いつの間にか遠征にまわりついて義務感がなくなり、遠征への目的意識は明確なものになっていた。

目的が明確になってからは当初越える自信のなかった「壁」を乗り越え続けることができ、結果遠征に参加し、無事にアコンカグア登頂、そして下山することができたのである。

登山という行為は法律に基づいた社会的な制限(自然保護の観点からの入山規制や火山活動活発化による入山禁止など)を除けば、誰にでも制限されることなく自由に行うことができるものである。逆に言えば、自由であるがために登山中に起こった何事に対しても責任はすべて自分にかかってくる。つまり、誰も命を保証してくれないのである。では、自分の命を保証するために登山者は何をすべきか。すべきことの一つとして僕は入山前に入念な準備をすることだと思う。その準備とは簡単に言えば「登る前にできることはすべてやっておく」ということであり、具体的には登る山域の概念の把握やルート上の危険箇所の整理、エスケープ想定と対策、登る為に必要な体力や技術の取得、装備点検、アプローチ

方法の検討などがあげられる。これらは遭難防止の観点から最低限やっておくべきことであると考え、やればやるほど遭難のリスクが低減されるように思う。しかし、準備には労力が必要である。この労力、「壁」を乗り越えるためには計画に対する明確な目的意識が必要であり、その意識がエネルギーとなり「壁」を乗り越えることが出来るのである。

ここまで一般論を話したが、遠征の場合を考えてみよう。遠征といっても計画から実施の流れは国内における山行と同じであるため、遠征は国内山行の延長線上のものと考えることができる。しかし、逆に言えば延長のものであるが故に、「壁」はさらに多くなり、結果、国内山行よりも強い目的意識が必要になる。遠征に行く前に自分にとって遠征とは何なのかを熟考し、自分なりの答えを出して臨むべきである。遠征を成功させるためには、それができていないと計画が頓挫する可能性がある。まとめると、遠征の成功には強い目的意識が大事である。

もう一つ遠征に大事なことは準備以外にもいろいろと勉強しておくべきということである。登るのに必要なこと以外にも、コミュニケーションツールとして現地の言語はもちろん、山に生息している動植物や山自体の地質、地形、現地の歴史、文化など事前学習していれば、学習したことと現地で実際感じたことの合致点や相違点を見いだすなどすることで、より多くの視点で身の回りの事象をみることが出来る。そのことで、遠征はただ登るだけでは留まらない無限の広がりをもつようになり、より一層面白いものになると思う。

今回の遠征では事前準備のほうばかりに気をとられて、準備以外の面はあまりできていなかったように思う。その点を考慮すると、今回の遠征は全員登頂できたが個人的な満足度は70%ほどである。また、先述した遠征前の「アコンカグアに登頂してアンデスの山々を見渡し、魅力的な、次に登りたいと思うような山を見つけたい」という想いについてであるが、いざアコンカグア山頂に到着して周りを見渡すとアコンカグアよりも標高がかなり低い山が多く、あまり魅力的に思えなかったため、残念ながら次に登りたい山は見つからなかった。強いて言えば、アコンカグアを今度はポーランド氷河ルートから登りたいと思った。

今回の遠征を得て、自分は一回りも二回りも成長できるものだと思っていたが、蓋を開けてみれば、相変わらず「面倒くさがりや」で相当追い込まれないと物事ははかどらないままである。むしろ山に対する気持ちは遠征当時よりも弱いものになっている。これは、遠征が終わってから研究室での大学生活が始まり、新たに取り組むべきことが生まれ、そちらに労力を割くようになったからだとも考えられるが、それ以上にこの遠征の直後に次なる明確な目標を打ち出していなかったからだと思う。自分は指示されたことをこなすのは比較的得意であるが、自分の考えのもと、一から何かを創り上げるのは不得意であると思う。よって、今後の登山に対して確固たる目標を立てることは個人的に難しかったと思うのであるが、そうしなかったとひたすら歩むべき方向を見失い、結果として登山に対する想いがしぼんでしまったのだろうと思う。結局、この遠征で大きな成長が得られたとは言えないのかもしれない。ただ、それは現時点での話でこの反省を活かして今後の方針を明確にすることができれば、この遠征で得たことが大きくなりえると思う。

今後、自分自身が主体的に海外登山に取り組むことは現時点では残念ながらイメージできない。それは先に述べたように今後の目標をきちんと決められておらず、遠征に対する強い想いが湧くはずもないからである。ただ、実際に取り組むかどうかを抜きにすると、個人的に理想の海外登山の形が存在しないわけではない。それは目指す山の標高が高く、かつ周辺の山々の標高も高く、次に目指したい山が見つかる遠征、そして山周辺に生息する動植物や現地の言語、歴史、文化に対して自分なりの研究テーマをもって臨むことができる学術的な遠征、そして、今回のようにガイドに頼らず、学生だけの力で登りきる遠征。そんな遠征ができれば素晴らしいな、と思う。

海外遠征を考える後輩たちへ伝えたいことは、そのまま今の自分に言い聞かせたいことでもあるかもしれない。

「現状に満足や妥協をせず、さらなる高みを目指し続けよう。」

これは山岳部に所属しているにあたって最も基本的なことかもしれない。ただ、この言葉を実践し続けることができるのであれば自分の可能性をどんどん広げることができるように思う。普段の反省を確実に活かし続けることが遠征成功へ最も近い道なのである。



2011年12月31日 南アルプス北岳山頂で

個人随筆

目指す山

藤井良太

私は森林におおわれた日本の山が好きである。私が登山に求めることは、①自然を知りたいという欲求(好奇心)を満たすこと、②自己の修行(厳しい自然の中で生き抜く技術と精神力を得ること)であり、これらによって今西錦司先生のような“人間的魅力のある大人”になりたいと考えている。それが私の目指している山である。では何故アコンカグア遠征を企画したか。何故府大山岳部史上初ともなる海外遠征を実現に至るまでの意思を継続できたのか。その要因についてベースキャンプでいろいろ考えていた。

クビ・カンリ 2007 遠征の経験 2007年にワンゲル部から山岳部に移った私は、今西先生の著書の影響で、京大山岳部のスタイルにあこがれ、未踏峰(地域)を対象とする学術登山をしたいと思った。その夢は運よく叶い、クビ・ツェンポ現流域学術登山隊 2007に参加して、クビ・カンリ峰 6721mの初登頂を成し遂げることができた。この時の学術調査は、当時2回生で学問において素人であり、また調査より登頂に重きを置くべき立場であったため、大変貴重な経験ではあったが、学術的に自身を反映させることはできなかった。とくに、登頂に際してもルートワークやタクティクスなどほとんどが登攀隊長や他のメンバーまかせで、自分が登ったというよりは人に登らせてもらったという感覚が強く、初登頂とは言えど、あまり胸を張れるものではなかった。登頂後、B.C.に戻ってきてから思った「次は自分の力で登りたい」「クビ・カンリを超えたい」という気持ち、その気持ちこそが、今回の遠征構想におけるもっとも基本的な私の動機であった。

なぜアコンカグアか 何故その山を選んだのか。それは遠征計画の実現可能性が高いと考えたからである。アコンカグアは世界七大陸の最高峰の一つで、有名な山である。山岳部OBの高岸さんから伺った「山岳部が目指すもの；高さ、遠さ、困難さ」。これらのベクトルに当てはめて山を決める時、この山以外になかったのである。アコンカグア。それはヒマラヤを除くと世界一の「高さ」の山、私たちの住む日本からするとほぼ地球の裏側に位置するという「遠さ」、そして、高さ遠さからくる困難さに加え、ノーマルルートではなく、アイゼン・ピッケルワークの必要なポーランド氷河からの登頂というより困難なルートへの挑戦という全てのベクトルで高い次元を示している山を見つけた。それがアコンカグアだった。ここに私的な好みは存在していない。しかし、これらの三要素はもちろん私にとっても、他の山岳部に入るような学生にとっても魅力的なものに違いないし、目指す意義を共有しやすくなると考えた。海外登山の実現には対象の山を決めることが第一に困難であり、対象のブレや意欲の個人差の足並みをそろえることが必要だ。しかし今回のように、対象の山の決定において客観性を保つことができたことは、2カ年の計画を進める上で重要であった。後付けの私の観点からすると、京都府立大初の海外遠征にふさわしい場

として、京大や同志社大が固執するようなヒマラヤなどは選びたくなかった。山は、地域が変わると姿かたちも変わるし登り方も変わる。それに、日本の山で府大山岳部がこれまで充実した山行をしてきている以上、初登頂のみが山の価値観ではないのは明らかである。そして、自らの挑戦として、2007年に自分の力で登れなかったクビ・カンリよりも高い標高の山に、自分の力で、後輩を率いて、自分だけのクラブで到達することを課題としていた。また南半球という一にも魅力を感じたし、環太平洋造山帯の一つ、アンデス山脈であるという魅力もあった(2012年12月に南米カピアウエ火山が大噴火していた)。さらに「南米最高峰」というその響きも、一般人に理解されやすかった。総じて、アコンカグアは私たちにとってわかりやすい魅力と飽きさせない要素があったと言える。この山の存在のおかげで、遠征計画を始める事が出来た。

きっかけ そのアコンカグアを発見したきっかけは、私の2009年度冬の北米大陸北西部の放浪である。放浪の末にたどり着いたアラスカで、北米最高峰のマッキンリー(デナリ 6196m)をこの眼で見た。アラスカ州立大学内の地理センターで、デナリの模型を観察し、標高は低いと言っても海からの比高はエベレストより高く、それ以上に緯度の高さから、直感的に“これは登れない”と思った。一方、南米最高峰を見ると、デナリよりも高いが、緯度は35度くらいで日本と同じである。“これなら自分でも登れるかもしれない”とそう思った。その時は、胸からこみ上げる何かがあったが、その着想を帰国まで“眠らせる”ことにした。ちょうど他大学の山岳部員と「山の議論」をしていたのもその頃だった。

そして帰国後、大学の所属研究室で、アコンカグアを調べていると、ノーマルルートのほかにすこし難しい氷河ルートがあり、登山適期は12~3月(南半球の夏)であり、登山料もヒマラヤと比べると格段に安く、トータルでかかる費用も明らかに安い。また和英問わず、多くの興味ある登頂記録が見つかった。同じ人気な山でも、喧騒なハイシーズンのノーマルルートを避けると、大学の試験日程や進級の都合にとてもよいことが分かり、それはすぐに現実味を帯びた。研究室でひとり興奮し、“おおお~!!”と奇声を上げて喜んでいた。立命館大学山岳部OBで友人の、アコンカグアに一人で登りに行った野口氏に聞くと、「部で行くなら遠征っぽくなるかもね。スペイン語が喋れたら登れる」とアドバイスくれた。時期と対象の山(ルート)を決めれば、あとは部員に提案するだけだった。

鳴沢岳遭難事故の影響 この遠征計画を部に持ち込むことにしたのは、やはり鳴沢岳遭難事故の影響が大きいと思っている。事故後の精神的な落ち込みに加え、部員の実力低下、まとまりのなさ、難しい立場、辞める部員と自分勝手な部員。これらに一定の方向性を与え、夢を持たせて、そのためにしっかりと実力をつける解決手段として、海外遠征という大目標が最適だった。その中で、事故の教訓かつ提言でもある、「自分の山登りとの対話(心証形成)」、学生らしさ(自分たちの持つ可能性)、そしてメンバーシップ(独立性と協調性を併せ持つコミュニケーション)を十分育むことのできる二ヶ年計画で、もう一度自分たちでレベルの高い、事故を未然に防げる山岳部員(賢い登山者)になることを目指した。

この海外遠征も含めた二年間で、私の知識・技術・思想などを後輩に伝達し、死なない登山者・死なせない登山者になってもらう。そうすれば、私が救えなかった安西たち三人の山での死の、償いに少しは役立つことができるだろうと考えた。この中で、私も含めた山岳部員が体験することは、近い将来必ず役に立つ人生の糧になると信じて、この計画の実行を決意した。

登山としてはどうだったのか 顧問の牛田先生は、「アコンカグアは趣味が悪い」と発言された。それを聞いて私はたしかに今の登山界から一般的にみれば、妥当な感想であると思った。趣味が悪いとは、“とりあえず高さ”を目指すのは面白みがない、という意味であると捉えている。そう言われればまさしくそうなのだが、行ってみた結果としても今回はアコンカグアでよかったと思っている。確かにパキスタンやカラコルムの渋い山やパタゴニアなどの尖塔峰やロシア、中国、ヒマラヤで未踏峰を探すのも、それはまた、遠征の醍醐味であると思うし、その方が遠征として価値があるかもしれない。しかし、これまではそうした考えにとらわれて結局遠征を実現できていなかったのはもったいない。遠征に行つてこそ見えるものもある、という半ば強引な私の都合で、今回は対象の山を決めてしまった。都合というのは、誤解を恐れずに言うと、あまり自身の労力をかけずに遠征を実現したかったのだ。現地で装備をすべて買え、B.C.には食料サービスやネット通信、ライブカメラ、ドクターチェックもある。各保護者に納得させる点においても都合がよい。しかし、そんな打算的な考えばかりかというところでもない。

今西先生は、海外登山の際に対象峰決定法のいくつかの指針を示した。①未踏であること、②形のよい山であること、③はじめから一流を狙うべし、などである。

今回行った遠征に当てはめると、①は未踏峰ではないのでこの路線ではない。しかし、私たち KPUAC にとって海外遠征実現こそが未踏の第一歩であり、この点において未知の要素を重視したい。実際には皆が試行錯誤の連続であったし、南米というフィールドにわくわくしていた。②はよく当てはまる。アコンカグアは国道からも見える南壁の姿が有名で、ヒマラヤ襲と広い裾野が美しい台形をしている。また北面からの姿は、なだらかすぎて雪もない。その上、ノーマルルートのアプローチでは、山頂は西壁などに隠れ、その山容もルートも見ることができない。しかし、ポーランド氷河のアプローチであるレリンコス谷から見るアコンカグアは、写真のような美しい鋭頭の三角



形をしており、正面に氷河ルートが見え、迫力も段違いであった。この方向から見たアコンカグアの姿は、ビッグマウンテンとして十分に素晴らしいと思っている。この美しい形、よい形の山だからこそ、東面から挑む価値があったと考えている。最後に③は、アコンカグアには年間数千人が訪れ、その三割近くが登頂するような山であり、知名度が高く、「世界の富士山」的存在である。またサービスも行き届いていることから、クライミングとしては俗っぽい印象を受けやすい。アルパインクライマーの関心が低いこともそのためであろう。だが、先ほど述べたように、7000m 近い標高の独立峰であるとともに、激しい気候と強風の影響を受ける美しい形をしており、ノーマルルート以外からの登頂は困難を極める。一流を名乗るにふさわしい。実際にその山を間近でみて、そう感じられたから確信をもって言える。

私は単に山頂に至るよりも「ポーランド氷河ルートからの挑戦」の観点を大切にしていた。標高をめざすだけでなく、自身と山との対話、生きて還るための本当の山の難しさを味わい、成長したかった。山頂の価値よりも、人間的に成長するため、未来の自分に投資するためという価値観の方が大きいのである。氷河ルートは、時期的には、難しさがより一層上がっていたが、ではどうすれば氷河ルートから登れたか、それを自分たち山岳部の中に見出したい。その試行錯誤を楽しみとし、面白さとして、それを次の登山につなげたいと思う。私たちが単にノーマルルートを初めから選ばず、氷河ルートからの登頂を目指したのは、そこに意義があると感じていたからである。面白いルートを登りに行くという意味で選んだのであって、単に標高を得るためにアコンカグアを選んだのではない。より困難な面白いルートが登れるよう、部としての更なる研鑽や相互的なサポートが必要になってくるであろう。結果的に氷河ルートからの登頂は実現できなかったわけで、その意味で今回の遠征は反省の多いものである。とはいえ、一つ、府大らしい遠征がここに実現したことになる。どの高峰に行くにしても高所順応の対策は必須であり、今回の経験は、その意味では、7000m 近い山に挑んだ経験値は、7000m 未満の山についてならば活かせるものと思う。今後は、今回のようにオーソドックスな海外登山形態を基盤としつつ、未踏峰や学術、エリア的な面白さの面において、付加価値の高い遠征を出来るものならつくりだしてほしい。百人いれば百通りの登山があるように、百の遠征隊があれば百通りの遠征登山があるだろう。また、どのような登山が素晴らしいかについても、それは百通りの考え方ができるように思う。しかし、どの遠征にしても、仲間とやり遂げた遠征は、それぞれが個人の人生にとって必ず大きな財産となっている。自分の好きな登山を見直し、見つけ出す大きなきっかけにもなっている。結局は、さまざま考えることができる登山が一番中身の濃いものになるのである。海外登山は楽しい。海外の大きな山に挑むこと自体、それを目指す価値があり、夢と好奇心にあふれている。本当に登りたい意思があれば、夢は実現できる。その前向きな初心を忘れないようにしたい。

京都府立大学山岳部が今後、海外の登山においても独創的な要素を見出し、次なる素晴らしい遠征を計画する時が来れば、今回の遠征も踏み台としての意味がより深まると期待している。ともかく、次の登山も怪我のないよう、ちゃんと準備して山に行きましょう。

二ヶ年計画

2010年5月～2012年3月

二ヶ年計画 2010年5月策定

- 計画の目的：
 - ・海外遠征登山に向けた実力を身につけること
 - ・府大山岳部の部組織基盤の強化とボトムアップ

■基本方針

- ・最初の一年間で基本的な登山技術を習得し、二年目で氷河上のロープワークや高所順応など海外遠征に向けた応用的な登山技術を習得する。
- ・情報収集は並行して行い、月に一度のミーティングで勉強会等を行い、共通認識を持つ。

■基礎能力&実績最低条件（課題）めやす

- アイゼン歩行日数通算 100 日以上 3000m 以上累積登山(縦走)日数 50 日以上
- 山ランニング累積高度 6962m 冬の白峰三山縦走完遂 OS 能力は 5.9 以上

■プレ遠征冬合宿後（2012年1月時点）の結果

- ・延べ回数 30 回以上のミーティングで現状把握と計画の再評価を実施
- ・10 回以上の勉強会において一般雪山登山における気象・高山病・凍傷・低体温症・遭難事故例などを研究
- ・夏の登攀合宿において岩壁登攀と氷河上のロープワークを修得。
- ・家族や OB を交えた遠征説明会で 3 家族から学生主体の遠征実施について承認を得る。
- ・春に悪天候で延期した富士山高所トレーニングは 11 月に行った。
- ・富士山合宿において、3000m 後半の低圧低酸素低温状況下での行動を体験（山頂一周）。
- ・ポーランド氷河ルートの条件にしていた日本で一番高い稜線における縦走（南アルプスでの冬合宿）を遠征メンバー全員で完遂。2010 年度には途中敗退した縦走を完遂することができた。

■結果の自己評価

- ・登山技術的にはおおむね登攀対象にみあった練習ができ、技術が習得できた。
- ・遠征隊員は 3 名とも、アコンカグア・ポーランド氷河ルートの登攀が実施可能である最低限の能力を備えていると考えられる。
- ・登頂を狙える遠征隊員は少なくなってしまうが、今後 1 ヶ月間でさらに計画を練り、遠征出発に向けた準備をすすめる、不十分な点を補えるよう努力していく。
- ・効率的なミーティングや分担された役割の遂行、計画周知の根回しなど後手に回ることも多かった。

遠征計画書の作成について

今回、遠征計画書の作成は隊長である藤井が主として担当した。未来の山岳部員が海外遠征を志した際に参照できるよう、最初に国内での山行計画書との大きな相違点を挙げる。

	国内山行	海外遠征		国内山行	海外遠征
タイトル	○	○	メンバー	○	○
趣意説明文	×	○	協賛・後援団体	×	○
目的	○	○	予算	×	○
遠征隊名	×	○	概念図	○	○
山域	○	○	行程高度表	×	○
実施期間	○	○	緊急連絡先	○	○
行程概要	○	○	タクティクス	×	○

上記は国内山行と海外遠征計画書の記載事項の比較表である(※一般論ではなく府大山岳部のものを比較)。

- ・ 遠征隊名 : 登山許可の申請の際等、団体名は必要。
- ・ 概念図 : 鳥瞰図やBC以降詳細図等も必要。
- ・ 緊急連絡先 : 緊急連絡網の記載が必要。現地の日本大使館等も記載。

以下、計画書作成に際しての留意点等を記す。

- ・ 遠征計画書は計画検討の際、叩き台ともなるため早めに作成しておくべきである。
- ・ 同時に大学への計画の通知も早い段階で必要となる。
- ・ 計画書は提出する相手によって記載内容を変更する必要がある。例えば企業への提出用の計画書は緊急連絡網の個人情報伏せる必要があり、OBへの提出用の計画書は助言をいただくためにもより多くの正確な情報を載せなければならない。この点について私たちは一つミスを侵してしまった。後援依頼するつもりであった京都府立大学の名を、以来前から後援団体欄に記載し、大学側から抗議を受けた。外部へ流す計画書には特に正確な記載(例えば「後援依頼予定」など)が必要であることを、身をもって知った。
- ・ 現地国への計画書の提出も必要となるため、英語版や現地語版の計画書も必要である。
- ・ 海外遠征には国内山行と違い、多額の資金が必要となるため、資金援助を受けなければ計画の実施は難しい。趣意説明文は唯一計画書に思いを記載できる場でもあるといえるため、非常に重要なものであるといえる。

トレーニング記録

I.概要

アコンカグアの登頂の主なキーポイントとして、①高所順応②強風対策の2点が挙げられる。これに対し、2か年のトレーニング計画を組み、積雪期3000m級登山を中心に遠征に参加しない部員も含め、訓練に励んだ。また、2011年度の南アルプスでの冬合宿計画完遂を、ポーランド氷河ルートへの挑戦の必要条件とした。

II.主な積雪期山行の実績

年度	月	山域	期間	メンバー
2010 年度	5月	白馬岳(GW合宿)	4日間	藤井、河村、他3名
		槍ヶ岳(日中韓学生交流登山)	7日間	河村、他多数
		劔岳(大学生登山リーダー 春山研修会)	7日間	河村、他多数
	11月	富士山(高所順応訓練)	2日間	河村、寿栄松、他2名
		立山(プレ冬合宿)	4日間	藤井、河村、寿栄松、他2名
	12月	甲斐駒ヶ岳(冬合宿)	8日間	藤井、河村、寿栄松、他2名
	2月	五竜岳(春合宿)	4日間	藤井、河村、寿栄松、他2名
3月	鍬崎山(大学生登山リーダー 雪上研修会)	5日間	河村、他多数	
2011 年度	4月	鳴沢岳(GW合宿)	6日間	藤井、河村、寿栄松、他2名
	5月	劔岳(大学生登山リーダー 春山研修会)	7日間	寿栄松、他多数
	11月	富士山(高所順応訓練)	3日間	藤井、河村、寿栄松、他2名
		毛勝山	3日間	河村、他2名
	12月	白根三山(冬合宿)	10日間	藤井、河村、寿栄松、他2名

III.できたこと、できなかったこと、すべきであったこと

- ・悪天候や日程調整の都合上、中止となった計画はいくつかあったが、後手に回り気味になりながらも、事故なく、おおかた2ヶ年計画通りに山行をこなすことができ、基本的な冬山登山技術は修得することができた。
- ・2011年度夏合宿、富士山では氷河上でのロープワークを練習することができた。
- ・2011年度冬合宿は計画を完遂することができ、ポーランド氷河ルートに挑戦する前提で日本を出発した。
- ・冬合宿後、富士山へ直行し、最後の高所順応訓練をする予定であったが、計画書類の作成に追われていたため、中止となった。また、ポーランド氷河ルートを意識した訓練として、2月に八ヶ岳でのアイスクライミングを予定していたが、遠征準備のため中止とな

り、雪氷技術は十分に修得できなかった。

IV.考察

- ・高所順応と強風対策については、富士山での高所順応訓練と、厳冬期日本アルプスの稜線上での行動を経験することである程度は達成され、ノーマルルートからの登頂成功に大きく寄与した。
- ・ポーランド氷河ルートからの登頂を果たすことができなかった理由として①高所順応が順調でなかったこと②技術的な不安があったことの2点が挙げられる。この2点は当初冬合宿後に計画していた富士山での高所順応訓練と八ヶ岳での雪氷技術の修得がなされていればある程度は改善されたと考えられる。
- ・7000mに近い山のバリエーションルートに3人という小規模隊で挑戦するためには国内での基本的な冬山登山技術に加えて、高度な雪氷技術や豊富な経験が必要であり、今遠征メンバーにはそのような個々の力が不足していた。

具体的にいうならば、今回目標としていたポーランド氷河ルートは①傾斜は比較的緩いこと②滑落すれば自然と停止するような平坦な箇所はないこと③雪質はところにより硬いと予想されること④支点になるような立ち木や灌木等は一切ないこと等の特徴があり、日本国内でいえば富士山の上部に似ているだろう。高所順応の訓練も兼ねて積雪期の富士山での雪訓を積んでおくべきであった。また、ピエドラ・バンドラ付近はおおよそ40~50°ほどの傾斜があり、氷化しているようであったため、八ヶ岳等での比較的傾斜の緩い氷瀑で氷壁登攀技術やアイススクリーでの支点構築技術を修得すべきであった。

また、今回のメンバーは3人と、海外登山遠征隊としては非常に小規模であり、それゆえにメンバーの内1人でも体調を崩すと隊としての力が大幅に低下し、行動に不安を感じることがあった。特にアタック時にはBCにテントキーパーがいれば非常に安心感があり、さらに人数が多ければ隊を二分してノーマルルートとポーランド氷河ルートに挑み、ポーランド氷河ルートからの登頂を果たしたり、ベースキャンプ常駐のサポート隊員などでBCテントの保守ができたりと、不安定要素を取り除けた可能性もあるだろう。人数が少ない分、一人一人により責任を持った行動が求められ、各々で助け合わなければ登頂は困難になることが予想される。1人でも多くの隊員を山頂に立たせることが目的であればより多くの隊員を率いる必要があったが、今回の私たちの最大の目的はあくまでも全員登頂にしたかった。少人数での登山はその点有効であり、バランスが難しいが、個人的には少人数による登山によって府大山岳部らしさを発揮できたとも思っている。

ミーティングについて

遠征の計画初期、メンバーにはほとんどアコンカグアに関する予備知識がなく、アコンカグアはどのような山であるか、というところから調べる必要があった。当初、遠征実施に向けて2ヵ年計画を立てたが、2010年度は基本的な登山技術を身につけるための国内山行の計画・実施に追われ、遠征に関してはほとんど具体的な話は進めることができなかった。以下、2011年度の計画検討を中心としたミーティング記録を記す。

2011年以降のミーティング記録

日付	場所	内容
2011年2月24日	横山宅	映像鑑賞による研究・資料和訳
3月1日	山岳会山小屋	計画検討
5月29日	河村宅	計画検討
6月22日	部室	計画検討・役割分担決め
9月20日	寿栄松家	映像鑑賞による研究
9月27日	情報処理室	資料集め
10月10日	藤井家	装備検討
10月24日	部室	アプローチ検討
11月3日	部室	家族説明会について検討
12月2日	部室	装備協賛について検討
2012年1月3日	部室	大学への計画書提出について検討
2月13日	部室	計画検討

上記以外にも部会後の時間等を利用してこまめにミーティングは開いたが、遠征出発直前はかなりバタバタとしていた。以下、計画検討に際して気になった点を記す。

- ・ この時期にはこのことを完了させておきたい、などおおまかな計画を年単位で立てるだけでなく、こまめに達成度を確認し、日本出国から逆算して完了時期を修正すべきであった。ただし、遠征計画の検討に加えて、実際にはOBや大学、隊員家族への説明についての話し合い等も必要になるため、役割分担と余裕を持ったミーティング計画を立ておくべきである。
- ・ 国内での週末山行の計画検討・実施と並行しての定期的なミーティングの実施は時間的に難しい。従って、ミーティングの実施・課題発見→課題に対する解決担当分け→各々が解決作業→解決案を隊員共通メールアドレスへ送信→各々がチェック→ミーティングにて再度検討、というように、Eメールでの情報交換が計画に対して隊員間で共通した認識を持つことに寄与した。これによって情報を保存・共有することができ、修正・更新もかなり楽になる。
- ・ 長期合宿の前後や遠征出発直前はミーティングの実施が難しいことも加味してミーテ

ィング計画を立てるべきであると感じた。

- ある程度計画検討が進んできた段階で、OBを交えてのミーティングをできるだけ頻繁に開くべきであった。特に海外登山経験の豊富なOBとの情報交換は非常に有益であり、山岳会との情報共有のためにも必要であると感じた。
- それ以前に、前提として、議論の仕方や議事録資料の作成、議事録作成の習慣等も部として企画を的確に実施できるよう、普段の部会から向上を目指していくべきである。
- また基本的な山の情報として、地形の読み込み、地形と写真の対応、記録の分析など情報共有にもっと時間を割くべきであった。

●アコンカグア二ヶ年計画途中現状アンケート

計画は全てうまくいった訳ではない。むしろ理想通りでは全くなかったとも言える。そんな現状確認のため、二ヶ年計画が始まって丸一年が経過した、2011年6月時点でアンケートを行った。

当時の率直な意見のため、今後、京都府立大学山岳部の活動において遠征の具体的目標が決まった時、訓練計画を実施していく上で参考になるかと思う。

Q 昨年の予想とは異なる現状などについて、一年間を振り返って。

1. 出来たこと

- 藤井 遠征構想を、実現できる計画として、具体性を高めることができた。
- 横山 地図の購入、ガイドの和訳、貯金。
- 河村 ロープワーク技術の向上雪山経験値。
- 寿栄松 予想を上回るものは特になし。

2. できなかったこと

- 藤井 偵察計画が破たんしたことと、現役の雪山登山の技術的向上において、敗退などで予想より経験値を伸ばすことができなかった。
- 横山 富士山トレ、スペイン語、スポンサーとの交渉、定期的なミーティング
- 河村 アコンカグアの情報収集
- 寿栄松 隊員としての担当リスト(食糧、現地会計)の作成
雪上でのロープワーク経験(コンテ歩行など)
十分なアイゼン歩行技術の修得・現地(下界)
アコンカグアについての情報収集・整理

3. 感想

藤井 自身の研究等の用事に大半を割かざるを得なかったが、その分現役メンバーの自主性に頼ってしまうこととなった。現役側も、初めての遠征という試行錯誤の中では、なかなか自主的に行動することは難しく、日々の登山でいっぱいになってしまっていた。さらには隊長の役目である役割分担や外部との根回しなど計画と実際の乖離の現状を修正させていくことに関して、能力足らずの部分が多かった。

横山 現状として、今は勉強の方で目標やらなければならない事を持っていて、こっちで無心にならなければ、なりたいと常に思っています。目標の中には大学院のことも含んでいて部活に時間を消費することをわずらわしくさえ思っています。そんな中で遠征の計画に参加したい、頑張れるとは思えません。参加しないと広言した時以降もモチベーションは上がりませんでした。山岳部員として期待に答えられなく本当に申し訳なく思っています。すみません。

河村 山岳部の運営が予想以上に大変でアコンカグアに割く時間があまりなく焦っています。

寿栄松 正直、去年の今頃は、この時期ならもう少しメンバーで計画について話し合えていて、計画を詰められているだろうと思っていました。実際、現時点でもっと計画を進める必要があると感じていますが、毎週末・長期休暇の山行などで手一杯になっている感があります。時間を作ってせめて自分の担当の計画ぐらいいは出来るだけ早く作りたと思います。モチベーションの面では問題ないと思っています。

4. やらなくてはならないこと（数字は優先順位）

藤井 ①現状の確認 ②自身のスケジュール調整 ③山岳部の運営と活動指針の遵守
④計画書作成 ⑤語学

横山 ①参加意志の確認 ②行程の決定 ③必要装備、費用の準備
④トレーニング ⑤計画の詳細を詰める

河村 ①パスポートの習得 ②行程の決定 ③必要装備、食料などの検討
④各種リストの作成 ⑤計画書作成

寿栄松 ①担当リストの作成 ②現地情報の収集(特に担当の食糧燃料買出しについて)
③ルート情報の収集・整理 ④事故記録読み(特に高山病)⑤スペイン語の勉強
※アイゼン歩行技術の向上等、山での技術向上ももちろん。

1. 日時：2011年12月10日 14:05～15:40 2. 場所：京都府立大学三号館3F会議室
3. 出席者：遠征隊員 藤井、河村、寿栄松、隊員ご家族 藤井家、河村家、寿栄松家
山岳会 塔下、井川、瀧野、山岳部 竹中、横山、國只、末田、和田
4. 目的：ご家族・山岳部員・山岳部 OB との対話やスライドショーを用いたプレゼンテーションを通じてご家族にアコンカグア遠征についての理解を深めてもらう。
5. 内容：1) 参加者紹介 2) スライドによる計画内容説明
3) 隊員の意気込み、山岳会・ご家族からの激励
6. 質疑応答における主な質問・回答・意見

Q. フィックス等のルート工作は必要か。【山岳会・井川】

——A. 登る際は必要でないと想定。下降時の急坂で場合を見て工作。

Q. 非常時の日本への連絡はどうするか【寿栄松家】。救助要請はどのように行うのか【河村家】。

——A. 民宿アコンカグアの増田さん→山岳部横山へ連絡。

B.C.に無線で連絡を行う。登るにはB.C.のドクターの許可も必要である。

Q. パーティの一人にドクターストップがかかった場合、残りの2人で山頂を狙うか？【寿栄松家】

——A. 場合による。だが、一人で行動することはまずない【考えていない】。

Q. 同じローシーズンで、氷河ルートから登るパーティ数は？【藤井家】

——A. 年によってバラつきがあるが、去年は10パーティほど。

Q. 冬合宿の白根三山冬季縦走を敗退した場合、遠征は中止か。【山岳会・塔下】

——A. ノーマルルートに変更して遠征は決行。

Q. ローシーズンでもネットの利用は可能か。——A. B.C.でのネット利用は可能。

Q. 登頂できる見込みはどのくらいか【山岳会・瀧野】。

——A. 高度順応の程度による。氷河ルートで3割(ノーマル5割)と言われている。

Q. 登頂の成功率をあげるために、どのような戦略を考えているか【瀧野】。

——A. カギは高所順応。水の摂取などで少しでも順化したい。

7. 意見等 【塔下】無線はレンタルすべき。【遠征隊】山頂アタック日以外は、基本的に1日に標高500m以上は登らず、無理せず高度順応をはかる。【寿栄松家】コストがかかっても衛星電話など借りて無事を知らせてほしい。【井川】メンバーのコンディションや現地の天候状況を見極め、遠征を実行に移すか、もしくは行かないか、ということを決定するのがいつかを明確に決定すること。【遠征隊】現地での最大風速50mに及ぶ強風は偏西風によるものなので、油断はしないが、ルートの大半が東寄りにあるポーランド氷河ルートでは比較的風は弱まっており、影響は少ないだろう。【ご家族から】3人で、楽しく登り、そして無事に帰ってきてくれることを祈る。ずっと遠征が漠然としたものだったが、きちんと計画を聞ける場を開いてもらってよかった。無事に帰ってくるのは当然のことだ。このことをいつも胸に刻んでおいてほしい。

所信表明

京都府立大学山岳部アコンカグア遠征所信表明

山岳部二回生（当時）

河村友裕

この度、私、河村友裕は 2012 年 2, 3 月に遂行予定の京都府立大学山岳部アコンカグア遠征に参加する決意をいたしました。理由と致しましては、以下に挙げる 3 点があります。

第一に、この遠征を通して人間として一回り大きくなれるという思いがあるからであります。私自身が山岳部に入り、登山をしている理由の 1 つは、計画立案、検討、準備、実行、報告という山行の一連の流れ、山行中で味わう自然の美しさ、厳しさ、山岳部という組織の運営などを経験することで、人間的成長をすることです。今回の遠征は、普段の山行よりもすべてを長期的な目線で考え、実行しなければなりません。それはもちろん大変ではありますが、それを経験すれば、さらなる人間的成長が望めると私は考え、ゆえに遠征に魅力を感じているわけです。

二つ目の理由と致しましては、学生時代に海外登山を経験することで、大学を卒業した後の登山活動の幅が広がると思うからです。自分は社会人になっても登山を続けていきたいと思っています。社会人になると、在学時よりも忙しくなり、なかなか山に行く機会がなくなってしまうがちだと容易に想像できますが、そんな中でも何らかの形で続けていこうと思っています。そこで、ある時海外登山の計画がたったときに、今回の遠征の経験があれば、準備しなければいけないことなど要領がわかっていますので、参加できやすくなります。逆に経験がなければ、要領がわかっておらず、最悪準備不足で計画に参加できなくなってしまう可能性があります。このように、社会人時での海外登山 1 つとってみても、経験の有無で、登山活動の幅の差が生じてくるので、ぜひ今回の遠征は行きたいと思っています。

最後に、京都府立大学という 1 つのチームがある 1 つの目標に向かって努力を重ね、結果その目標を達成するという行為がすごく意義があることだと思うからです。人はそれぞれ違った思考をもっており、やりたいことなども違うという中で、1 つの目標に向かって皆が同じことをしていくことは難しいことだと思います。まして、2 ヶ年計画であれば、途中で各人の考え方が変わったり、モチベーションに差が生じたりしやすくなり、より難しいと思います。そういったことも乗り越えて、無事に登頂し、下山できたとなれば、それはとても素晴らしいことで、僕はその中に意義を見出せると思います。

以上の理由から遠征に参加したく思います。

2010 年 10 月

所信表明

アコンカグア(ポーランド氷河ルート)遠征 所信表明

山岳部一回生 (当時)

寿栄松孝介

自分はそもそも雪山と海外登山に憧れて、大学山岳部に入部した。入学前に藤井さんのタビ・カンリ初登頂の記事を見たとき、今までの自分の経験からは全く想像もできないような世界を見てしまったように感じた。それと同時に、「もし自分がこんな体験をできたら、その瞬間どんな気持ちになって、それが自分にとってどれだけ経験値になるのか」 という疑問を抱き、登山に憧れを感じて入部した。そんな中、入部して1ヶ月も経たないうちに藤井さんからアコンカグア遠征の案が提示された。初めて計画を聞いたときの正直な心境としては「もしこの遠征を成功させることができれば、どれだけ自分にプラスになるだろうか」というような考えしか浮かばなかった。高校までスポーツも勉強もそこそこでしかなかった平凡な自分から脱却できるんじゃないか、と考えた。その後、藤井さんから受け取った計画書を目にして、この計画は部の復興をかけた、部として成功させるべくして出されたものであると知って、自分の考えをすごく恥ずかしく感じた。正直にいうと、まだ登頂を成功させたい理由として自分の勝手な思いは相当大部分を占めている。それでも、この遠征の成功は自分のこれからの登山に大きな影響を与え、後輩の海外遠征にもつながると考えたため、この遠征に参加できるように努力することを決めた。

また、部として登頂を目指すということにも強く魅力を感じた。普段から一緒に山に入り、苦楽をともにした先輩方とピークに立った瞬間のことを思い浮かべると、自分は計画に参加できるかも分からないにも関わらず、それだけで胸が熱くなる。

現参加予定メンバーから考えると、今のままでは確実に自分が足を引っ張ることになると思う。この計画に隊員として参加することを希望したからには、少しでも部として遠征を成功させるために努力することは自分の義務だと考えている。

また、自分がもしこの遠征に参加することができ、遠征を成功させることができたなら、今の自分から考えれば無謀だが、今度は自分の手で計画を練り、自分の後輩を海外へ連れて行きたいという思いがある。自分はこの遠征計画を出していただいた先輩に本当に感謝していて、その経験を生かして部に還元することが先輩への恩返しになると考えたからである。もちろん、やはり自分の手で海外遠征を成功させてみたいという単純な気持ちもある。自分がこの計画に隊員として参加するには、日々の目的意識を持った山行の積み重ねと、そのためのアコンカグア登頂を絶対に成功させるという気概を持ち続けることが絶対必要だと思う。自分も感動を味わいたいというのはもちろん、大きな目標を持つことで日々の山行のモチベーションを維持させるためという意味でも、絶対に隊員としてこの計画に参加し遠征を成功させるんだ、という強い気持ちを持ち続けていこうと思う。

2010年 10月

必要書類

登山申請必要事項のほかに所持金証明・両親の承諾書（寿栄松）適宜必要になることがあるため持参した方がよい。確認されない場合もある。以下、参考までに質問例を示す。

■全員のデータが必要です。

- ①氏名（パスポートと同じ） ②年齢（20歳未満は両親の承諾書 APOSTILLE AYE 持参）
③パスポート番号 ④性別 ⑤国籍 ⑥住所・郵便番号・電話番号・E-メールアドレス）
⑦登山ルート（ノーマルルート・南壁・ポーランドルート・他） ⑧トレッキング or 登山
⑨メンバー人数 ⑩入山日（予定） ⑪下山日（予定） ⑫緊急連絡先の氏名・電話番号・
続柄（家族/仕事/他） ⑬保険会社名・電話番号・保険タイプ・Policy 番号 ⑭血液型（RH）

■第一ドクターチェック 「はい」か「いいえ」で答えてください。

- ①薬のアレルギーありますか。あったらどんなタイプのか。 ②糖尿病ありますか。あったらどんなタイプのか。 ③背骨の異状は？ ④脱臼の経験は？ ⑤眼鏡・コンタクトは使っていますか。 ⑥喫煙しますか。1日に何本吸いますか。 ⑦呼吸に問題は？（問題があったことは？あった時の薬は？タイプは？） ⑧心臓に異状は？（あった時はどんなタイプ？） ⑨高血圧ですか？コントロール中で薬なし/コントロール中薬あり/コントロールしていない（薬はどんな薬を飲んでいますか？） ⑩ひきつけ・発作を起こしたことは？最後はいつでしたか？ ⑪妊娠していますか？（3ヶ月以内/3ヶ月以上） ⑫高山病にかかったことは？ ⑬肺水腫にかかったことは？ ⑭脳水腫にかかったことは？ ⑮医者にかかっていますか？ ⑯現在薬を飲んでいますか？具体的になににか？ ⑰ただ今、海拔何メートルに住んでいますか？ ⑱今までの登山暦で一番高い山は何メートル？ ⑲他に病気はありますか？ ⑳ただ今の体調は（大変よい/良い/まあまあ/悪い）

■第2ドクターチェックはコンフルエンシア（パンパ・デ・レニャス）で。第3はBCで。

その時の血圧は 120/80 なければならない

血液中酸素は 80 以上 なければならない

水分は5~6リットル以上とり、塩分は控えめ。

◎家族同意書

今回の遠征では、2011年12月の遠征計画家族説明会の後に、隊員家族から承諾書にサインをいただいた。内容としては、法的効力を的確に満たす文面かは不明であるが、遠征参加における心証形成のためでもあり、かつ事故時のトラブルを低減するための重要な書類である。今回、大学当局に確認して頂いたところ、「登山隊に対して不服申し立て…は行わないこと」の箇所に、「大学当局」も加え、大学の立場を明らかにする必要があるとご指摘いただいた。その他、運営主体は山岳部であることと、隊員は自己責任の自己意思で参加することを明記した上で、隊員から各自の決意を表明してもらった。

遠征隊名 京都府立大学山岳部アコンカグア遠征隊2012 Expedition name Kyoto Prefectural University Alpine Club Aconcagua Expedition 2012

		(日本語)	(English)
遠征隊名	京都府立大学山岳部アコンカグア遠征隊2012	南米アンデス アルゼンチン共和国 アコンカグア	Andes, South America Republica de Argentina Aconcagua
山域		6962m	22841ft.
国地域		ポーランド氷河ルート	Polish Glacier Route
対象の山		2012年2月から3月(1ヶ月間)	17 Feb.-19 March,2012
高度		プラザ・アルゼンティーナ (B.C.)、C1、C2	Plaza Argentina (B.C.; 4200m), C1(5000m), C2(5900m)
ルート		アコンカグア登頂	Reach the summit
期間		日本	Japan
キャンプサイト		3 (男)	3 (male)
目的		藤井良太(24)	Fuji Ryota(24)
隊員の国籍		河村友裕(21)	Kawamura Tomohiro(21)
数		壽榮松孝介(20)	Suematsu Kosuke(20)
リーダー		京都府立大学山岳部(KPUAC)	Kyoto Prefectural University Alpine Club
隊員		KPUACアコンカグア遠征隊2012遠征事務局	KPUAC Aconcagua Expedition 2012 Office
所属団体		横山義靖(22)	Yokoyama Yoshiyasu(22)
連絡先		京都府京都市左京区松ヶ崎木ノ本町17-2-117	117,2.17MatugasakiKinomoto-cho,Sakyo-ku,Kyoto-city,Kyoto,Japan
名前		090-****-****	0081+90-****-****
住所		kpuac.pa2012@gmail.com	kpuac.pa2012@gmail.com
電話/FAX		http://kpuua.world.coocan.jp/	http://kpuua.world.coocan.jp/
メールアドレス			
ウェブページ			
行動予定		許可期間 : 2月23日-3月13日(20日間) 2月25日 : ベースキャンプへ移動 2月29日 : C1建設 3月2日 : C2建設 3月8日 : 登頂予定日	Itinerary Permitted period : Feb.23-March.13 (20days) 25-Feb : Approach to B.C. 29-Feb : Built C1 2-Mar : Built C2 8-Mar : Summit day

異働行程表

藤＝藤井、河＝河村、寿＝寿栄松

2012年

月	日	曜日	概略	天気	出発	宿泊地	最高高度	備考
2月	17日	金	許可	○	京都府立大学	アトランタ(米国)		日付変更線越 シアトル経由
2月	18日	土	空路	○	アトランタ	サンティアゴ(チリ)		観光
2月	19日	日	空路	○	サンティアゴ	メンドーサ・ホテルVenus		赤道越
2月	20日	月	入山準備	○	メンドーサ	同ホテル		登山許可取得、装備貸受、買い出し
2月	21日	火	入山準備	○	メンドーサ	同ホテル		バス切符購入、衛星電話試用、梱包
2月	22日	水	① キャラバン	○	メンドーサ	パンパデレーニヤス	2725	入山
2月	23日	木	② キャラバン	◎●	パンパデレーニヤス	カサデピエドラ	3200	
2月	24日	金	③ キャラバン	◎◎	カサデピエドラ	プラザアルゼンチナ(BC)	4200	BC入り
2月	25日	土	④ 休養日	○	BC	BC	4200	ドクターチェック
2月	26日	日	⑤ C1設営	○	BCからC1往復	BC	4900	
2月	27日	月	⑥ 高所順応	○	BCから4400mまで	カサデピエドラ	4400	アイスクライミング訓練後、高度を下げる
2月	28日	火	⑦ 高所順応	○	カサデピエドラ	BC	4200	藤ドクターストップを受ける
2月	29日	水	⑧ 荷上げ	○風	BCからC1(河はコルまで往復)	C1	5000	藤はBC停滞
3月	1日	木	⑨ C2設営	○	C1からC2往復(河・寿)	C1	5900	藤はC3Guanaco往復
3月	2日	金	⑩ 高所順応	○	C1からBC	BC	5000	ドクターチェック後、藤はC1へ移動
3月	3日	土	⑪ アタック	○	BCからC1(寿はコルまで往復)	C1	5000	藤はC2往復
3月	4日	日	⑫ アタック	○	C1からC2	C2	5900	
3月	5日	月	⑬ 偵察	○	C2からノーマルルート合流点	C2	6250	
3月	6日	火	⑭ アタック失敗	○風	C2からアタック失敗	C2	6377	インドネシア小屋往復
3月	7日	水	⑮ 山頂アタック	○	C2から山頂往復	C2	6962	登頂成功
3月	8日	木	⑯ 下山	○	C2からBC	BC	5900	C2・C1撤収
3月	9日	金	⑰ 休養日	○	BC	BC	4200	隊荷整理
3月	10日	土	⑱ キャラバン	◎●	BCからパンパデレーニヤス 3120m地点	3120m地点	4200	雷雨のため緊急露営
3月	11日	日	⑲ キャラバン	○	3120m地点からプンタデバカスホテル	ホステル		日本に下山報告
3月	12日	月	⑳ 隊荷整理	○	ホステル	ホステル		
3月	13日	火	隊荷整理	○	ホステル	ホステル		装備返却、手紙投函、
3月	14日	水	自由行動	○	ホステル	ホステル		藤・河は州立公園(2泊3日)の旅へ
3月	15日	木	自由行動	○	ホステル	ホステル		寿はワイナリー巡り、プエンティン
3月	16日	金	自由行動	○	ホステル	ホステル		観光
3月	17日	土	空路	○	メンドーサ	アトランタ(経由)		サンティアゴ経由
3月	18日	日	空路	○	アトランタ	シアトル(経由)		日付変更線越
3月	19日	月	帰国	○	関西国際空港			帰国祝いを受け、打ち上げ

提 言

寄稿

北アルプス遭難からアコンカグアへ

山岳部顧問 牛田一成

2009年の4月に起こした遭難死亡事故は、伊藤達夫という類いまれな登山家の強い個性にリードされてきた府大山岳部のあり方そのもの、つまり大学山岳部という組織のミッションとはなにかという問題に総括を迫る物であった。アコンカグア前史として、この辺を少し考えてみたい。

いまから20年以上前の清水岳遭難救出事件以来、山岳部は部員数1名の時代が長く続き、その間に限ると山岳部の山行とは伊藤との個人山行に他ならなかった。そしてその間の登山記録は、登攀力ということでは大学山岳部の水準を大きく超えたものだった。じっさい、成果は上がっていたのである。遭難に先立つ数年前に府大山岳部創立50周年記念会が開催されたが、そこで祝辞をいただいた斉藤淳生日本山岳会会長から「大学山岳部というと東の東海大、西の京都府大」というお褒めの言葉をいただいたほどである。

登山には、目標あるいは夢、憧れというものがある。登山の目標といった場合に、海外の高所登山に対するあこがれというものは、自分自身もそうであったが、おおよそ一般的なものと考えても差し支えないだろう。伊藤達夫は、海外の高所登山に無関心を装っていたように思えるが、彼とて全く関心がないわけではなかった。なぜなら、府大山岳部によるパキスタンへの遠征話を伊藤が僕にもちかけてきたことがあるからだ。そのときも部員は1名であったから、ライトエクスペディションでこなせる6000m余りの山を彼らは指し示してきた。しかし、カラコラムの未踏峰であれば資金援助をしてもよいというOBがおられたことで始まった話だったから、彼らが見つけてきた山に登頂記録のあることが発覚したとたん、いやにあっさりと終わってしまった。そして、伊藤とこの部員は、当時、黒部別山に残された数少ない課題であった厳冬期の大ヘツリ尾根を目指すことになったのだろう。

海外の高所登山を技術的にとらえれば、登攀行為そのものは、日本では経験できない氷河のルート工作をのぞいて、日本の冬山で経験するものと比べてたいした違いがあるわけではない。簡単に言って、黒部や劔岳の冬山より難度が高いわけではないのだ。ナムチャバルワのような山を除けば、私自身が経験したヒマラヤ登山のように、むしろ容易な方が多いかもしれない。日々のたゆまぬ努力で登攀力を高め、それを実際に検証するという観点からみれば、日本の冬山のほうが、テストとしては難しいかも知れない。彼らの転進は、こうしたコンテキストで理解すべきものだろう。

ところで登山という行為を評価するとき、登攀という技術論を語れば済むものだろうか。海外の登山の場合、まず外国政府によって定められた種々の規制をクリアする必要がある。ちょっと前までは、必要な許可証をもらうために、カトマンズの役所に朝から日参し、役人を玄関先で捕まえてサインをもらう必要があった。もっと大がかりなものでは、何年も

かけて相手国政府の外務官僚と交渉を続ける必要もあった。ようやくもらった許可状を持って現地入りするのだが、そこからの荷物の運搬も課題のひとつになるだろう。運送業者を探して値段の交渉をして契約する。大名行列的なキャラバンは、道路事情の改善とともに見かけなくなったが、それでもほとんどのところで現地の人を雇用することが相変わらず必要である。ベースキャンプまでのアプローチも、そこはすでに高所であるので、健康管理に特段の配慮が必要だ。ヒマラヤのモンスーンあけを狙うとなると雨がしとしと降る中をヒルに襲われながらとぼとぼと歩く。遠征も長期にわたると、メンタル面の管理も必要な場合がある。

こうした実践は、登攀という行為に直接関係しないのだが、登山、あるいは遠征という行為を完結するためには、お金の工面とともに必須の行為だろう。これらは、日本国内の登山では全く必要のない行為であるし、端的に言って語学力や交渉力などは登攀技術と無縁であるがゆえに、その価値を見落とされがちなものだろう。見落とされがちといえば聞こえはよいが、登攀技術に重きを置く世界観の中では、むしろ無用に貶まれてきた気がする。いつまでたっても、社会人山岳会からポーターシステムに関する論争を挑まれるのが全く理解できなかったのは紛もない実感である。ともあれ経験者の中で、つとに語られることが多い言葉は、「遠征は、日本を無事に出国できれば半分成功」「遠征は、ベースキャンプが作れたら半分成功」などというもので、海外登山というものの性質をよく言い表している。

ところで大学山岳部の使命、目的というのはなんだろう。大学という「教育研究機関に附属する装置」、そしてその「構成員が学生であるような装置」としての山岳部という意味での使命や目的である。登攀力の向上は言うまでもないだろう。それは、体育会ということの本質だし、自然の脅威から自分の身を守る唯一の方法だからだ。そしてそれは、日本の山岳登攀で達成することが可能だろう。しかし、それだけでは大学山岳部をやっている意味は薄くないか。技術を身につけるのであれば、もっと効率の良い団体もあるからだ。アカデミズムというのは、「登山も科学も中途半端」と馬鹿にされ続けてきた印象が強いが、それなくして大学山岳部に意味があるとは思えない。海外登山との関係を考えてみたいが、もちろん日本の山で自然を見ることも可能だ。山村の置かれた状況を目の当たりにして、農村経済を考えることもできるだろうし、家屋の形状から文化人類学的な思索も可能だろう。しかし、異文化の中に身を置いて、相対的に自らの文化的背景を実感する、初めて見る植生の中に身を置き、相対的に自らが生まれついた生態系を実感する、というようなことは「気づき」としては最高の実践になるだろう。交渉力とそれを支える語学力。チベットに行くならチベット語、ネパールに行くならネパール語、ブータンならブータン語、カラコラムならウルドゥ語、インドネシアに行くならインドネシア語、もちろん基層としての英語や中国語は必須になるし、パタゴニアならスペイン語がもれなく付いてくる。人間的魅力で、相手を籠絡することができないまでも、意思疎通を言語によって最低限確保するのは、書類にサインをもらうためには必須である。これらは、とりたてて「学者」を目指さない場合でも、卒業後の社会生活上、極めて有力なスキルになるはずだ。藤井君たち

の登攀記録をみていると、自然や文化に対する観察眼の不足という点が気になってしまうのだが(この報告書にも、科学的な記載の部分、文化人類学的考察の部分があることは期待薄である)、それでもベースキャンプの係官とのやりとりの様子が想像できて面白かった。係官は、退去勧告もできるのであるから、それなりの交渉力がもとめられる。

アコンカグアと最初聞いたときには、これがはたして大学山岳部としてめざす対象なのかどうか確信がなかった。たとえば北大山岳部は寒さとの戦いをつねに意識した遠征計画を持っているように思えたし、京大の場合はいわずもがなのことだが初登頂の呪縛から逃れることがかなわないままである。同志社は、西ネパールに対する思い入れがことのほか強いものに思える。それでアコンカグアという対象は、いったい何に対する挑戦と捉えればよいのかわからなかったのである。藤井君が言うように「高さ」というのは、理解できる。7000m近くあるし、南半球の最高峰だからだ。しかし、この路線は、チョモランマを目指さずには済まないものじゃないかしら。こう考えてしまうのは、この年齢になっても「探検」という言葉の呪縛が解けていないからかも知れない。それよりなにより鳴沢岳の遭難で問われた山岳部の目的や使命というのは、どのような実践で明らかにできるもののだろうか。府大山岳部の存続を認めたことについて社会に対する説明責任を有する大学に、この実践の意義をどのように評価してもらえばいいだろうか。そしてなによりも、鳴沢岳で亡くなった櫻井氏や安西氏のご家族に説明して受け入れていただけるような内容なのだろうか。というような事柄が、頭の中をぐるぐると駆けめぐっていた。

大学の歴史始まっていらい学生だけで遠征隊を組織したことがなかった。今回の遠征は、その意味で、府大にとって初めての経験である。それはとても重大なことだろう。遠征を組織するには、大人の智慧というものをたくさん身につけないといけないからだ。学生だけで3年近く計画を進めた。それも重大なことだろう。思いつきでは、3年間も計画を維持することは不可能だし、藤井君以外の隊員は、計画的に登攀力をつける必要もあつただろう。そして、お金さえ用意すれば個人参加の登山への募集はいくらでも見つかるのであるから、組織を構築する労力をおしむのであれば、個人の山行に溶解させてしまうことはいくらでもできたはずだ。それをしなかったのは、この実践を通じて、遭難以降の山岳部のあり方を表現したい、大学当局ばかりでなく、亡くなった櫻井氏や安西氏のご親族にお見せしたいという思いがあつたからだろう。

だらだらと書きすぎた。最初の一步として考えるならアコンカグアは、悪くないのかも知れない(どうせならパタゴニアという気持ちは今でも払拭できないままではあるが)。上に書いたように、この路線を続けるならサガルマータを目指して進んで欲しいものだが、まあ、その時々メンバーに応じた表現のあり方というのは自発的に生まれるものだろうから方向が変わることだって当然おこるだろう。自発的自然発生的に事がおこっているように見えて、じつは何かのこだわりが透けて見えるというのが伝統とよばれるものの表れであるとする、その伝統はこれから形成されていくことになるのかも知れないと期待している。

寄稿

チームワークによって成しえた大きな成果

京都府立大学山岳会

高岸 且

京都府立大学山岳部（以下、府大山岳部）にとって、「アコンカグア遠征隊 2012」は、最高のチームワークを発揮し、成しえることができた一つの大きな成果であった。

単一大学山岳部での海外遠征の難しさは、志向を一致させることの困難さにあり、目標を定めても、継続的にチームのモチベーションを維持することと、それを高めるリーダーの存在が重要である。また、リーダーには豊富な経験が必要である。

このたびのリーダー藤井良太君、河村友裕君、寿栄松孝介君によって府大山岳部の歴史をすすめる海外遠征が成功したことは感慨深く、嬉しいことである。すべての関係者にはあたらためて感謝したい。

府大山岳部の現役部員や OB の登山活動はパイオニアワークに根ざし、海外遠征登山でも数多くの登山の記録を残した。1965 年のディラン峰からマルビティン峰、パサーピーク、K2、ラトック I、II 峰、コングール峰などカラコルム山系での活動や 1988 年の天山山脈雪蓮峰までの約 20 年間で開拓的な登山は 10 回以上を数えることができる。

その後 2007 年までの約 20 年間は、国内での特に黒部丸山、黒部別山や劔岳を中心としたパイオニアワークを中心とした活動を行ってきた。1997 年には富澤が米国ヨセミテでの難ルートの単独登攀やヨーロッパ最高峰のモンブラン峰への単独登山を行った。この成果も究極の単一大学ではあるが、部員が極限的に少なく、活動を社会人山岳会メンバーとの連携が主となり、ソロイストとしてのクライミングとして位置づけられる。

しかし、これらの登山活動の記録は府大山岳部にとっては、個人主義的な登山活動の「踏み台」となってきた歴史ともいえる。

府大山岳部が創部 60 周年を迎える 2007 年には、藤井が 2 回生にて同志社大学山岳部との連携にて西ネパールのクビ・カンリ峰に中国側から初登頂を果たした。この経験をもとに彼は府大山岳部を前に進めてくれた。2009 年 4 月の鳴沢岳遭難事故での 3 名の仲間を失ったこともすべて受け止め、部活動の方向性を模索する中で、府大山岳部の再生のために計画されたものであった。これはシンプルであって、非常に分かりやすい内容であった。この計画は、以前から当たり前のようであってもよかったが半世紀の間、成しえることができなかったものである。

山の魅力についてよく語ったことがあった。その一つが山の魅力の三要素である。それは「高い」、「遠い」、「難しい」。これらは山岳部に入部した部員がもつ登山に対する潜在的な考えである。個人毎の山に魅力やモチベーションを高める要素でもあると考えている。3つの要素の志向やそれぞれの重みが異なることは非常に興味深い。従来の定期的な合宿での山行や個人山行の枠を超えた目標を設定しようとした際に、この 3 要素のバランスの

違いから計画がまとまらないことがよくある。余程のカリスマ性をもったリーダーの存在か、学術調査隊などでの踏査の必然性でもない限り、計画に実行までモチベーションが持続しない。

もう一つは、「6000の未踏峰、7000のバリエーション、8000のノーマル」。これは、8000m峰のすべてが無酸素で登頂された時代を背景に1980年代後半にAAVK(関西学生山岳連盟)内にて設定した海外遠征を目指す時の標語であった。すべての大学山岳部が達成可能であることとしたものであった。これらのことを藤井はよく分析ができていた。大学山岳部として在るべき姿、遠征隊参加メンバーの志向の最大公約数、分かりやすい目標設定と関係者へのメッセージをとりまとめて出来た計画であった。

- ・単一大学で現役部員による海外遠征登山
- ・遠征隊メンバーの力量を發揮できる高さ、遠さ、難しさ
- ・7000m級でのバリエーションルートからのアプローチ

以上を具現化できる計画が、「南米最高峰のアコンカグアのポーランド氷河ルート」の登山であった。この計画は2年間で計画され、予備調査から登山メンバーへの呼びかけ、OB会への協力呼びかけも参加する現役が中心となった。府大山岳部の合宿もアコンカグア登頂のために組み込まれた。これらの中で遠征には参加しない部員にも山岳部の一体感が醸成できたと考える。

この遠征ではメンバーシップのバランスのよさが、チームの安定感を感じさせられた。

藤井は、5年間の山岳部で体験したことすべてを前向きな思考に結びつけ、チームを結成し、その中でバランスの取れたリーダーシップを發揮した。河村は持ち前のパーソナリティでチームの目標達成を支えた。決して無理な背伸びはしないで、確実に目標を達成していく。寿栄松は、先輩の背中を見て我武者羅に、自らできることまたすべきことを探し、その力を發揮した。また、次期リーダーとして在るべき自覚を刻み込んだ。横山は在京連絡として重要な一員として常に責任感をもって参画した。

社会の一員として社会経済活動を行う前の学生時代には、多くの課題を自ら課して、その解決に対して努力し、成功するために苦勞することが望ましい。いくつもの失敗を繰り返し、それを乗り越え、また次の挑戦に昇華していくことで成長する。この遠征を通じて得た経験は目標や目的は違っても一般社会において、同様にして常に求められる課題と同様のことである。

今回の登頂の成功は各自の満足を得られる結果となったであろう。もちろん、当府大山岳部にとっては確実に大きな一歩となった。今後のためには、この経験をもとにこれからも、その時代やメンバー、社会環境の中で大学山岳部にてできること、すべきことを部員それぞれが自ら考え、パイオニアワークを目指してほしい。また、当初の計画であったポーランドルートからトレースできなかったことの原因や対策を今一度分析し、今計画の延長線上に捕らわれることなく次への課題解決に取り組んでほしい。

以上

寄稿

学生らしい発想

京都府立大学山岳会

中村琢磨

最後の 8000m 峰、シシヤパンマ (8027m) が登られてすでに 49 年が経とうとしている。山の標高や難易度といった安直な尺度での登山の時代は既に終わって久しい。また、装備（ゴアテックスのジャケットや快適なシュラフ）の革新やインターネットの普及による情報の共有化により、ヒマラヤの高峰登頂合戦の頃（1950-60 年代）に比べて、ハード・ソフト面双方で非常に恵まれた条件で登山が可能となった。その一方で山行のテーマは多様化し、何をすることが挑戦的な課題なのか、頭を悩ませている山岳会や登山家は多い。

本報告書にて、アコンカグア遠征の全容が詳細に語られている。また、山岳部の後輩や山岳会会員次なる遠征についても藤井隊長が提案している通りだと思ふ。要するに「山に登る行為」にどのような意義を見いだせるかは、登山者の価値観やポリシーにかかっている。小生自身はヒマラヤなどの辺境に憧れながらも未だその地を踏めていないことから、現役諸君には学生のうちにやりたいことには片っ端から挑戦して欲しいと考え、そのためには出来る限り援助したい。幸いにも、この輝かしい記録の末尾に拙文を載せていただけるとのことなので、OB としての考えを述べ現役の皆さんへの応援とさせていただきます。

ここ最近、私は仕事の合間に衛星の観測データに基づいた地形概念図の作成方法について検討している。上記のとおり、自分は世界の山々についてまだまだ全然解っていないという思いがあり、地域ごとに地形概念図を作ってしまうおもうと思立ったのである。無償でウェブからダウンロードできる程度のデータは解像度も粗いため、詳細な地形図は別途必要となるだろうが、事前調査には十分過ぎる情報を与えてくれる。この作業で膨大な情報がウェブから引き出せることを実感したが、その詳細は別の機会に譲ろう。重要なことは、調べればいくらかでも登山の対象となる山があるということだ。雑誌の山行記事のように派手なルートもあれば、ほとんど知られていない山もあるだろう。現役の諸君もよくよく書籍やウェブの山行報告を渉猟し、自分たちの本当にやりたいことを見つけ出してほしい。

遠征の計画はまずは山行の目的=テーマだろう。最初に山ありきで計画する方法もあるが、その方法は視野を狭めてしまうきらいがあるのでここでは述べない。また、京都府立大学の山岳部・山岳会で実践できる範囲でテーマを設定した方が選択肢は多い。テーマというと漠然としているなら、「やりたいこと」に置き換えてもいい。その上でテーマを実践できるフィールドを探していくのである。

対象山域の絞り込みは 3 つのチェックポイントがある。1 つ目は標高やルートの難易度など技術面での実現可能性である。これは隊員の体力・技術的な練度から判断する。2 つ目は経済的な問題だ。渡航費の他に山域によっては高額な入山料が必要な場合がある。これは、山岳会からの援助なども考慮に入れて試算してみるのがいい。最後に現地の政治状況であ

る。山岳地域は国境と重なることが多く、係争地になっていることもあり入境すらできない地域もある。これらのチェックを全てクリアできる山岳が決まれば、その山を登るための具体的な計画を考えていく。計画の進め方は、本報告書に記録された方法論を参考にするとよいだろう。

小生がすぐ思いつく範囲では、ロシア南部、トゥバ共和国とゴルノ＝アルタイスク州にまたがる西サヤン山脈やアルタイ山脈は 3000～4000m 前後と標高は低いものの地形の変化に富みおもしろい地域である。砂漠からステップ、ウッドランド、森林、高山ツンドラと標高によって植生が移り変わる。また、動物では砂漠に適応したモウコノロバや地リスから、森林地帯に住むオオカミやハイイログマ、ユキヒョウなど貴重な生物が数多く生息する。さらに、文化的にも古くから交易の要衝であったため、東洋・西洋の人と物資が行き交い興味が尽きない。小生は 2007 年の夏に 2 週間あまり、植物の調査でこの地域を訪れた経験があり登山の対象として優れた資質があると感じた。ここに挙げた例はほんの一部であり、他にも魅力的な山は数多い。しかし、学生で居られる時間は限られている。その範囲内で現役の諸君たちがやりたいことを出来るのがもっとも望ましい。いずれにせよ、現役の諸君の最もやりたいことをできればそれに越したことはない。そのためなら、可能な限り援助を惜しまない。学生らしい若々しいパワーと自由な発想を期待したい。

提言

2011 年度を振り返って

2011 年度山岳部主将
河村友裕

随筆では個人的にアコンカグア遠征を振り返ったが、今回は遠征当時の主将という立場で遠征を振り返ってみたいと思う。

まず山岳部の主将という立場はどのようなものなのか。主将はそのときの部の最高責任者であり、その年度の年間計画を主に打ち出し、その計画に沿って部を運営するリーダーである。従って、部の様々な事項における最終決定権は主将にあるため、その年度の山行はその時の主将の意向が反映されやすいと言える。特に常に部員数の少ない府大山岳部ではその傾向が強かった。

このことを踏まえてアコンカグア遠征が行われた 2011 年度を見ていくと、当然大部分の山行は最終的にアコンカグア遠征を意識したものであり、アコンカグア遠征の計画に沿って運営された年度であったということが言える。皆が遠征という明確な目的意識を持っていたため、大部分の山行は計画が頓挫することなく実行され、部の運営もスムーズにできたと思っている。

ただ、主将がリーダーとして部を引っ張っていったか、と言われれば答えは「ノー」である。当時の主将は私であるが、とりわけ遠征に関しては隊長の藤井さんに頼ってばかりであった。わかりやすく言うと、私は、藤井さんが遠征に向けて必要だと考えた山行の提案を、実行するまでに持っていただけである。つまり、当時の私には主将としてあるべき主体性が欠如していたと思う。

ポーランド氷河ルートを結局登ることができなかった遠因はここにあると思う。何より、私の中には藤井さんの高度順応が思わしくない状況を目の当たりにするまで氷河ルートのリードは当然藤井さんがするものだ、と無意識に思っていた。そんなことを思っているから、いざ自分がリードしなければいけない状況になったときにどうしようもなくなってしまった。

もし当時の自分が、氷河ルートをリードするのは自分だ、という気概をもっていたら、自身の登攀力を向上させる計画を積極的に取り入れる等して、自信をつけ、結果的に氷河ルートを登ることができたかもしれない。主将にとって大切なものの一つはそういった気概であると思う。

主将にとって大切なものを確実にもう一つ言うことができる。それは、全部員の命を請け負っているという自覚である。山で死なない、死なせない。このことは登山において最前提のことであり、主将をやった 1 年間で皆、大きな怪我なく登山に打ち込めたのはよかった。アコンカグア遠征も皆、全員無事に下山できたという点は、当然のことではあるが、重要なことである。

今後、登山をする後輩たちに私個人として干渉したいことは特にはない。なぜなら登山は他のスポーツとは異なり、本質的にルールがないからである。「登山は文化である」という人もいる。最低限、他人への迷惑や大怪我のない範囲であれば、自由に行えばよい。

しかし山岳部として、海外遠征のような大きな事業を実現するためには、自由だけではできないことが今回よくわかった。「自由」以外にも様々な要素が必要であることがよくわかった。その要素とは、社会人としての常識を持った上で、純粋な動機のもとでの行動を続ける能力である。一人の人間として、当たり前なことを当たり前に行える能力である。

遠征のために普段からできることを一つだけ挙げるとすれば、それは、より困難な目的を目指していくことである。なぜならば、向上心なくしては、人も組織も後退するばかりだからである。より具体的に目的を決めて動けば、より具体的な答えが返ってくるはずだ。形だけの海外登山ならば今日誰にでもできる。金さえ積めばと豪語する登山もあるが、その登山にどんな意味があるのか考えてほしい。

登山において「上達すれば上達するほど、安全になる」という考え方は正しい。上達とは、もちろんクライミング能力や雪山経験だけを言うのではない。どんな状況でもあきらめず無事生きて下山できる知恵を身につけることである。それさえ出来れば楽しい登山ができる。しかし経験すればするほど、登山にそれぞれの個性が出てくる。登山は、本質的なルールはなく、その人らしさ（考え方・姿勢・能力）がそのまま表れるものである。その中には、死をともしなう重大過失につながる可能性も含まれる。山登りに絶対はない。だからこそ、自身を目的達成のために制御することが必要になる。つまり、今あるルールを知り、ルールの中で動ける能力が必要だ。このことはすなわち、社会生活と同じである。人生を生きることに自体にルールはないが、ルールの必要性がなければ現在のような法律はないのである。若者は社会に対して反骨的になり、ともすれば逃げたがる。その次の段階は、ルールを利用し、ルールを作り、自己実現を果たすことである。

社会的なルールに従い、常識のある行動ができて初めて、高度な登山ができると考える。ただし問題は現行のルールがすべて正しいとは限らない。生きていく上で知る必要のあることは自然のルールである。だからこそ、自然からそのルールが正しいのかどうかを学ぶことのできる山登りは人間の成長に必要である。つまり、登山を主体的にルール化しスポーツにするのである。もちろん、そのルールを知った上でどう行動するかもすべて自己責任のもと自己判断で行うものである。

登山のルールには大きく二つの要素がある。一つは純粋な自然のルールであり、もう一つは自然の中における人間の行動（人間側のルール）である。前者を知ることは基本であるが、後者を知ることが遠征には重要なのである。これを無視しては、総合力は1人分にしかならない。「自由な登山」の実現が難しいのはこの点の認識が足りないからだと考える。

登山自体は自主的な行為であり他人にとやかく言われるものではないが、要は怪我をしないように勝手にやればよいというものではないという自覚が必要である。もちろん、「誰かのために」ではなく、「自分のために」である。基本的には、登山も、国内外問わず自身の思うように自由にやってもらいたい、このような考えを私は遠征の体験から得たということをも明記しておきたい。本遠征が他の遠征とは異なる特筆点は、以下の三点である。

① 「自分たちの部活（小さな大学の一学生団体）」のみで行なったこと

私たちの山岳部にとって一団体として実行する海外登山は初めてである。山登りにおいても、新たに未知なる領域に踏み込む気概こそが価値ある挑戦につながると考える。

② 自由な活動を選択できる中で、一つの計画を二年間で、やりぬいたこと

遭難事故後の一年間は、事故の原因究明と今後の対策をまとめ、議論と実行を繰り返した一年だった。それから作成した二ヶ年計画、それを高いモチベーションと強い動機でやり遂げた。二年間は決して短くない時間であり、逃げ出したい気持ちやあきらめなども闘った。そして出発までに課した課題をクリアし、努力の成果としての南米最高峰登頂を果たし無事に下山した。衰退している大学山岳部を復活させる勢いを取り戻した。

③ 初の海外高峰を、より困難なルートから目指したこと

私たちは当初からノーマルルートではなく、ポーランド氷河ルートを狙うために、アコンカグアを選んだ。結果的には高所順化の遅れや体調不良などで念願のルートをトレースすることは叶わなかったが、氷河の末端に到達するまで挑戦する気持ちをあきらめずに登った。無事帰還は最低限の課題であるが、自身の成長のためにより高い目標を掲げることで、チームの向上心と結束力を高めた。

繰り返しになるが、登山が基本的に自由なことはすでに分かりきったことである。自由であるからこそ、どれだけ自主的に人間の意志でルールを作り、人間のルールを制限して、目的を達成できるかが重要となる。山頂はひとつの大きな目的ではあるが、ただ山頂に立てばいいわけではない。難易度の高いルートのみには価値があるのではない。独創性や未知への挑戦にも大きな価値がある。一人の登山者として「より自律した行動を行えるようになること」「より正しい選択を行うこと」「人間としてより高い水準に成長すること」こそが、私が目指した真の目的である。登山そのものが楽しいのは事実であるが、登山行為自体は、学生にとって自己研鑽のための修行であり、命を賭けた大自然でのスポーツである。登山が困難となる要素はルートの難易度だけではない。単なる海外登山にも、もはやそれほど大きな価値はない。私たちは、自分たちで選んだ山を、自分たちクラブのチームワークで、個人とクラブの成長のために二年間取り組みやりぬくことの「困難さ」を目指したとも言える。この点においては、単なる初登頂にこだわった海外登山や流行にのった派手なクライミングと比べても、大きく勝っている点であると言える。これらを理解しないかぎり、今後京都府立大学山岳部が、今回の遠征を越えることは不可能であろうと思われる。遠征を終えた私たちも、まだまだ未熟な人間であるが、昨今の登山事情の中で、私たちは自分たちが誇れる登山を行ったという自信がある。これを越えることのできる登山が、後輩の計画から出てきてくれることを一先輩として心から願うばかりである。

その他 自由記述 参考情報

■アルゼンチン Republica de Argentina、首都ブエノスアイレス、人口 4013 万人、面積 278.4 万 km²、民族はスペイン・イタリア系白人が 97%、言語はスペイン語、宗教はローマカトリックが 92%、通貨はアルゼンチンペソ(\$)である。メンドーサ Mendoza 市は、西部アルゼンチンに位置し、チリとの国境のメンドーサ州の州都である。地中海性気候であり、ワインの生産が盛ん（アルゼンチンの約 7 割）

■よく使うスペイン語（スペイン語はスペイン及び中南米の約 20 カ国約 4.2 億人が使用する言語で、フランス語、イタリア語、ポルトガル語に似ている。母音の発音 AEIOU は日本語と一緒に。名詞形容詞に性別が付いており、動詞の活用などは英語より難しい）

Buenos dias/Hola（おはよう）Me llamo Fujii（藤井と言います）Much gusto（よろしく）Buenas Azul(青)、Blanco(白)、Negro(黒)、Socoro!(助けて)

■アコンカグア周辺で見かけた野生生物

動物：グアナコ、三色イグアナ、コンドル、
蝶（ベニチョウの仲間）数種



植物：ポプラ、ヤナギ、草本（*Oxalis eritorrhiza*, *Adesmia capitellata*, *Cirsium* sp.）

アコンカグアを含むアンデス山脈では、高地の厳しい環境に適応した一部の生物しか分布できず、生物多様性は低い。標高 4000m を超えると、植物は背丈 40cm 以上に育たない。草地は 2%ほどで、ステップが 30%あり、その中でアンデス高山性植物の 80% が生育している。動物は、グアナコ Guanaco やピューマ Puma などの大型哺乳類のほか、鳥類が 61 種以上と多く、爬虫類や両生類もわずかに生息する。

●持っていけばヨカッタ

みそ、醤油、小型(300ml 程度)ペットボトル（現地購入の調味料容器は漏れやすい）、粉ミルク、大きめの強度があるゴミ袋、携帯無線機(違法であるが)、パインアメ、温度計、お茶漬けの素、デジカメ予備バッテリー、スペイン語本・辞書(街にデポしてしまった)、調理用小瓶、テント用大型テルモス、初日の野菜・果物、

●こうしたらヨカッタ 毎日日記(困難)、下山デポ(帰りで必要な消耗品などをデポする)

●持っていってヨカッタ

のりたま、錠鍵、ポリ袋多数(もっと大きいサイズがあればなおよし)、やかん、コップ、セームタオル、安定するガスヘッド、カレー、アルコール入ウェットティッシュ、酢(脱疲)、炊事具(しゃもじ、菜箸、まな板、包丁、ピーラー、お玉など)、海藻サラダ(食べやすい)、土嚢袋、

参考文献 & 参考 Web ページ

Aconcagua Summit of the Americas by Mauricio Fernandez (2008) Summit EDITIONES
Aconcagua a climbing guide Second Edition by R.J.Secor (1994) THE MOUNTAINEERS
アコンカグア公式 HP <http://www.aconcagua.com.ar/>

在アルゼンチン日本大使館 http://www.ar.emb-japan.go.jp/index_j.htm

アコンカグア天気情報 <http://www.mountain-forecast.com/peaks/Aconcagua/forecasts/>

ACONCAGUANOW ライブカメラ <http://www.aconcaguanow.com/indice.php>

地球の歩き方 アルゼンチン・チリ

「登山技術全書 12 海外登山」中村 進／著 2007 年（山と溪谷社）

「富山県山岳連盟創立 60 周年記念事業アコンカグア報告書 2009」 富山県山岳連盟

「アンデスの白い鷹」芝浦工大ペルー・アンデス遠征記録 1967 年 加藤 幸／編

アコンカグア南壁（禿博信・山本正嘉）「岩と雪」1981 年 1 月号（No.83）

「アコンカグアでアルパイン ポーランド氷河ルート（2004 年 12 月 - 2005 年 1 月）」

丸山武志／記 CMC(Climbing Mate Club) Web site

<http://cmc-jp.net/modules/chronicle/index.php/chr041218Aconcagua.html>

アコンカグア ポーランド氷河ルート（2000 年 1 月）「岳人（No.636）」神谷／編

（Web 版）<http://climbing.x0.com/special/acon2000/index.html>

チームアコンカグア'01 - '02 登山報告 <http://www.aconcagua.6ch.bz/>

南米トレッキング情報 http://www.patagonia-guide.com/acn/acn-park/acn-park_rule.

南米アンデス：アコンカグア(標高：6962m)遠征 2006.12.13~2007.01.06

<http://www.arashi.fuyu.gs/2006/sub19.htm>

その他 アルパマヨ北西稜登攀（1973 年 5-8 月） 日本大学三桜会遠征隊

ヒリシャンカ南東壁（1973 年 5-7 月）東京露草登高会登山隊

早稲田大ペルーアンデス 2006 各記録など

概 略 (Summary)

We, Kyoto Prefectural University Alpine Club (KPUAC) members, climbed Mt. Aconcagua, 6962m, Summit of the Americas on March 7th, 2012. This is the first expedition climbing which only students of our Club team have made. We planed this climbing abroad on May 2010 and had been trained for almost 2 years to climb Mt. Aconcagua via Polish glacier route as a student team of KPUAC Aconcagua expedition 2012.

The caravan started from Punta de Vacas on February 22th along the Vacas valley and we reached Plaza Argentina (Base Camp, 4200m) on February 24. Since February 26th, we started to carry baggage up from BC to Camp1 (4900m) and Camp2 (5850m). At the same time, we tried to adapt high altitude. But, all members suffered from mountain sickness. Especially our leader Fujii was said by BC doctor stay at BC because Fujii's adaptation was behind.

Because of the term of weather, condition and accuracy of reaching to Summit, we gave up climbing the top via Normal route instead of the Polish glaciary route. On March 6th, we tried to get the summit but were defeated by the strong windstorm at the Refugio Independencia, a small wooden shelter at 6380m. On the next day, we started from Camp 2 at 4:10 a.m. and reached the summit at 0: 20 p.m. under very fine weather.

We believed that this expedition is a new step for KPUAC history and revived taking advantage of teaching of the accident at Mt. Narusawa 2009.

We have a lot of thanks to everyone who had been supporting us for everything.

Period of the expedition: February 17th to March 19th, 2012

Name of the expedition: Kyoto Prefectural University

Summitters:

Expedition leader	Fujii Ryota	(Age 24)
Climbing member	Kawamura Tomohiro	(21)
Climbing member	Suematsu Kosuke	(20)

高み目指す精神 復興を



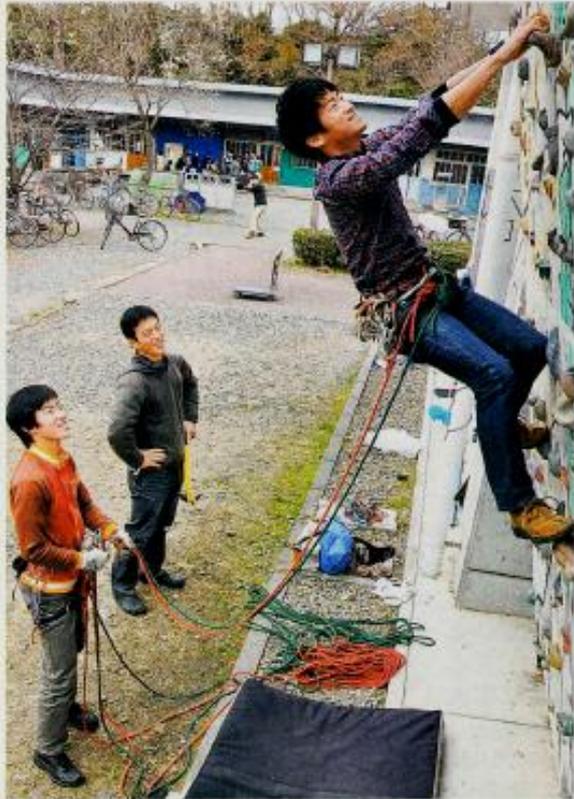
村友裕さん(21) 京都府左京区Ⅱ、2年 壽榮松孝介さん(20) 南区Ⅱの3人。

府立大山岳部 南米最高峰へ

挑戦するのは、大学院1年 藤井良太さん(24) 長岡京市奥海印寺Ⅱ、主将の3年河

京都府立大(京都市左京区)の山岳部員3人が2月から3月にかけて、アルゼンチンにある南米最高峰アコンカグア山(6962m)の登山に挑戦する。

2009年、北アルプスで部員2人とゴーチをくすくす遭難事故があり、活動を縮小した時期もあったが、「高峰に挑む学生山岳部の姿を復興させる」との思いで憧れの頂を目指す。



山岳部は、毎年冬に日本アルプスなどの縦走を行い、藤井さんも個人的にチベットの未踏峰登山に参加するなど精力的に活動してきた。しかし09年4月、北アルプス・鳴沢岳の遭難事故で藤井さんの先輩、後輩の部員2人とゴーチが亡くなり、2度と事故を起こさぬよう原因の究明に力をこめた。

山岳部は、毎年冬に日本アルプスなどの縦走を行い、藤井さんも個人的にチベットの未踏峰登山に参加するなど精力的に活動してきた。しかし09年4月、北アルプス・鳴沢岳の遭難事故で藤井さんの先輩、後輩の部員2人とゴーチが亡くなり、2度と事故を起こさぬよう原因の究明に力をこめた。

注いだ。

部員遭難事故乗り越え

難ルート挑む

アコンカグア山の登頂を目指し、ロープ技術の確認をする壽榮松さん(右)と藤井さん(中央)、河村さん(京都市左京区・京都府立大)。

遠征とあって、10年秋から訓練を開始した。富士山で高地トレーニングをしたり、雪の北アルプス、南アルプスの縦走に挑み、厳寒下での山岳技術を高めてきた。

今回のルートは「ポーランド水河ルート」と呼ばれ、一般ルートと異なり水河の通過があるため難易度が高い。また、標高が高いため酸素が少なく、12日間かけ高地に順応しながら進む。学生パーティーが同ルートに登るのは珍しいという。

藤井さんは「事故の教訓を生かして自分たちの力で高峰に挑み、先輩の可能性を広げたい」と意気込みを語り、河村主将は「アコンカグアの経験をもとに、いずれは未踏峰に挑戦して自分だけの足跡を描ければ」と話している。

(辻智也)

御 礼 (支援企業・協力者・協力団体一覧)

このたびは京都府立大学山岳部アコンカグア遠征隊に多大なるご支援ご協力をしていただき誠にありがとうございました。ご支援のおかげで無事に全員登頂を成し遂げて帰国することができました。頂いたご厚意を決して忘れず、遠征の経験を次世代につなげ、さらなる京都府立大学山岳部の発展に尽くしていくことに、隊員一同、努めていく所存であります。何かと至らない私どもですが、今後ともお力添えのほどよろしく願いいたします。

○支援企業・団体 株式会社モンベル、株式会社イスカ、国立登山研修所

ご寄付をいただいた皆様【順不同・敬称略・略称等お許しください】

○京都府大山岳会(OB会) 正井 俊郎、鹿田 晴彦、中村 旭、小坂 芳郎、中島 諒
中村 喜行、竹村 義弘、松村 一郎、武居 三郎、加藤 清和、辻 尚子、元井 賢一
高岸 且、下西 勲、中村 琢磨、鹿田 晴彦、塚本 珪一、佐藤 肇、三牧 建一
新谷 岳史、塔下 守、井川 裕、瀧野 眞二郎、加藤 真人、高田直樹

○京都府立大学関係者 渡辺信一郎学長、竹葉 剛前学長、学生部関係者のみなさま
森林科学科教員のみなさま(池田先生、上田先生、田中先生、長嶋先生、小林先生、古田先生、高濱先生、三好先生、川田先生、高原先生、松谷先生、松村先生、美濃羽先生、宮藤先生、糟谷先生)、渊上さん、植苗さん(演習林)、森林計画学研究室(F2)のみなさま
森林植生学研究室(F6)のみなさま、森なかまのみなさま

○その他関係者 野口和也氏(立命館大学山岳部 OB)、早稲田大学山岳部のみなさま、
和田豊司氏(同志社大学山岳会・クビ・カンリ2007隊長)、京都府立大学WV部およびOBの
みなさま、辻 智也氏(京都新聞記者)、西乙訓 WV 部元顧問のみなさま(田中先生、小泉先生、西山先生、栗山先生)、隊員友人(村上英志氏、中塚信明氏、栗原正史氏)

上記の方々からは、たび重なるご支援ご協力とともに、常に温かい励ましと叱咤激励をいただきました。また計画承認の際には、本学の学長をはじめ、野口祐子学生部長(当時)、学生部職員の方々にはご迷惑とご心配をおかけし続けておりましたが、ご理解いただき計画を受け入れてくださり応援いただいたことに感謝します。他にも隊員家族を含め、多くの知人友人の方々からも有形無形のご支援ご声援をいただきました。また、山岳部顧問の牛田先生には、最初から最後まで常に私たちの味方として豊富な経験からの貴重な御助力をいただきました。この遠征は、本当に多くの方のご理解とご協力のたまものであると実感しております。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

南米大陸の最高峰登頂からちょうど丸一年。報告書の完成がこれほど遅くなり、OBや他の関係者の皆さまにご迷惑をおかけしてしまいましたことには心からお詫び申し上げます。私自身、報告書の編集担当を務めながら、就活や学業に忙しかったことを差し引いても、指示の不徹底や連絡不足など至らぬ点が多々あり、まだまだ人間的に未熟なことを自覚する日々であります。また、報告書の内容にしても、府立大初の海外遠征報告書としてできるだけ次の世代に活かせる内容のものを作ろうと頑張ってきましたが、決して当初の思惑通りにはならず、能力の足りなさから不首尾な点、説明不足、誤字脱字等、多々あるかと思えます。ですが、この報告書の発行をもちまして、私たちの遠征はようやく幕を終えられる訳でありまして、おかげさまで次の一步も大きく踏み出したいと考えております。

この報告書は、私たち隊員や山岳部にとって価値ある記録であり、鳴沢岳遭難事故の反省からの新しい第一歩になるよう願います。無事帰還できたことも、また鳴沢岳の三人が見守ってくださったおかげであるとも思います。まだまだ成長途上である私たちですが、ご支援ご協力いただいたみなさまがたにはぜひ本報告書を御一読いただき、忌憚ないご意見やご指摘をいただき、それらが少しでも今後の価値ある山登りに役立てられれば、それはひじょうに幸いなことと存じます。これからもよろしくお願い申し上げます。

京都府立大学山岳部 藤井良太

平成 25 年 3 月 31 日 発行
(非売品)

編集責任者 藤井 良太

発行：京都府立大学山岳部

アコンカグア遠征隊 2012

KPUAC Aconcagua Expedition 2012

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

印刷：大学生協 ブックプリントセンター

大学生協京都事業連合会

京都市左京区高野玉岡町 23-3